

The IDE logo consists of the letters "IDE" in a bold, white, sans-serif font, centered within a solid blue square.

IDE

2019 年度 IDE 大学セミナー報告書

学修成果の可視化をめざして

IDE 大学協会北海道支部

2019 年度 IDE 大学セミナー 報告書

学修成果の可視化をめざして

IDE 大学協会北海道支部

編集

細川 敏幸 (北海道大学 高等教育推進機構 教授)

山本 堅一 (北海道大学 高等教育推進機構 特任准教授)

2019 年度 IDE 大学セミナー 報告書

目次

プログラム	1
概要	3
開会式とオリエンテーション	7
1. 特別講演 1 岩手大学の試み:e-ポートフォリオの活用	9
2. 特別講演 2 学修ポートフォリオの運用と課題	
-SOJO ポートフォリオシステムの構築をととして-	47
3. シンポジウム テーマ 北海道における可視化の展開	91
3.1 アセスメント・ポリシーの導入	92
3.2 札幌学院大学の IR の取り組み	118
3.3 国立高専における教育の質保証の取り組み	128
3.4 アセスメント・チェックリストの利用	157
3.5 総合討論	174

プログラムと概要

2019 年度 IDE 大学セミナー「学修成果の可視化をめざして」

プログラム

令和 1 年 8 月 30 日(金)

ホテル札幌ガーデンパレス(札幌市中央区北 1 西 6)

- 13 : 00 受付**
- 13 : 25 開会式**
 挨拶 北海道大学理事・副学長 長谷川 晃
 司会・オリエンテーション 北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸
- 13 : 30 特別講演 1**
 「岩手大学の試み：e-ポートフォリオの活用」
 岩手大学 教育推進機構 准教授 江本 理恵
 司会：北海道教育大学長 蛇穴 治夫
- 14 : 15 特別講演 2**
 「学修ポートフォリオの運用と課題
 -SOJOポートフォリオシステムの構築をとおして-」
 崇城大学 総合教育センター 教授 藤本 元啓
 司会：北海道科学大学長 渡辺 泰裕
- 15 : 30 シンポジウム**
 テーマ「北海道における可視化の展開」
 シンポジスト
 帯広畜産大学 講師 斉藤 準
 札幌学院大学 教授 石川 千温
 苫小牧工業高等専門学校 副校長 村本 充
 北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸
- 18 : 00 閉会式**
 挨拶 北海道大学理事・副学長 長谷川 晃

概要

平成30年4月から施行された認証評価に関する省令の改正では、大学評価基準に定める項目のうち、内部質保証に関することについて、重点的に認証評価を行うものとするのが定められている。次の大学機関別認証評価の重要な評価基準となることから、教育の内部質保証に係る取組のひとつとして、アセスメント・ポリシーの設定等による学修成果の可視化が求められている。

今年度の北海道地区IDEセミナーは、アセスメント・ポリシーを積極的に導入している国内の事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画した。

1. 主 催 IDE大学協会北海道支部・北海道大学共催

2. 主 題 「学修成果の可視化をめざして」

3. 日 時 令和元年8月30日(金)

4. 場 所 ホテル札幌ガーデンパレス

5. 構 成

・特別講演1「岩手大学の試み:e-ポートフォリオの活用」

岩手大学 教育推進機構 准教授 江本 理恵

・特別講演2「学修ポートフォリオの運用と課題ーSOJO ポートフォリオシステムの構築をととしてー」

崇城大学 総合教育センター 教授 藤本 元啓

・シンポジウム「北海道における可視化の展開」

司会:北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸

シンポジスト

「アセスメント・ポリシーの導入」

帯広畜産大学 人間科学研究部門 講師 斉藤 準

「札幌学院大学の IR の取り組み」

札幌学院大学 経営学部経営学科 教授 石川 千温

「国立高専における教育の質保証の取組み」

苫小牧工業高等専門学校 創造工学科 教授・副校長 村本 充

「アセスメント・チェックリストの利用」

北海道大学 高等教育推進機構 教授 細川 敏幸

1. 特別講演

最初の特別講演は、国立の総合大学で e-ポートフォリオを導入している岩手大学の江本氏にお願いした。次に要約する。岩手大学では、「教育の内部質保証システム」に必要なデータの収集等を行う仕組みとして、ICT を活用した情報システム「I² Folio(アイフォリオ)」を開発し、平成 28 年度の入学生から運用を開始している。

アイフォリオは 2 つのシステムから構成される。1 つは「履修状況見える化システム」で、学務情報システム上の自身の状況(取得単位や成績、履修中の科目等)を Web 上で「見る」ことができる。もう 1 つは、「達成度自己評価システム」で、「学位授与の方針」をはじめとした各種自己評価を行うためのシステムである。

「達成度自己評価システム」では、学生は学期末に 5 つの自己評価を登録する。「学位授与の方針」の達成状況、「履修科目」の学修状況、「全学の学位授与の方針(学士力)」の達成状況、「1週間の時間の使い方」、「学期中の学修体験」である。この他、目標や成果等を記入して、教員からコメントをもらうことができ、教務委員会主導で組織的に活用している学部もある。

さらに本システムには、学生が取得した単位から「学位授与の方針」の各項目の「達成量」を、各教育プログラムで策定した「カリキュラム・チェック・リスト」に基づいて算出する機能もあり、学生は自己評価時にグラフとして確認できる。

平成 28 年度に入学した学生より年次進行で運用を行った結果、各入学年度で 9 割を超える学生が自己評価を登録している。岩手大学では、このようにして得られたデータを集計・分析し、資料を作成して、当該学部の教授会で報告を行っている。

今後、本来の目的である教育の内部質保証システムを動かすためには、これらのデータを基に、学部が主体的に「レビュー」を行い、自らの教育カリキュラム等を改善する活動が行われることが期待される。

次の特別講演2は、崇城大学においてポートフォリオシステムを導入している藤本氏であった。要約すると、ポートフォリオ導入にあたっては、まずシステム構築の目的を明確にすることが重要である。つまり、自学の教育にどのような変化をもたらすことができるか、教育プロセス全体をいかに向上させることができるかである。次に、①学生の強みと弱みの確認はできているのか、②システム構築のコンセンサスは得ているのか、③誰が、どの部署が先導するのか、④運用は大学全体、学部、学科、単独科目なのか(カリキュラム上の位置づけ)、⑤継続的な資金支援は可能なのか、等々についての確認も必要である。本学の「SOJO ポートフォリオシステム」(「入学時自己診断シート」「学期末活動報告書」「学生面談カルテ」「科目の学修到達度レポート」「今週の活動とトップニュース」)の目的は、学生が自然に PDCA サイクルを回す習慣を身につけ、学修エビデンスにもとづく自己評価と相互評価とによる振り返りを誘発し、学修意欲の促進を図ることにある。つまり、「教えられる」「与えられる」という受動的な学びの姿勢から、「自ら学び、発見し、解決する」学修スタイルへの転換と、振り返りによる自己管理能力・将来設計能力の向上を目指す支援ツールである。この繰り返しと教職員のフィードバックとによって、生涯学習とキャリア管理の基本的な能力を身につけることになる。その目的は、①学生には「生徒から学生へ、そして社会人へ」の意識転換、②教員にはプロセス評価への転換と FD 推進、③職員には IR 活動へ向かわせることにあり、本学改革の「はじめの一歩のしかけ」と考えている。学生の人的成長を促す教育を実践する大学になるための様々な教育研究施策を具現化するには、教職員はもとより、学生自身の意識改革をもとまなければならない。その推進ツー

ルのひとつとして、本システムの活用成果に期待している。

2. シンポジウム

次のシンポジウムでは、各講演者がおよそ 20 分で各大学の活動を発表した。帯広畜産大学の斉藤氏は、次のように話された。帯広畜産大学では、2017 年度にアセスメント・ポリシーを導入し、その運用を開始した。本学のアセスメント・ポリシーは、学生が CP(カリキュラム・ポリシー)の定めるカリキュラムに沿って学修を進めることで、DP(ディプロマ・ポリシー)に掲げる資質・能力の修得がどのように達成されているかについて、複数の方法を用いて多角的に評価・検証することを定めている。具体的には、個々の授業科目における単位審査、修得単位に基づく進級審査および卒業審査に加え、学修ポートフォリオを用いた学修状況の自己評価、学修到達度試験と学修行動調査、および学修到達ルーブリックによる客観的評価などを行うこととしている。そのほか、アセスメント・ポリシー導入までの経緯と、導入後の運用実態、およびその課題に関して解説した。

続いて札幌学院大学の石川氏の講演を要約する。札幌学院大学では、2013 年度から教学 IR プロジェクトを立ち上げ、さらにそれを進化発展させた教学 IR 委員会を 2017 年度に発足し、学生に関わる様々なデータの集約と分析を行っている。しかし、IR の分析結果を DP, CP, AP(アドミッション・ポリシー)の策定や改善に繋げるプロセスに反映したり、アセスメントポリシーの実効化へと展開する取り組みはいまだ不十分な状態である。その原因としては、分析結果の曖昧性が大きいことや、学長以下執行部の教学ガバナンス、経営サイドの方針などの組織的問題などが考えられるが、一部の学部学科や部局では、IR を次年度の事業計画の根拠資料として活用する例も出てきた。

今年7月に出された IR 分析一次報告では、2011 年度入学者から 2015 年度入学者までの学生が 4 年間の学生生活でどのような学修成果を収め、卒業(退学、休学、その他)していったかを、各部局の所有するデータを集約し分析している。それにより、学生の入学前の状況、入試状況、正課科目、課外活動、就職活動、就職先等情報と、一人の学生を入学から卒業まで一貫して評価できる仕組みを構築しつつある。

次に、苫小牧高専の村本氏は次のように話された。高専全体では、高専機構本部が主導してモデルコアカリキュラム(MCC)の策定を進め、2018 年度からモデルコアに完全準拠したカリキュラムが全国の高専で運用されるようになった。現在運用されている MCC は一般教養などの「分野共通で備えるべき能力」、専門に関わる「分野別の専門能力」、コミュニケーションスキルなどの「分野横断的能力」の 3 部から構成されており、それぞれの能力分野について、それに相当する学習内容と到達目標、卒業時に満たさなくてはならない到達レベルが設定されている。

高専機構では、MCC を軸として教育の質保証機能を担保するため、「MCC との関連を明確にできる Web シラバス」、「LMS・教材の共通化と共有」などの具体的な仕組みの導入を進めている。この内、「到達度の測定指標」については、座学部分は CBT(Computer Based Testing)による評価が、分野横断的能力については統一的な評価指標が開発され、2019 年度以降、全国高専に順次導入されることとなっている。

最後に北海道大学の細川がアセスメント・ポリシーとそのチェックリストについて説明した。北海道大学は昨年度中に、2009 年から実施している IR 活動を利用したアセスメント・ポリシーとチェックリストの導入を完了した。チェックリストには、従来から行われている、学生の成績評価や、学生による授業評価が含まれる。

しかしこれだけでは学生の態度習慣(コンピテンシー)の修得に関わる部分や、学習状況などを把握することができない。そこで重要になるのが、在學生、卒業生、あるいは学生を採用してきた企業などを対象にしたアンケート調査の実施である。一般に DP で達成目標にされているコンピテンシーを、個々の学生を対象にした能力試験で測ることには手間と予算を要する。そこで、アンケートによる間接評価が用いられる。認証評価が教育の内部質保証として大学に求めているのは、有効な教育改革を持続して実施できる体制の構築である。多くの資源は Act に投入し、Check の部分は学部の大きな負担にならない程度に設定することが望まれるが、現状よりは拡大された役割が期待されている。

(北海道大学高等教育推進機構教授 細川敏幸)

開会式とオリエンテーション

挨拶

オリエンテーション

北海道大学 理事・副学長 長谷川 晃

北海道大学 高等教育推進機構 教授 細川 敏幸

開会式とオリエンテーション

細川： 私は全体の進行を務めさせていただきます、北海道大学の細川でございます。よろしくお願いいたします。それでは、まず最初に IDE 大学協会北海道支部理事で、北海道大学理事、副学長の長谷川晃先生にごあいさつをお願いしたいと思います。長谷川先生、よろしくお願いいたします。

長谷川： ただ今ご紹介いただきました、北海道大学の理事、副学長を務めております長谷川でございます。本日は大変お忙しい中をこの令和元年度の IDE 大学セミナーにご参加いただきまして大変ありがとうございます。今回のテーマは「学修成果の可視化をめざして」ということで、最近では重要になっております教育の質保証、あるいはその定性的な評価等にかかわる一端を、皆さんとともに考えたいと思います。

ご承知の通り、昨年度にこのテーマを予定しておりましたけれども、昨年は胆振東部地震がございまして、その余波で残念ながらこの会を開くことができませんでした。大変残念ではございましたが、今回こういう形であらためてこのテーマを持って開かせていただけるということになったことで、大変うれしく思っております。また関係の方々にはいろいろとご尽力をいただきまして、大変ありがとうございます。この場を借りて、あらためて御礼申し上げたいと思います。

本日の「学修成果の可視化を目指して」というテーマに関しましては 7 名の先生方に講師、それからシンポジストとしてご協力をいただいております。まずこの 7 名の先生方に、この場を借りてあらためてお礼を申し上げたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

このフォーラムは言うまでもなく、IDE 大学協会北海道支部と北海道大学が共催をしまして、大学を中心とする日本の高等教育の充実発展に貢献するということを目的にしまして、大学改革の動向、あるいは大学を含む教育改革の動向等、さまざまな教育にかかわる問題の情報を共有して皆さんとの間で議論を深める、そういう場として、毎年だいたいこの時期に開催をしているものでございます。

今回のテーマですけれども、平成 30 年 4 月から施行された認証評価に関する省令の改正等におきましては、大学の評価基準に定める項目のうち、特にいわゆる内部質保証に関する事柄が非常に重視されてきております。教育の質保証ということでございますけれども、ここが重点的に認証評価を行うポイントであるということになっておりますので、その点を考慮しましてあらためて可視化を目指してという形でテーマを設定させていただきました。

次の大学の機関別の認証評価においても、当然重要な評価基準となると思われますので、さまざまな取り組みをご紹介いただきまた情報共有をし、そして意見交換をしていく中でこの評価基準に関する理解、それからさまざまな解決の方法、あるいはもっと広げて、実際にどのような形で大学の教育の内部質保証を行っていったらいいかといったことについて、大いに意見交換をしていただければ大変ありがたいと思っております。

本日のセミナーで講師には岩手大学の江本先生、それから崇城大学の藤本先生、さらにはシンポジストとして帯広畜産大学の斉藤先生、札幌学院大学の石川先生、苫小牧工業高等専門学校の村本先生、そして北海道大学の細川先生にご参加をいただきまして、この学修成果の可視化というテーマをめぐっていろいろな形でご議論を深めていただければと思っております。

それとともに各大学におかれまして、こういったテーマに関する講演やシンポジウムを素材にしまして、あらためてそれぞれの大学で、どのように質保証を進めていったらいいか、ということについてもお考えいただき、またご紹介等をいただきまして情報交換をしていただければ大変幸いだと思っております。

本日はこれから講演、シンポジウム、そしてその後で情報交換会を予定しております。若干長丁場ではございますけれども、皆様にとりましては非常に重要な意義を持つ機会になるということを祈念いたしまして、あらためて本日のご参加にお礼を申し上げつつ私のあいさつにさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

細川： どうもありがとうございます。それでは引き続きまして、簡単に全体のオリエンテーションをしたいと思います。まず今日の席の配置でございますが、一番前の1列目、2列目のお名前の札のある席を除いて座席は自由となっております。続きまして、配付資料をご確認ください。上から順に講演の資料集、資料集というのは抄録です。これはすべての先生方のものがございます。

2 番目、各講師の配付資料。これが「PowerPoint」の資料でございますが、ある場合とない場合とございます。それから入会案内、さらにシンポジウム資料。この後、お 2 人の先生のご講演の後にシンポジウムがございますが、そのときの質問票。それから最後に参加者名簿があります。

それから 3 番目は、入会案内でございます。IDE は学会の組織を取っておりまして、入会していただくと毎月学会誌が送られてきます。受け付けのところにサンプルがございますが、普通の学会の論文誌よりも実務的な内容が非常におおございまして、実務者、特に大学の管理者で教育関連の仕事をしている方には非常に有用でございます。

入会を希望する方は、そこに入れておきました入会申込書にご記入の上で受け付けに提出してください。そうしますと、引き換えに振込料無料の郵便局の払込票が渡されますので、会費の 1 万円を添えて後日に振り込んでいただければと思います。

それから会誌のバックナンバーも受け付けに、4～5 種類でございますが最近のものを配布しております。今日の話に関係するのは、7 月号の質保証の特集号でございます。ご興味のある方はお買い求めいただければと思います。

それでは特別講演に移りたいと思います。最初の司会は、北海道教育大学学長の蛇穴治夫先生にお願いしております。では蛇穴先生、よろしくお願いいたします。

特別講演 1

岩手大学の試み：e-ポートフォリオの活用

岩手大学 教育推進機構 准教授 江本 理恵

司会：北海道教育大学長 蛇穴 治夫

1. 特別講演 1

岩手大学の試み：e-ポートフォリオの活用

岩手大学 教育推進機構 准教授 江本 理恵

司会：北海道教育大学長 蛇穴 治夫

蛇穴： 皆さん、こんにちは。最初の特別講演の司会を務めさせていただきます、北海道教育大学の蛇穴と申します。どうぞよろしくお願いいたします。初めにご講演をいただきます岩手大学教育推進機構准教授の江本理恵先生のご略歴につきまして、簡単に紹介させていただきます。お手元に配付の資料 4 ページ目にも記載されておりますので、目で追いながらご確認いただければと思います。

江本先生は 1995 年 3 月に東京理科大学の大学院理学研究科修士課程を修了され、修士、理学の学位を取得された後、2002 年の 3 月に東京工業大学社会理工学研究科の博士課程を単位取得退学されております。その後、資料にあります通り民間企業での勤務、高校、大学の非常勤講師を勤められた後、2005 年 4 月から岩手大学の大学教育総合センターの講師として、2008 年からは准教授に就任されております。センターの改組によりまして教育推進機構所属となり、現在に至っているということでございます。

本日は教育の内部質保証に必要なデータや情報の収集に関しまして、岩手大学で実施されておりますポートフォリオシステムについてお話をいただきます。どの大学にとりましても重要な問題であり、かつ困難さを伴うテーマということになります。それでは江本先生、どうぞよろしくお願いいたします。

江本： ご紹介をありがとうございました。岩手大学の江本と申します。本日はこのような歴史のあるセミナーに呼んでいただきまして、大変光栄に思います。本日のセミナーのテーマは「学修成果の可視化を目指して」ということなので、学修成果の可視化を目指して岩手大学が取り組んでいる取り組みについてご紹介をさせていただきます。

本日、私の方で用意させていただいたのは、A3 の表裏 1 枚の資料です。今日の話の内容は基本的にこの 2 ページにぐっと詰め込んであります。また、一度システムを見てみたい、というご希望がありましたら、ぜひ本当に遠慮なく連絡ください。よろしくお願いいたします。

岩手大学の概要

岩手大学ですけれども、盛岡駅からだいたい歩いて 30 分ぐらいのところにある大学です。学部は 4 学

部構成で、平成 28 年度に全学一斉改組をしました。平成 29 年度には修士課程の全学一斉改組をして、今度は修士課程を総合科学研究科の一本にまとめました。

なぜ、そういうことができるかといいますと、ワンキャンパスだからですね。キャンパスが 1 つしかない、これが非常に大きな特徴ではないかと思っております。正確には釜石に行く学生さんたちもいますけれども、先生も学生も同じ敷地内にいるということですね。これが特徴的なことではないかと思っております。

学部学生は 4500 人ぐらいで、国立大学としては非常に規模が小さくコンパクトな大学です。

私は、教育推進機構というところに所属しております、岩手大学の教育・学生に関することを一括して取り扱う組織です。実際には専任教員はほとんどおらず、学部の該当する委員会の委員の先生方が兼務教員として出てきていて会議を行っています。そして、学務部のそれぞれの課が、それぞれの部門、センターに対応していて、担当をしています。

私は教育推進連携部門の担当ですが、昨年から教学 IR 室、今年は学修支援室を新しく教育推進機構の中に立ち上げて、これらの担当が主な業務となっております。

教学 IR という学長直轄でというようなトップダウンでつくられるケースが多いかと思えますし、本学も IR 推進室という学長直轄の偉い先生や事務方のトップが集まっている組織もあります。教学 IR 室は逆で、先に機構の活動の一環で、今回紹介するような多くのデータを取り扱えるシステムを構築できたので、教学 IR 室を機構の中に整備しまして規約を整備していったという形です。データが先にあってボトムアップで教学 IR 室ができたというのは、たぶん非常に珍しいケースだろうと思っております。

難しい可視化

「学修成果の可視化」とは何か。これを考えると切りがないのですが、けれども、「本当にちゃんと教育をやっているの?」「お金が必要と言っているけど本当なの?」といった外圧ですね。財務省であったり、民間の経済界であったり、一般の方々であったり、そういう方々に対してきちんと説明をする必要が出てきている。だから定量的にとらえて証拠を示しましょうということが今言われているわけです。

でも、これは難しい。どうすればいいのか。おそらく、本日ここに来られている方々は、どうやってやればいいたろう?と考えて来ておられるのではと思います。これはちょっと難しいと。

私もいろいろ考えることがあります。そこで、誰かがまとめてくれないものかと調べていましたら、江原先生がリクルート『カレッジマネジメント』に、そのもやもやの部分をまとめた文章を掲載されておりました。この「なぜ、今学修成果が、求められるのか?」を読んでもいただくとういのではないかと思います。

学生の学修成果はそんなに簡単なものではないですね。授業を受けるけれども、その授業だけでその学生の学修成果ができているわけではない。正課外の活動であったり、学外のバイト先も含めていろいろな経験であったり、そういうものが積み重なって初めて学生の学修成果になってくる。

江原先生はディプロマサプリメントとかを言う前に、まず前提の授業の成績評価がきちんとしているのか、シラバスはできているのか、そちらを先に検討すべきといったことを書かれています。その通りで、授業は学修成果のベースになるけれども、でもそれだけで学修成果の評価は難しい。

大学側は社会の目に対応するために成果が必要になってくる。それには、学生によいカリキュラム、学修プログラムを提供しなければならず、そのために社会の目に耐えられるような証拠を取りながら、つまり説

明責任を果たしながら、教育活動をする体制をつくっていかねばならない。

今、よく言われているのが、AP, CP, DP ですね。これだと実は正課だけになってしまうのですが、まず正課教育から取り組みましょう、というのが考えられる方法かなと思っております。本学も CP, DP 着目して取り組みを行っています。

また、第3期の認証評価では内部質保証が非常に重要になります。これは学位授与機構が出しているガイドラインから取ってきた図で、見ていただくと、質保証とは学長を中心に全学的に取り組むものとなっています。私たちは教育推進機構ということで、この中の一部、「教育プログラムの点検・評価」、つまり「プログラムレビューをなさい」というところに着目をして取り組みを進めています。ガイドラインにはどう書いてあるか。ディプロマ・ポリシーが達成できたのかどうか、定量的なデータを取って、それを用いて点検、評価をなさいと書かれているわけです。

「Iⁿ Folio」に至る経緯

このような各種問題に対処するために「Iⁿ Folio」を運用していますが、スタートは違う目的だったのです。教育推進機構の前身の大学総合教育センターの時代に、全学の学修支援システムである「Iⁿ Assistant」の開発に取り組みました。私は岩手大学に着任して今年で15年目ですが、1年目からかかわらせていただきました。

システムを単独で作るなら楽なのですが、そういうシステムは結局使われなくなってしまう。学内にどういう情報やシステムがあるのかを探して、学務情報システムと連携して、認証基盤は情報基盤センターの仕組みを使って。そこで「新しく着任された先生はどこで調べればいいの？」など、様々なことに格闘しながら運用してきました。

次に、入学前教育のためのシステムを作りまして、これは入試のデータベースと格闘するわけです。そういったことを繰り返しているうちに、「あ、学内には色々なデータが色々なところにあるんだな」ということが分かってきました。これを一括して扱えればきっと何かできるだろう、ということを当時の担当職員さんたちと話をしてきたわけです。

当時はまだIRという言葉が日本ではほとんど使われていなかったもので、対応するシステムとしてポートフォリオシステムぐらいしか思いつかなかった。じゃあ、ポートフォリオシステムを入れようということで、何回もポンチ絵を描いて申請書を書きました。でも、最初の頃はなかなか理解していただけなくて、そもそも学外にもその申請書は出ていなかった。

ダメ出しをされて、その度申請書を書き直する、というブラッシュアップがずっと蓄積されて積み上がっていくわけです。

その積み上がった状態のところに、ちょうど学外からのプロジェクト募集の話がきました。蓄積されたポンチ絵と申請書はありましたので、当時の学務課長が申請してくれた。またとても気が利く人で、今はポートフォリオという名前を使ったら通らないから、違う名前にしたよ、と。ここで、初めてお金が付いて先に進めることになりました。

同時に学務システムの老朽化が課題になっておりました。岩手大学も予算の潤沢な大学ではないので、外部からお金が入るなら、この機会にそのお金を使って学務システムも新しくしましようという話になりました。

それで、学務情報システムも含めて学生が使うシステムをトータルで整備しましょうねという話になって、私もそのメンバーに入れてもらって一緒に考えて整備を進めてまいりました。

「Iⁿ Folio」の機能

現在のシステム関連図です。新しい学務システムを入れたんですけれども、このシステムで古いカリキュラムも入れてしまうとリスクが高かったので、古い学務情報システムも一緒に並行して動いています。全学改組した平成28年からの学生さんが新しいシステムで、それ以前の学生さんは古いシステムで扱っています。

そうすると先生たちにとっては扱いが厄介になる。この真ん中にあります「Iⁿ Assistant」が、私がその15年前に着任したときから関わらせていただいているシステムです。さすがに15年たっていますので情報基盤センターからダメ出しされて、来年に変える予定です。

この「Iⁿ Assistant」の最後の大仕事として、新しい学務システムと古い学務システムの情報を読み込んで、先生方には何事もなかったかのように見せる、名簿の統合もできる状態で提示する、という仕組みをつくらせていただきました。

「Iⁿ Folio」というのはこの横にある赤で囲まれている部分です。この「Iⁿ Assistant」がだいたい年間80万ログインぐらいです。岩手大学の学部生が学期中に1日1回はログインをしているという計算になるので、ほぼポータルとしての役割を果たしている。この「Iⁿ Assistant」を経由して、ユーザーは「Iⁿ Folio」の方に進むことになります。

「Iⁿ Folio」も実は2つのシステムからなっていますが、今回の学修成果の可視化の分脈で使うのは達成度自己評価システムになります。

「Iⁿ Folio」を開発するとき、正直な話、教職員としての私の立場ではデータが取りたい、というのがありました。とにかくデータを取りたい。プログラムレビューをするのに必要なデータを取りたい。でも、学生さんに対して、ただデータを取りたいというシステムを使わせるのは、教員としての良心が許さないものがありました。学生には何のメリットがあるのかを考えました。

「Iⁿ Folio」は、とにかく蓄積するための仕組みである。学生さんはひたすら毎学期毎学期自己評価をさせられています。質問紙調査ですと1回出したらおしまいですが、ポートフォリオシステムにしておくと、蓄積ができます。1年生のときはこういう回答をしていたんだけど、3年生になるとその回答、自己評価が変わってきたといったことを自分で確認できるようになるわけです。

そこで、とにかく何でも蓄積できるようにしましょう、蓄積して見直しに使えるようにしましょう、実際に見直しをするかどうかはシステムでは解決しない問題なので、とにかく学修状況、提出したレポートとかも含めて、どんどん蓄積できるような仕組みにしましょうと考えて、「Iⁿ Folio」の開発に取り組んできました。

今日のお話でいうと主に達成度自己評価システムに関することになります。これもいろいろな機能が実装されていますが、今日は学位授与の方針に対する達成状況のことと、学修状況とか学修体験の自己評価についてお話をさせていただきます。学位授与の方針に対する達成状況ですが、これは自己評価と取得単位から算出するという2つの方法でデータを取っています。

最初の自己評価ですけれども、実はこれが難しいわけです。質問紙調査をしたときに、何らかの指針が

ない状態で自己評価をするのは難しいだろうとひしひしと思いました。そこで、学生自身が自己評価をするための指標となるチェックリストを、すべてのプログラムに対して作ってくださいとお願いして作ってもらいました。もう1つ、量的に算出するためのカリキュラム・チェック・リストも作ってくださいとお願いして作ってもらいました。

例えば、学位授与の方針がありまして、それに対して自己評価のためのチェックリストがある。これはカリキュラムポリシーの方から作ってもらうようにしています。これをすべてのプログラムに対して作ってもらいました。

カリキュラム・チェック・リストは、縦軸にそのカリキュラムを構成している科目があります。横軸は学位授与の方針の各項目です。(a)と書かれていますが、(a)の中に具体的な文言があるわけです。それぞれの科目が、その学位授与の方針のどの項目にどれぐらい寄与するかを数値として入れてもらっています。

これらを整備することで、学生さんはチェックリストをチェックしながら自己評価を行えるわけですし、先ほどのカリキュラム・チェック・リストを使えば自動的に達成量が算出されて数値として出てきます。この自己評価の結果について先生方に対しては、集計したものをこうやって提出しています。

例えば、これはGとJですね。つまりここまでの間にカリキュラムの中に学位授与の方針のGと、学位授与の方針のJに関することは科目として何も準備されていないということになります。ですが、学生の自己評価を見ると、Jの方は少しも身に付いていないという回答が多いからいいのかなと思いますが、Gの方はかなり身に付いていると回答している。これはなぜなのかを考えなければいけない。

理由としては、学位授与の方針の立て方が悪いのかもしれないし、カリキュラム・チェック・リストの使い方が悪いのかもしれない。Gの項目は実は正課外で学ぶ内容なのかもしれない。データで出てきたので、これはどうしてか？ということを考えるきっかけを私たちは得ることができます。

また1週間の時間の使い方と学習体験の振り返りも、自己申告をしてもらっています。時間の使い方というのは典型的な外部評価に必要な項目です。これらのデータも、先生たちは集計したものをすることができます。

このようなシステムをつくったときに一番問題になるのが、どれぐらいの学生が使うかということです。これはもともと8割を超えるようにと思って設計をしてきましたが、実際は9割を超える学生さんが使っています。これはよく質問を受けるので最初に答えておきますと、「I² Folio」を2つのシステムを組み合わせで作ったからという説明をしています。

なぜ組み合わせたかということ、自己評価をしてから成績を見せたかったからです。成績を見てから自己評価をするのではなく、自己評価をしてから成績を見るのが妥当だろう。そうじゃないと意味がないと考えていたので、そういう制御を入れています。

学生は「I² Assistant」から「I² Folio」の達成度自己評価システムの方に入って、さらにそこで必要な自己評価等を登録しないと成績を見る画面にアクセスができない仕組みになっています。

「I² Folio」の活用状況

「I² Folio」の活用状況です。人文社会科学部さんではポートフォリオ指導のツールとして活用してもらっています。教育の内部質保証への貢献ということで、教学IR室で教学IR的な活動も取り組んでいます。

人文社会科学部の学生さんは成績や自己評価結果などを見ながら、今年の目標と今年の成果みたいなものを学生は書き込んで、先生もその学生が書き込んだものと学生の成績や自己評価を見ながらコメントを返すということに取り組んでいます。これは教務委員会が決めて、教務委員会主導で取り組んでおります。

教学IRの方ですが、現在は動き始めたばかりなので私の方でデータを集めてグラフとかを作って、学部の教授会などに持っていつています。今はFDも参加人数は4分の3などと要求されますので、その学部の教授会へ持っていつて説明する機会をFDとしてもらつて、何とか興味を持ってもらふ機会を得られるように努力しています。

そのときにデータ収集システムにも興味を持ってもらえるように誘導はしています。こういったデータを先生たちは自分の教育プログラム分は全部自分たちで取れますので、できれば最終的には自分たちでそのデータを使って何か考えてくれればいいなと考えております。

私たちも具体的にちゃんと成果を出す必要があります。例えば全学改組を平成28年に行っていますから、それ以降のカリキュラムとその前のカリキュラムの比較に取り組んでいます。旧カリの学生さんは、第2期の法人評価の前に全学で質問紙をつかった調査結果があるので、それと比較をしています。

本当は研究者としてこれらのデータを比較していいのかなとは思のですが、実務者としてはこのデータは非常に使えるものになりそうだと判断をして、その比較をしています。

面白いのは、項目によって差が出るものと出ないものがはっきり分かれることです。何か意味があるのだらうと思っています。また新カリの年次進行の変化も見えております。それぞれのカリキュラムの特徴も見に行ければと思っています。

学位授与の方針で、私自身が面白いと思って取り組んでいるのが、このタイプのグラフです。棒グラフのところが取得単位から出てくる達成量で、これはコースで平均を取った達成量です。折れ線グラフは、自己評価を平均したものです。

本来、入学当初は自己評価が低くて、対応した授業が受けると自己評価も高くなると考えられるのですが、実際にはこのタイプは非常に少ない。残念ながら、最初から高く高いままとか、最初から低くて上がってこない。これは卒業まで上がるというんですけど、このようなタイプが多い。

加えて、折れ線グラフがでこぼこになる項目もあります。本学の場合はキャンパスが1つなので教養と専門はそんなにきっちり分かれていません。これは1年前期、後期、2年前期、後期、3年前期までのグラフですが、どこの学部も2年後期から専門がぐんと増えます。

このでこぼこタイプは農学部で見られるのですが、おそらく本学の農学部は最も偏差値が高いので彼らにとって教養は楽勝だったんじゃないかと考えられます。専門になって、授業が難しくなって少し自己評価が落ちて、でもまじめなので頑張つて戻してきたと考えられます。

でも、この手のグラフはあくまでも自己評価であることと、平均値を取っていますが、コースによっては人数が少ないので、1人、2人のちょっと外れ値で大きな影響が出てしまう可能性もあります。あくまでも参考です。平成28年度に入学した学生さんが4年生ですので、今年度末には4年間分そろそろわけですから、これを使ってまず自分たちの学位授与の方針だったり、そのカリキュラムだつたりを見直すきっかけをつくりたいと思っています。

ポートフォリオの話をするときに、「レーダーチャートで何が分かるんだ」と言われることがあります。本学

のシステムはレーダーチャートを作ってなくてというか、まだ作れる状態にないと考えています。学位授与の方針も作れと言われたから作文しただけだし、カリキュラム・チェック・リストも作れという要請が来たから作っただけ、おそらくそういう状況だろうと考えられます。それをもってその学生の学修成果を測っちゃいけないと私は強く思っております。現在はまずデータを取って、先ほどのように、おかしいなというところを学部先生たちに伝えて見直しをしてもらおう。まだ、その段階だろうと考えておりますのでレーダーチャートは作れない。今の段階で岩手大学は作れない。

まだデータはない、検証もしてないという状況です。でもデータを取っていろいろ考えながら、最終的にはもう少しよい形で、学生さんに成果を可視化してあげられないかと思って取り組んでいます。

学修成果の可視化

最後になりますが、学修成果の可視化について、私自身は学修成果の可視化の本丸は卒業研究とか卒業論文だろうと思っています。岩手大学の場合は理科系の学部が多いので、3年生の後期とか4年生になったら研究室に配属されて、1年以上卒業研究に取り組むわけです。だから、学修成果としては、それでいいはずだと思っているところがあります。

現在、卒業研究で身に付けるべき汎用的な能力とかを整理してチェックリストを作っているコースが1つあり、そのチェックリストを使って試験的にチェックをさせる仕組みを動かしてはいます。しかしシステムでは内容は評価できないわけです。

私は、学生が岩手大学に入学して、授業を受けて研究室に入って、先生や仲間たちと切磋琢磨して卒業研究に取り組んで卒業論文を書きました、というプロセス、これをきちんと評価してほしいなど、見てほしいなど考えているのですが、なかなか難しいものがあります。

教育学者の板倉先生がご著書の中で「一番大切なことは評価してはならない」という文言を残しています。学修成果とか、学びとか、そういったものは、簡単に測定できたり評価できたりするものじゃないことを私たち一人一人が、特に私のような仕事に携わっている人は自分で言い聞かせておく必要があるのかと思っています。自分にも言い聞かせていますし、自分の院生向けの授業では学生さんにもそれを非常に強く言っています。

人間にしろ学びにしろ多様性があって複雑で深く簡単には評価はできない。けれども、「だからやらない」というのは話が別なので、いろいろな形、いろいろな観点、いろいろな方法、いろいろな尺度、いろいろな機会を使って、いろいろな形で見てあげる必要はある。でも、それで「あなたはだめ」「あなたはよし」ということはやってはいけない。

現在、心配なことは、とあるコンピテンシー評価のテストを受けて学修成果を測りましたとか、パーソナリティテストを受けて学修成果を測りましたというようなこと。1つの尺度、1つのテスト、あと共通テストというのを実施して、それで成果を測りましたみたいなことをされているケースを見かけると、危惧を覚えております。

このプロジェクトのシステム自体は、教育の中身には一切手をつっ込んでいません。尺度を決めるとしたら、それを決めるのはその教育に取り組んでいる先生方です。先生たちがこういうことをしますと決めたら、それに対してデータを取って返します。矛盾を発見した場合には、必要な改善を考えてもらいます。私が、

どこから尺度を持ってきてそれに当てはめて、先生たちにこの尺度に沿って教育してくださいみたいなことは絶対にやらないと自分に強く言い聞かせて取り組んでおります。

今日は学修成果の可視化を目指してと言いながら、そんな簡単にできないという話になってしまうのは、期待に添えていないのかと思うのですが、でも本当に簡単には測れない。ですから、現場の先生方と尺度から作りあげていく仕組みを用意させていただいたので、本学の先生方も、文句を言わずに付き合っているのかなと思うところがあります。以上、つたない話でしたが、ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

蛇穴： 先生、ありがとうございました。冒頭におっしゃいました通り残り時間が大変少ない中なんですけど、これだけは聞いておきたいということが会場の先生方からありましたから、1つ、2つお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。どうぞ。

質問者： 達成量の計算のときに重み付けをされているんですけども、重み付けをするときに定期テストの内容がその比率に合っているとか、その根拠は何かある重み付けなんでしょうか。

江本： システムとしては重みさえあればいいので、それをどうするのかに関しては学部のそれぞれのプログラムの方で考えてもらっています。いただいた重みをシステムに登録して、学生の自己評価と比較したグラフを作って、「これでいいですか？」というのを返す。今のところはそういうやり方を取っています。

蛇穴： お願いいたします。

鈴木： 北海道科学大学の鈴木でございます。大変興味深い話なんですけど、今の質問に関連してなんですけど、その重み付けをされるのもいいですし、これは1つの方法だということですからいいと思うんですけど、100点満点で合格をした学生は、これは例えばあるDPに対して7割とかあるDPは3割というのはいいと思うんですけど、仮に60点で合格をした学生がいたときに、その60点の中身がどこにどれだけかということが分からないですよね。

江本： はいその質問もよく受けるのですが、現在の岩手大学は単位を取ったら卒業できるわけですから、このシステムで見ているのは単位を取ったか取らないかです。ただ、データとして実は成績の情報も一緒に取ってあります。4年間全部データが揃いましたら、試験的に算出してみようかと思っています。

ただし、現時点では、秀は100%で優は60%にするといった根拠がない状態なので、そこまで踏み込むのはどうだろうか。一応60点全部そろえても卒業できると言っている段階でそこまで計算して見せてしまうのは、踏み込み過ぎだと考えています。ただデータは取っていますので、試験的に計算することはいくらかもできるようなっております。

鈴木： ごめんなさい。つまりいくつかのDPのうちのあるDPは、もしかしたら達成しないまま卒業してしまう

可能性があると……

江本： そうです。

鈴木： 今のシステムではですね。つまり 60 点という単位だけを満たせば卒業できるという話でいくのであれば、そもそもなぜ DP を立てなきゃいけないのかということと、それから今言ったような立てた DP のうちのどこかは十分ではないけど卒業は認めると、そういう話になるじゃないかなということが質問の意図でございます。

江本： すみません、失礼いたしました。これは前回の法人評価のときに、対応する単位を1つも取らずに卒業してしまう学生が出たら困るので、手作業で調査しました。このときは、そのような事例は発生しませんでした。その前段階があります。

万が一、本当に該当する単位が 0 のまま 4 年で卒業するような学生がいたら、それは学部へ駆け込んで、これは困ると言わなければならないだろう、学部の方に考えてもらわなければならないだろうと思っております。ただ、今のところは、皆さんに出していただいたリストを見たところ、ゼロは発生しないと考えております。

鈴木： ありがとうございました。取りあえず時間もないのでありがとう。

蛇穴： ありがとうございます。まだまだ質問がたくさん出そうな気配がありますが、先ほどありましたように 10 分ぐらいという目安がほぼ過ぎてしまいましたので、先ほどご本人からありました通り、メールで対応していただけたということでもございましたので、そちらの方にお問い合わせいただければと思います。皆さんのご協力で大変ありがとうございました。先生もどうもありがとうございました。（拍手）

岩手大学 教育推進機構
Center for Teaching, Learning and Career Development

IDE大学セミナー 学修成果の可視化をめざして
令和元(2019)年8月30日 岩手大学 江本 理恵

学修成果の可視化をめざして： eポートフォリオ『In Folio』の活用



岩手大学 教育推進機構
江本 理恵



構成



- 自己紹介
 - 岩手大学について
- はじめに
 - 「学修成果の可視化」とは？
- 学修成果の可視化を目指したシステムの構築・運用
 - In Folio(アイフォリオ)の構築・運用
 - In Folio(アイフォリオ)の活用
- おわりに
 - あらためて「学修成果の可視化」とは？



Center for Teaching, Learning and Career Development

自己紹介 - 岩手大学はどんな大学？

- 盛岡駅から徒歩30分程度
- 4学部構成
(平成28年度に全学一斉改組)
人文社会科学部, 教育学部,
理工学部, 農学部
- 4年間 ワンキャンパス + 釜石
- 学生数 約6,000人
- 教員数 約420名
- 職員数 約300名

岩手大学のマスコットキャラクター
がんちゃん

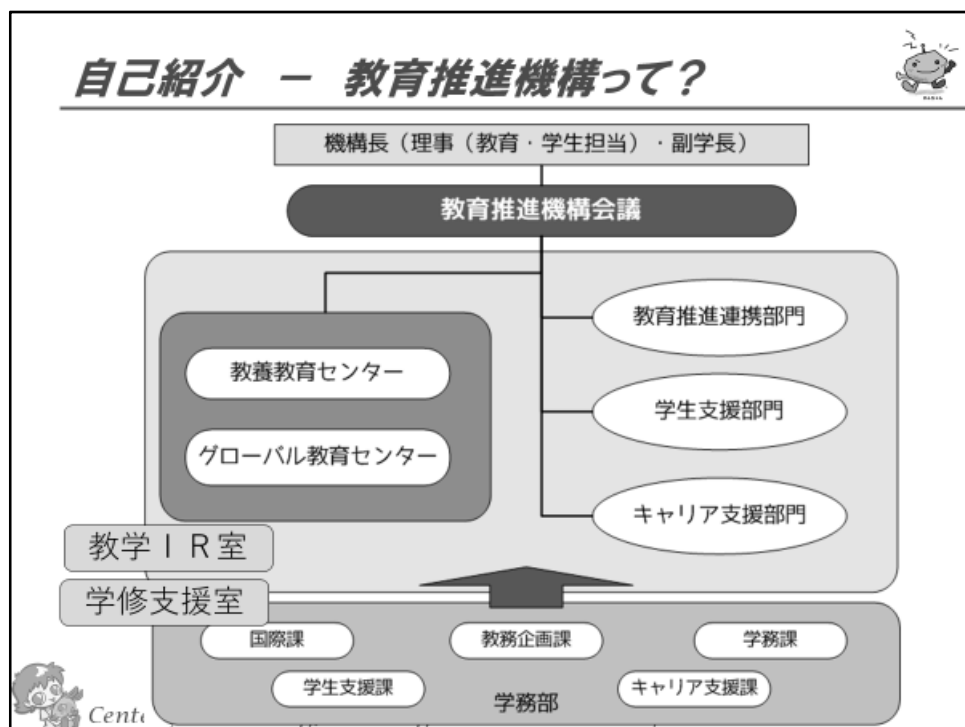
がんちゃん

● 駐車場
■ 運動場

○ 人文社会科学部
○ 教育学部
○ 理工学部
○ 農学部

□ 学部事務室 (各学部1号館にあります)

Center for Teaching, Learning and Care





はじめに



Center for Teaching, Learning and Career Development



「学修成果の可視化」とは？

- 大学教育の質の向上
 - 本当に大学はちゃんと教育やってるの？
 - 成果でてんの？
 - お金が必要というけど、本当なの？
- 教育の質の向上を定量的にとらえる
- 教育の質が向上した証拠を示す

どうやって？



Center for Teaching, Learning and Career Development

「学修成果の可視化」とは？



なぜ、今学修成果が、求められるのか？

その社会的背景と、解決への糸口

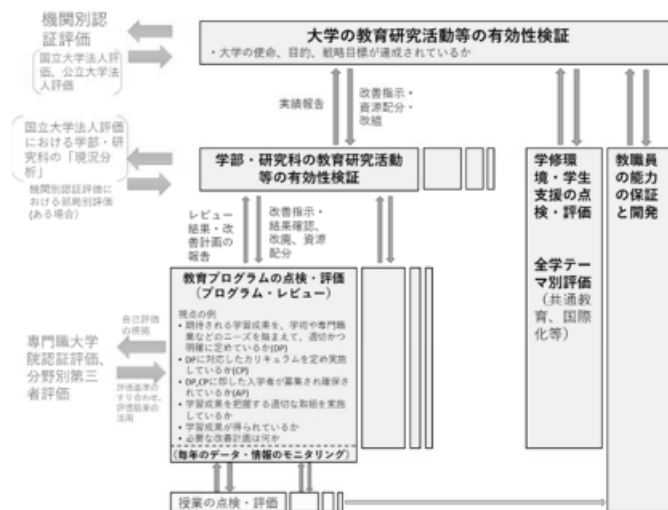
江原昭博

リクルートカレッジマネジメント209, 2018



Center for Teaching, Learning and Career Development

教育の内部質保証システム



教育の内部質保証システムに関するガイドライン

大学改革支援・学位受容機構(平成29年3月)



Center for Teaching, Learning and Career Development

教育の内部質保証システム



- 大学のプログラムの毎年の点検(モニタリング)では、授業評価などの授業レベルのデータに加えて、プログラム単位での学修成果等に関係する各種の定量的なデータを把握する。その上で定期的にプログラムの質の総合的な点検・評価(プログラム・レビュー)を行う。
- プログラム・レビューでは教育プログラムの三つのポリシーに則した点検・評価が行われる。



Center for Teaching, Learning and Career Development



I^N FOLIO(アイフォリオ)の 構築・運用



Center for Teaching, Learning and Career Development

Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発



- 全学の学修支援システムであるアイアシスタント以降、学内の情報を一元化した仕組みが必要だと考え、概算要求書類の作成(何回も)

→学内で×

- 平成26・27年度に学長のリーダーシップ経費(文部科学省からの特別経費)にて実施

- 教学IR
- 履修状況見える化
- 達成度自己評価



- 学務課長が手をあげておいてくれた…

Center for Teaching, Learning and Career Development

Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発



- 同時期に

- 学務情報システムの老朽化も課題
- (第3期の初年度)平成28年度に全学改組が予定

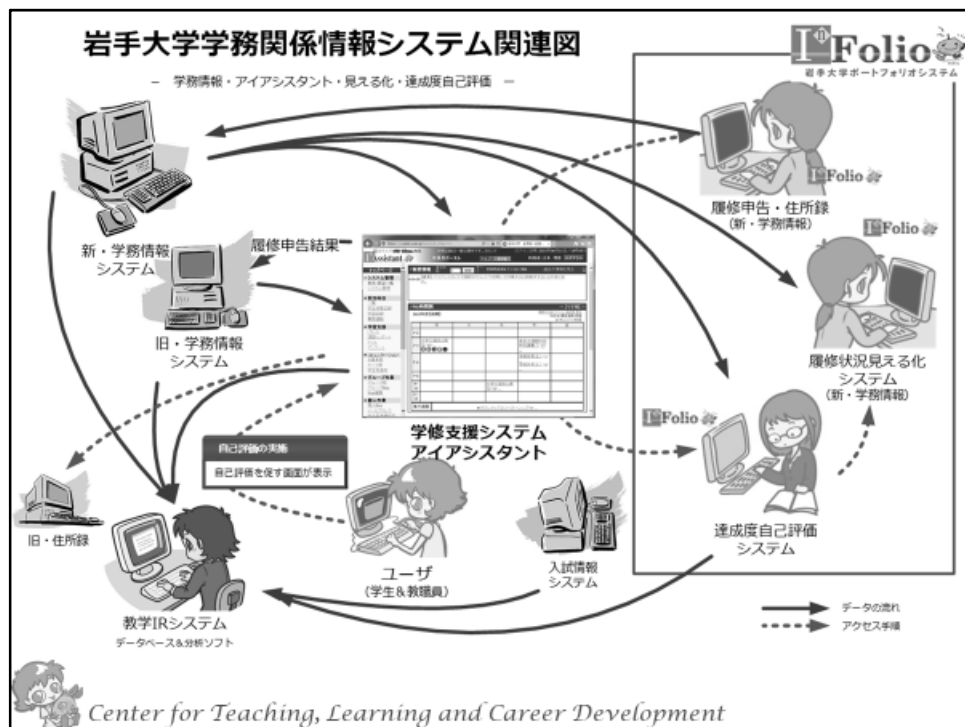
- 履修状況見える化の費用は、学務情報システム更新費用に

→新・学務情報システムのサブシステムを利用するという算段。

- 学務情報システムとして何を導入するかを含めて、学務の担当者たちと徹底的に話し合い。



Center for Teaching, Learning and Career Development



Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発



システム開発の目的

(教職員の立場)

- 学位授与の方針に対する達成状況の調査
- プログラム・レビューに必要な状況の調査
- 調査結果を用いて、プログラム・レビューを行い、教育プログラムを改善する。

(学生の立場)

- (上記の結果として)達成状況を可視化
- 学修状況の蓄積
- 自身の学修状況をレビューし、今後の学修に反映させる。



Center for Teaching, Learning and Career Development

Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発



■ 達成度自己評価システム

→学位授与の方針に対する達成状況

1. 自己評価(主観的)
2. 取得単位から算定(客観的)

→学修状況・学修体験

1. 1週間の時間の使い方
2. 学修体験の振り返り

→レポートや目標に対する教員とのやりとりの蓄積等

■ 履修状況見える化システム

→単位取得状況(成績含)



Center for Teaching, Learning and Career Development

Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発



1. 「学位授与の方針」について、学生自身で自己評価を行うためには、指標が必要

→達成自己評価チェックリスト

2. カリキュラム・チェック・リストから「量的」に達成状況を図るための方策が必要

→重み付け

単位数×重み付け＝達成量



Center for Teaching, Learning and Career Development

学位授与の方針:達成自己評価チェックリスト



学位授与の方針 (卒業時に到達していることが求められる目標)	達成に必要な項目	自己評価
1 教養教育等で培う幅広い分野の知識を身につけている。	☐ 教養教育（文化・社会・自然・環境・地域）の科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 教養教育（文化・社会・自然・環境・地域）の科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている
	☐ 学内外の講演会等に参加し、幅広い分野の知識に触れる機会を確保している。	☐ あまり身につけていない
	☐ 幅広い分野の本を読んでいる。	☐ 少しも身につけていない
2 専門分野の基礎的な分野の知識を身につけている。	☐ 専門基礎教育科目として開講されている、数学、物理、化学、生物の名講義科目と実験科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 専門基礎教育科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている
	☐ 専門教育のコース科目を履修している。	☐ あまり身につけていない
	☐ 専門教育のコース科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ 少しも身につけていない
3 専門分野の応用的な分野（学際的な分野）の知識を身につけている。	☐ 専門教育の発展科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 専門教育の発展科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている

カリキュラム・チェック・リスト:重み付け



区分	科目名	知識・理解		思考・判断		関心・意欲	態度	技能・表現		重付 合計
		a	b	c	d	e	f	g	h	
課程共通科目	共生環境入門					80	20			100
	基礎キャリア形成ゼミ					80	20			100
共生環境課程 共通	応用力学	60		40						100
共生環境課程 共通	応用数学	60		40						100
	インターンシップ					80	20			100
コース科目	森林資源と人間生活	20	80							100
	森林測量学Ⅰ	20	80							100
	森林測量学実習Ⅰ			20			20	60		100
	樹木資源学		100							100
	林業・木材産業論		100							100
	農林生物共生論		100							100
	暖帯林概論		100							100
	樹木の組織と形態・生理		100							100



Center for Teaching, Learning and Career Development



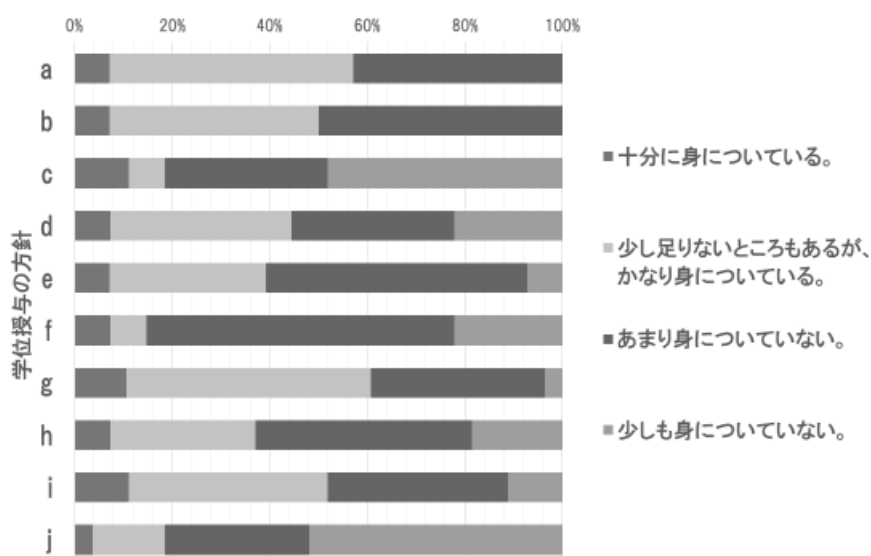
Center for Teaching, Learning and Career Development

学位授与の方針:達成自己評価チェックリスト

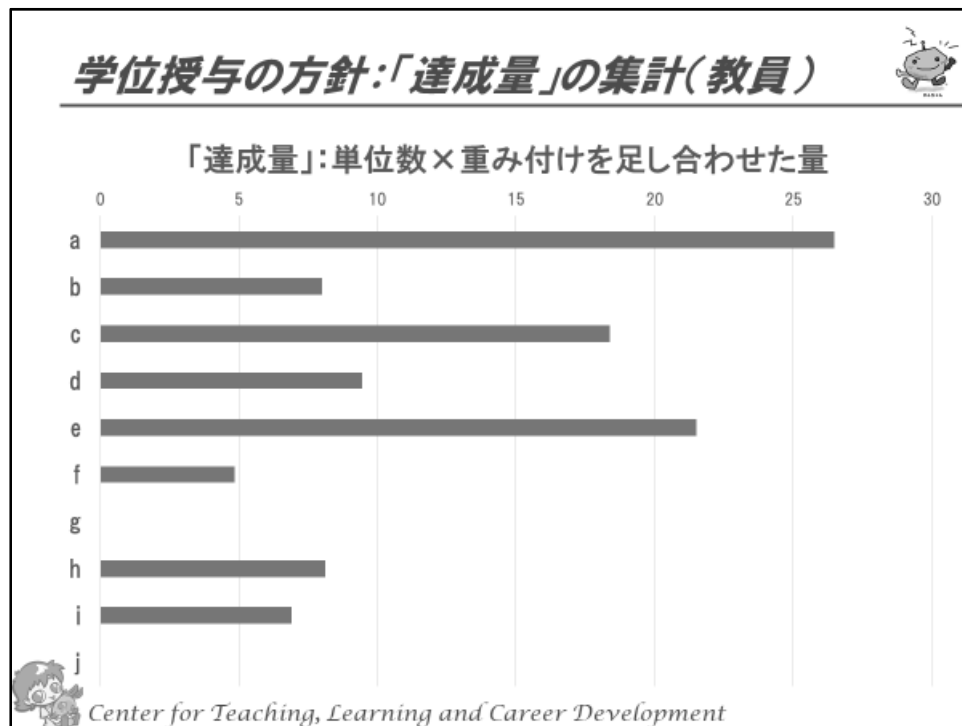


学位授与の方針 (卒業時に到達していることが求められる目標)	達成に必要な項目	自己評価
1 教養教育等で培う幅広い分野の知識を身につけている。	☐ 教養教育（文化・社会・自然・環境・地域）の科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 教養教育（文化・社会・自然・環境・地域）の科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている
	☐ 学内外の講演会等に参加し、幅広い分野の知識に触れる機会を確保している。	☐ あまり身につけていない
	☐ 幅広い分野の本を読んでいる。	☐ 少しも身につけていない
2 専門分野の基礎的な分野の知識を身につけている。	☐ 専門基礎教育科目として開講されている、数学、物理、化学、生物の各講義科目と実験科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 専門基礎教育科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている
	☐ 専門教育のコース科目を履修している。	☐ あまり身につけていない
	☐ 専門教育のコース科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ 少しも身につけていない
3 専門分野の応用的な分野（学際的な分野）の知識を身につけている。	☐ 専門教育の発展科目を履修している。	☐ 十分身につけている
	☐ 専門教育の発展科目の卒業に必要な単位を修得した。	☐ かなり身につけている

学位授与の方針:達成自己評価結果集計(教員)



Center for Teaching, Learning and Career Development

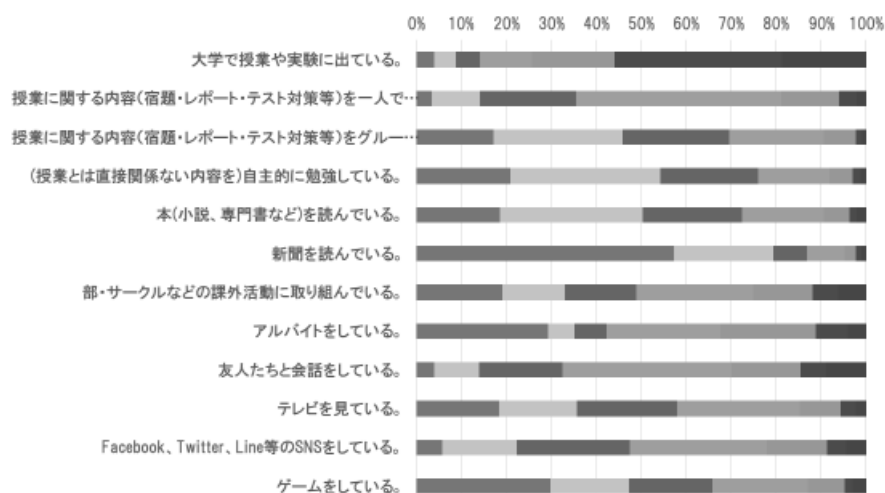


Iⁿ Folio(アイフォリオ)の開発

- 達成度自己評価システム
 - 学位授与の方針に対する達成状況
 1. 自己評価(主観的)
 2. 取得単位から算定(客観的)
 - 学修状況・学修体験
 1. 1週間の時間の使い方
 2. 学修体験の振り返り
 - レポートや目標に対する教員とのやりとりの蓄積等
- 履修状況見える化システム
 - 単位取得状況(成績含)

Center for Teaching, Learning and Career Development

学期中の1週間の時間の使い方調査(教員)

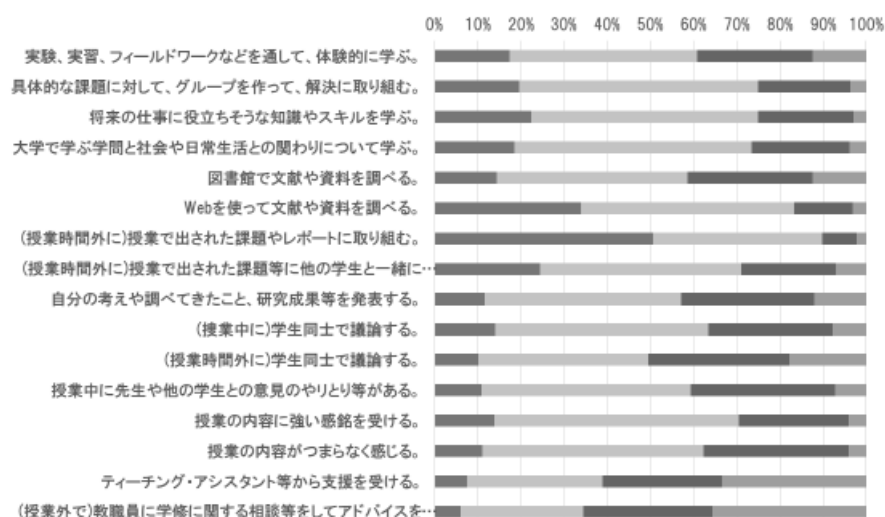


■なし ■1時間未満 ■1~2時間 ■2~10時間 ■10~20時間 ■20~30時間 ■30時間以上



Center for Teaching, Learning and Career Development

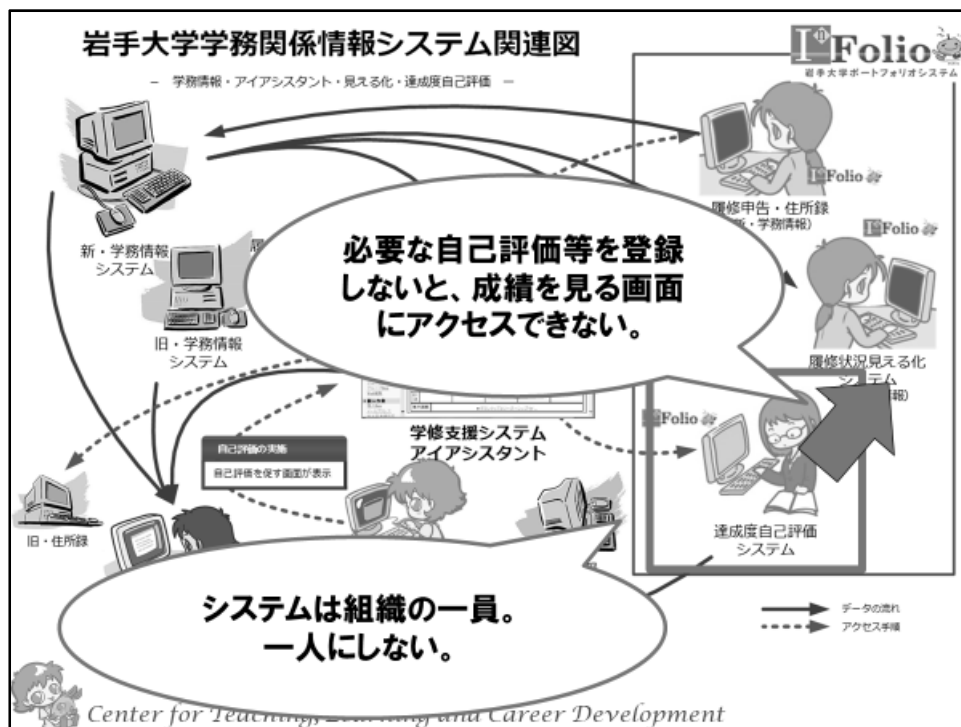
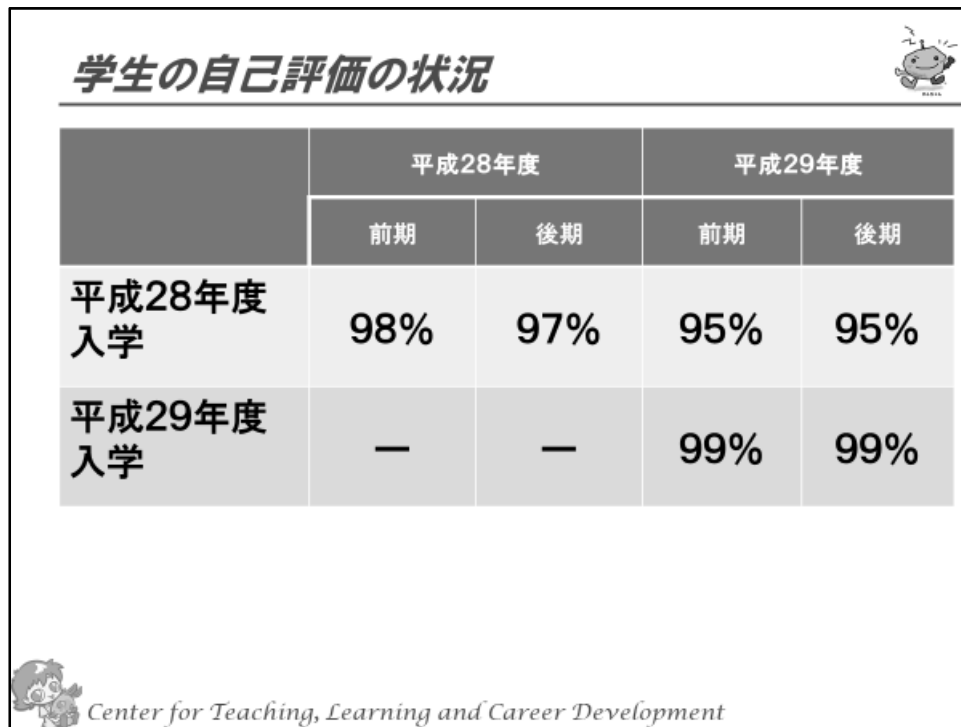
学修体験調査(教員)



■ひんぱんにあった。 ■ときどきあった。 ■あまりなかった。 ■まったくなかった。



Center for Teaching, Learning and Career Development





I^N FOLIO(アイフォリオ)の活用



Center for Teaching, Learning and Career Development



アイフォリオの活用

- 人文社会科学部でのポートフォリオ指導への活用
- 教学IRへの活用(教育の内部質保証への貢献)



Center for Teaching, Learning and Career Development

人文社会科学部でのポートフォリオ指導への活用



- ポートフォリオ指導教員を設定(担任・副担任)
- P指導教員は、担当の学生の
 - 成績や自己評価結果を確認
 - 学生が記入した目標や自己評価に対しコメントを記入
- 教務委員会が所掌
- 学生へのコメントを記入しないP指導教員への対応



Center for Teaching, Learning and Career Development

教学IRへの活用



- そもそも「教育の内部質保証システムに貢献すること」がシステム開発の目的の1つ
- 収集データを分析し、学部・FDの機会に提供する。
- データを収集するシステムにも興味を持ってもらう
 - コース単位のデータを早々に入手可能
 - 「自分たちで行う内部質保証」につながる



Center for Teaching, Learning and Career Development

分析事例：新カリ・旧カリの比較

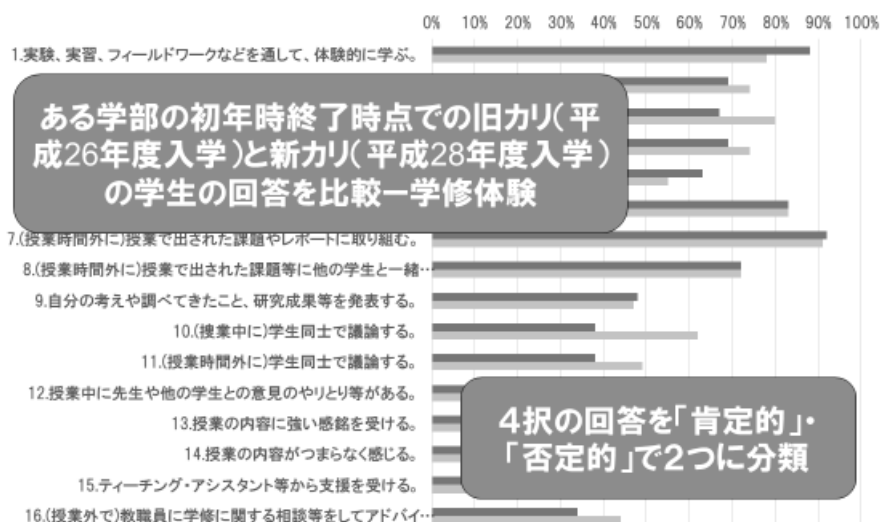


- 学修体験、1週間の時間の使い方、学士力(全学の学位授与の方針)については、旧カリと比較できる形で調査項目を設定。
- ただし、旧カリの学生は、アンケート用紙を用いて、無記名で実施。
 - もしかすると、この「データの取り方の違い」の影響は大きいのではないか？
 - しかし、他に方策はないから、比較してみる。

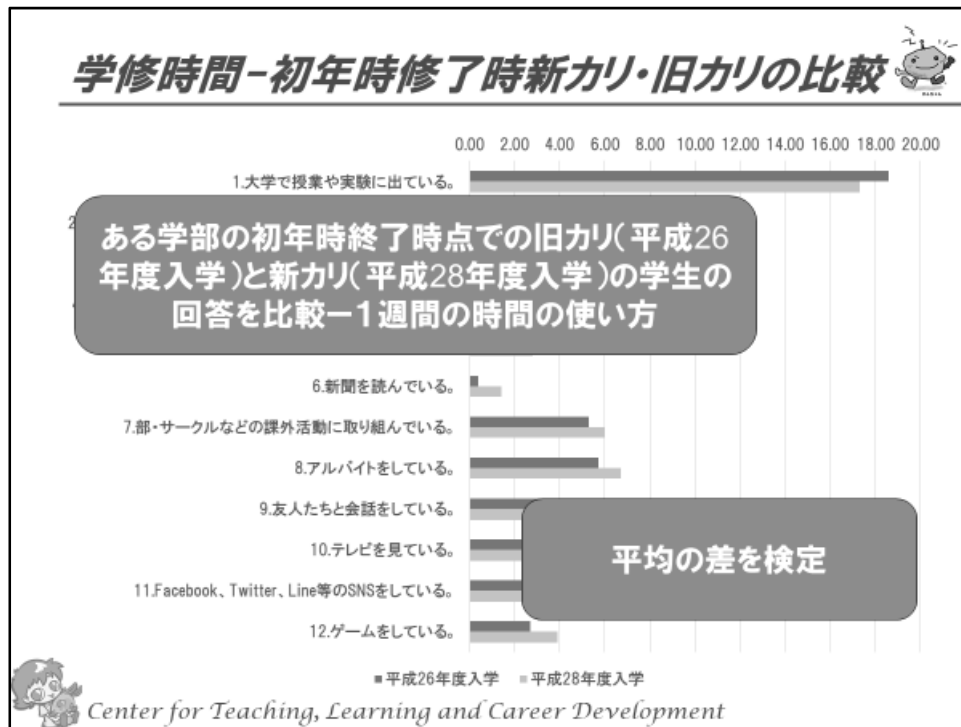


Center for Teaching, Learning and Career Development

学修体験-初年時終了時新カリ・旧カリの比較



Center for Teaching, Learning and Career Development



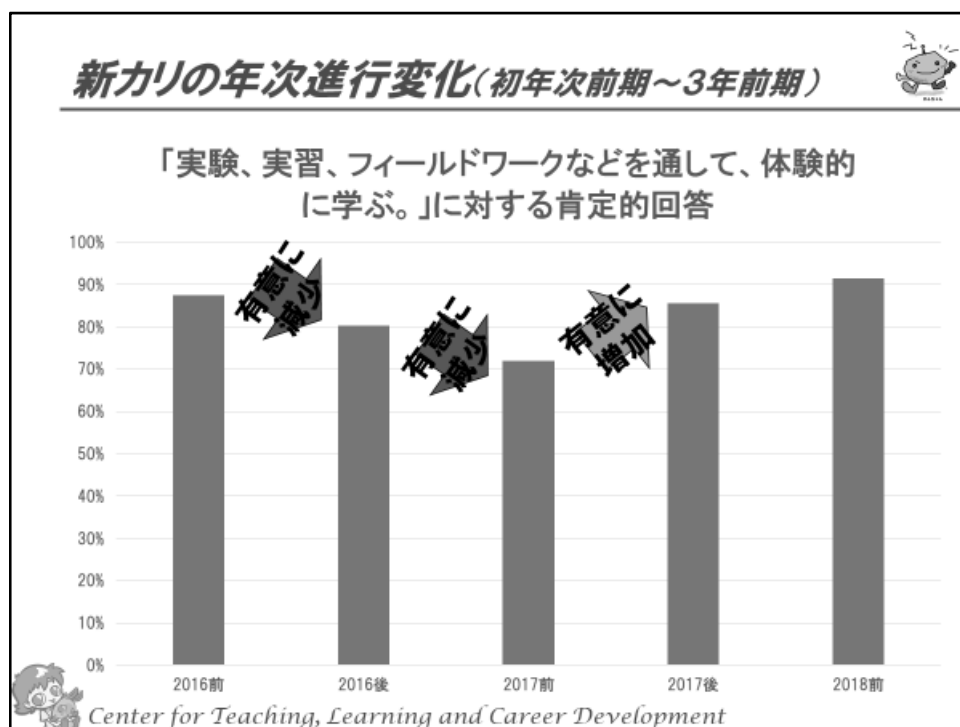
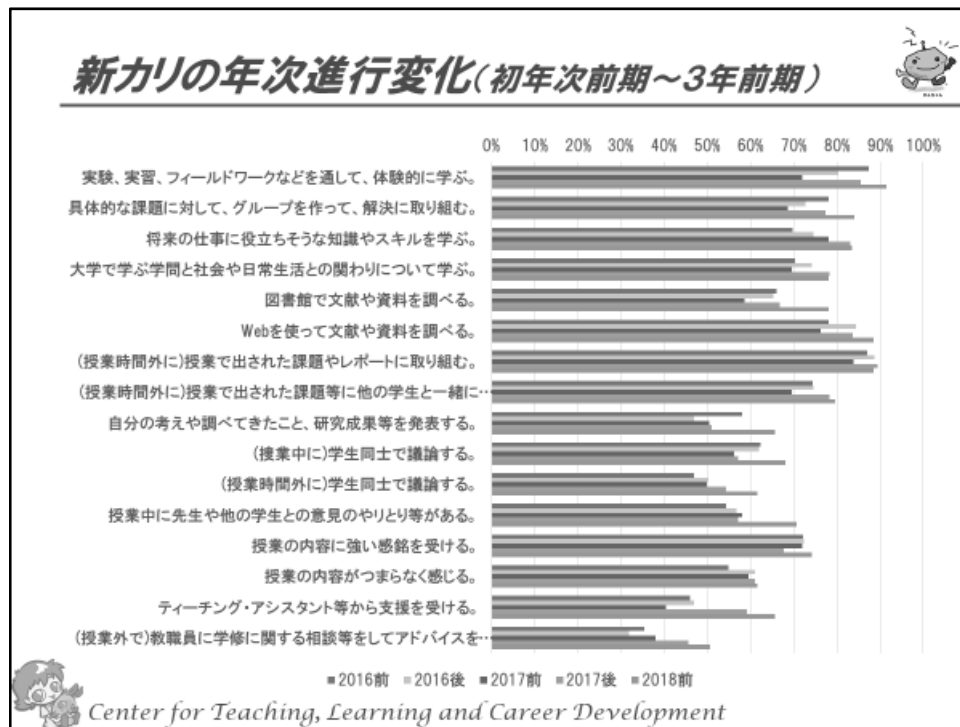
新カリ・旧カリの比較

- 全学共通教育が教養教育になり、(COCの関係もあって)課題解決演習などの科目が増えた。
- 初年次の基礎ゼミナールに「震災復興に関する学修」が取り入れられ、沿岸地域(被災地)を訪問する学修が組織的に行われている。

などのカリキュラム改革が数値として現れた？

→この手法で、カリキュラム改革の成果を、エビデンスとして示せる可能性！

Center for Teaching, Learning and Career Development



新カリの年次進行調査



- 1年後期～2年前期にかけて、大学で授業に出ている時間が減少し、それに伴い、授業時間以外の学修に使う時間も減少している。
- 2年後期からは、専門教育が始まることもあって、授業に出ている時間や学修時間が復活する。

となると、1年後期&2年前期のカリキュラムに何らかの工夫が必要？

→この手法で、カリキュラムの弱いところ、強いところを、エビデンスとして示せる可能性！

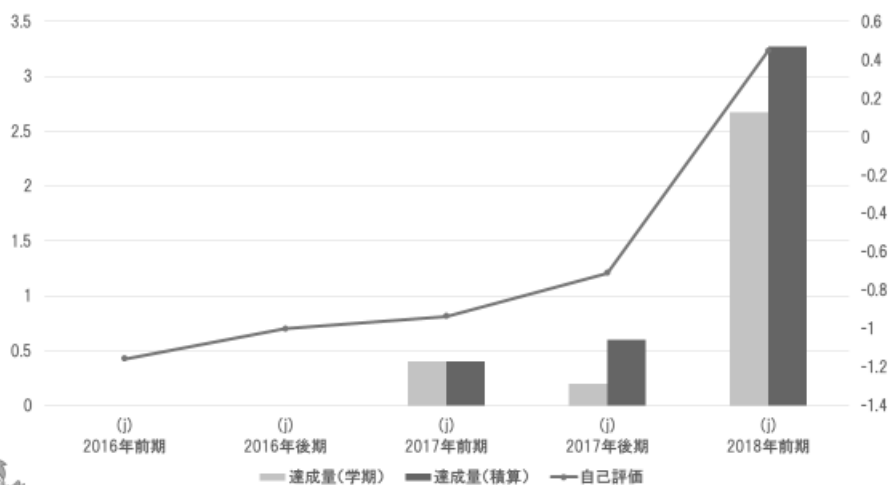


Center for Teaching, Learning and Career Development

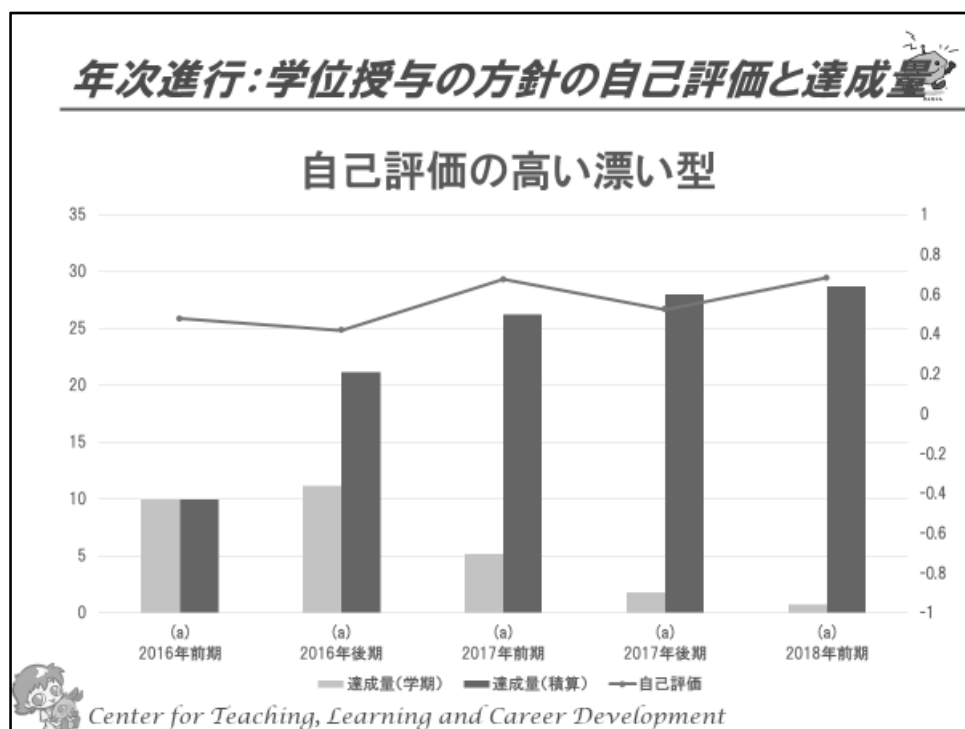
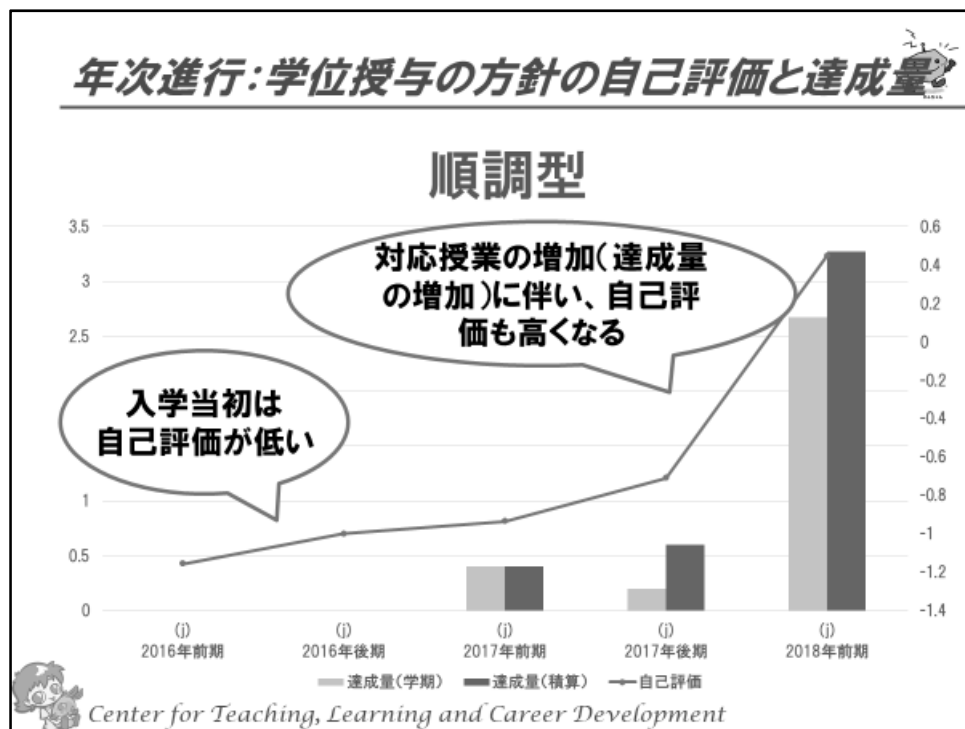
年次進行：学位授与の方針の自己評価と達成量

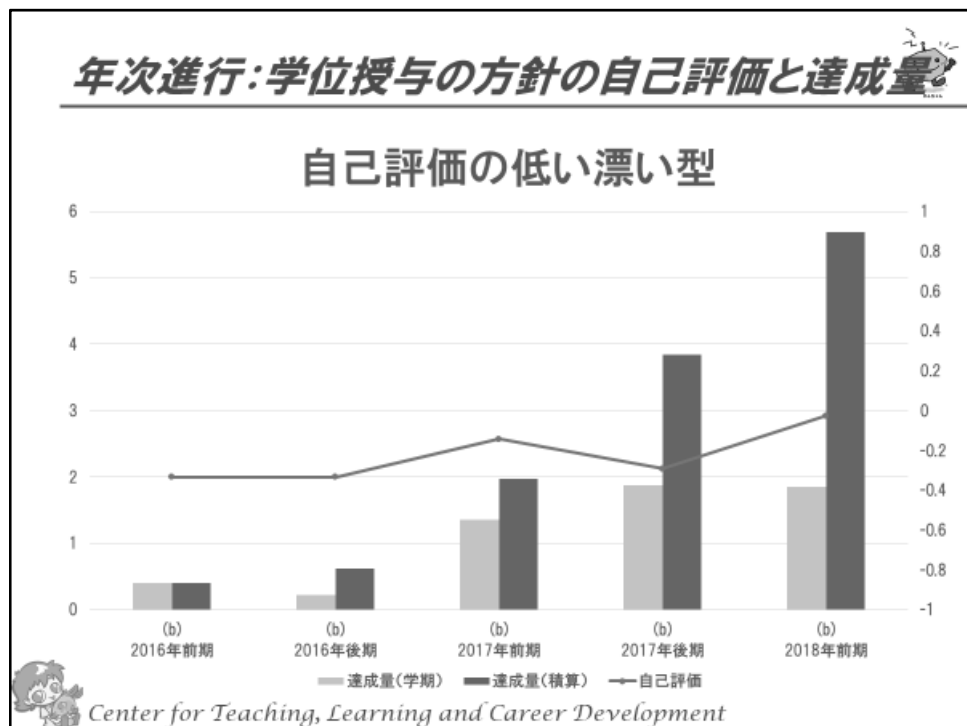
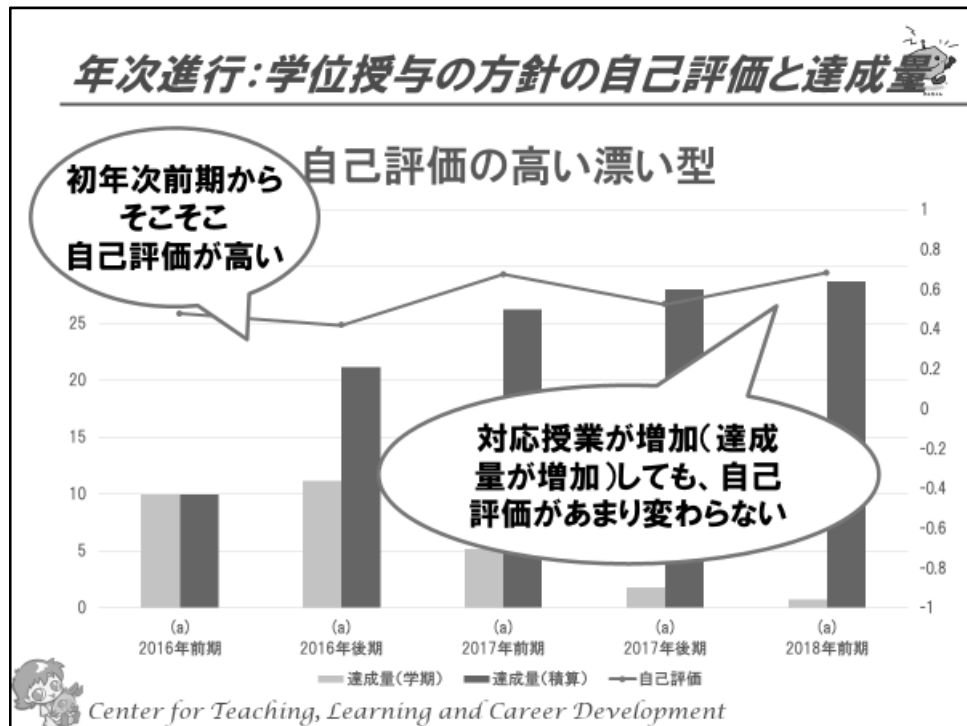


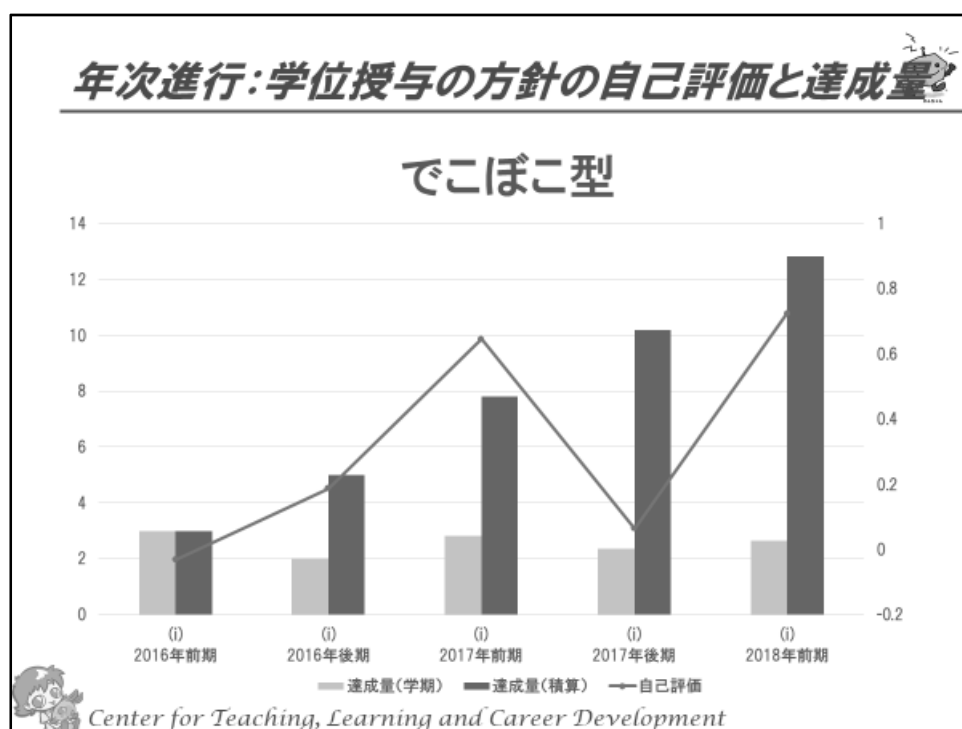
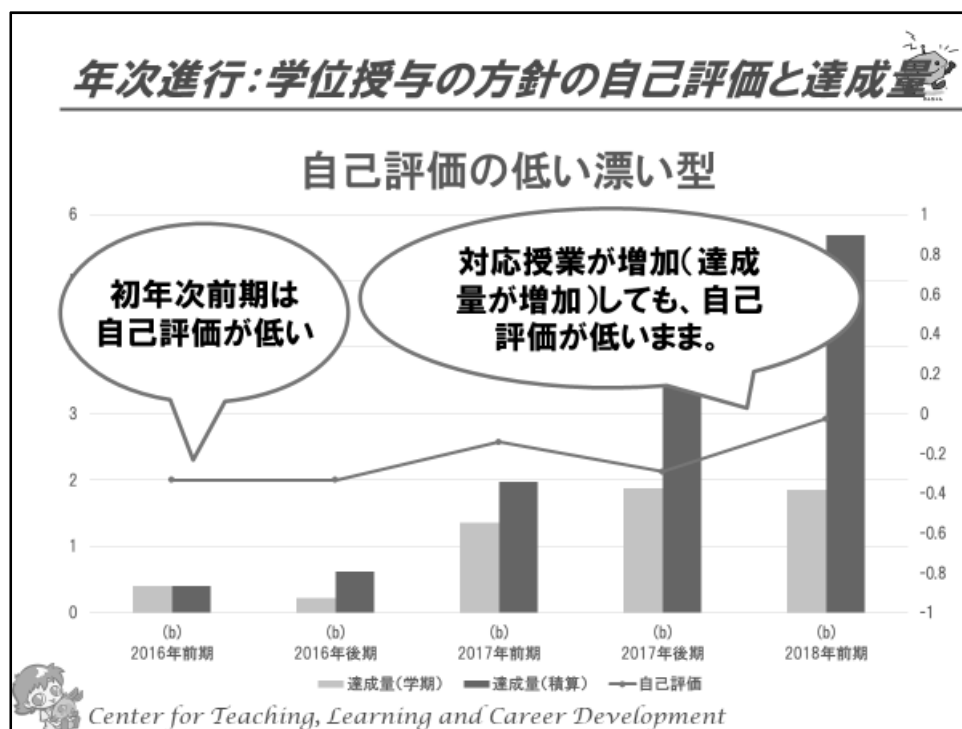
右上がり型：順調型

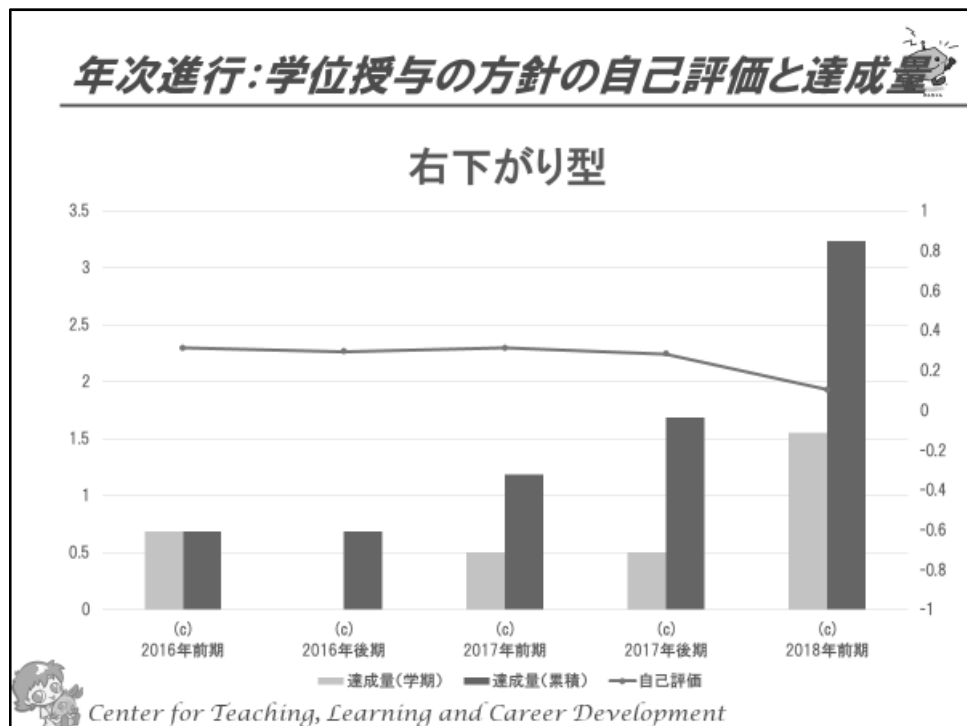
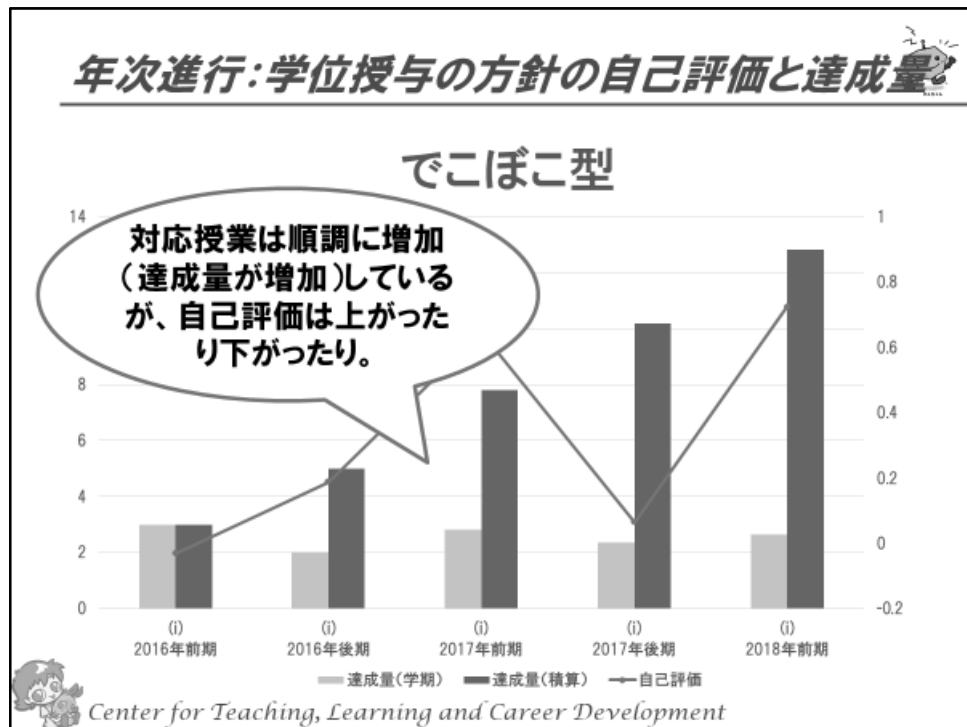


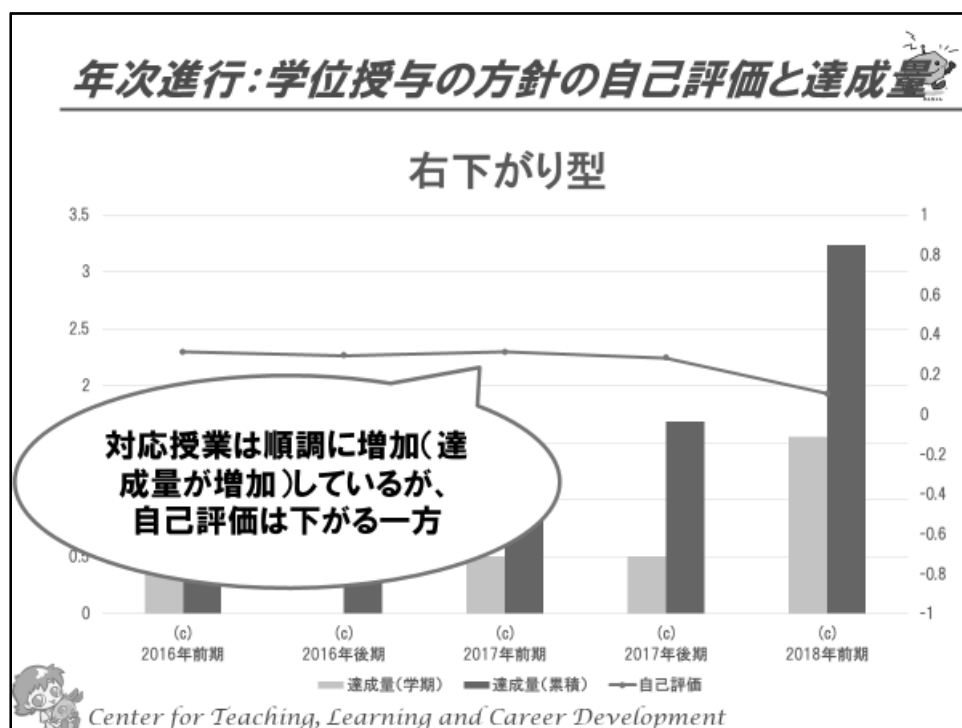
Center for Teaching, Learning and Career Development







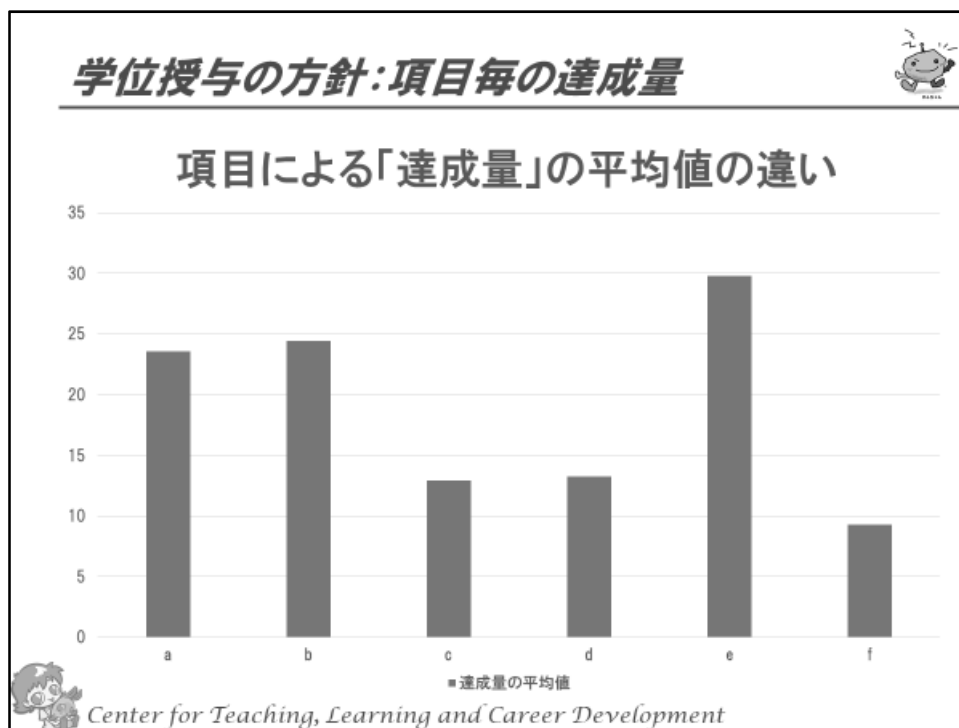




年次進行:学位授与の方針の自己評価と達成量

- あくまでも「学生の自己評価」
 - 学科、コース単位だと、対象人数が少ないので、一人二人の影響が大
 - 学ぶことで、自分の理解状況を「メタ」的に把握できるようになり、自己評価が下がる場合も

Center for Teaching, Learning and Career Development



新カリの年次進行調査

- 学位授与の個々の項目に対する
 - 自己評価
 - 取得単位数からの達成量

の関係が確認できる。4年分たまることで、学位授与の方針やカリキュラムの妥当性について、議論ができる。

→この手法で、学位授与の達成状況及び学位授与の方針の達成にふさわしいカリキュラムであるかどうかを、エビデンスとして示せる可能性！

Center for Teaching, Learning and Career Development



おわりに



Center for Teaching, Learning and Career Development



あらためて学修成果の可視化とは？

■ 教職員の立場

- 自分たちの教育プログラムを点検・評価する
- 自分の教育を点検・評価する
- 学生が伸びないのはどうして？？

■ 学生の立場

- 自分の学びの成果を点検・評価する
- 自分の学びのプロセスを点検・評価する
- 成果が得られていないのはどうして？？



Center for Teaching, Learning and Career Development

あらためて学修成果の可視化とは？



- 「学修成果」の本丸は、卒業研究・卒業論文
 - 試験的に1コースでチェックリストを運用
 - システムでは「内容」まで評価できない。

- 学修成果は「可視化」できるのか？

「いちばん大切なことは評価してはならない」

by 板倉聖宣



Center for Teaching, Learning and Career Development



- ご静聴、ありがとうございました。

- ご質問・お問い合わせは
岩手大学教育推進機構 江本
riemt@iwate-u.ac.jp まで



Center for Teaching, Learning and Career Development

特別講演 2

学修ポートフォリオの運用と課題

ーSOJO ポートフォリオシステムの構築をととしてー

崇城大学 総合教育センター 教授 藤本 元啓
司会：北海道科学大学長 渡辺 泰裕

2. 特別講演 2

学修ポートフォリオの運用と課題

—SOJO ポートフォリオシステムの構築をととして—

崇城大学 総合教育センター 教授 藤本 元啓

司会:北海道科学大学長 渡辺 泰裕

渡辺: 特別講演 2 の司会を務めさせていただきます, 北海道科学大学の渡辺でございます。どうかよろしくお願いいたします。講演に先立ちまして, 藤本先生のご経歴を紹介させていただきます。藤本先生は 1981 年に皇學館大学大学院文学研修科修士課程を修了され, 1986 年 3 月に同大学, 大学院文学研究科の博士後期課程を単位取得退学しております。その後, 皇學館大学や金沢工業大学で非常勤講師を勤められた後, 1998 年 4 月に金沢工業大学の助教授, 2002 年 4 月からは教授を務められております。

金沢工業大学在職中には同大学のライティングセンター長, 修学基礎教育課程主任, 学生部長, 平成 18 年度文部科学省特色 GP 推進責任者, 入試部長, 大学事務局入試センター長などを歴任されております。2016 年 3 月に金沢工業大学を退職された後, 2016 年 4 月からは現在お勤めの崇城大学の総合教育センター教授に就任され, 崇城大学では教育改革本部長, 就職部長を務められております。

今回の藤本先生の講演は「学修ポートフォリオの運用と課題—SOJO ポートフォリオシステムの構築をととして—」ということで, 崇城大学で実施しておりますポートフォリオシステムについてご紹介いただきます。それでは藤本先生, どうかよろしくお願いいたします。

藤本: 皆様, こんにちは。藤本でございます。今ご紹介がありましたように, 現在の勤務先で教育改革の一環としてポートフォリオを運用しております。実は 10 年ほど前にこの会場で, 学修支援ということでお話をさせていただきました。今日はポートフォリオということでお話をするんですけれども, 金沢工業大学時代にこのポートフォリオを立ち上げるときからこれまで, だいたい 16~17 年間このポートフォリオには携わってまいりました。

その間いろいろな大学の先生方からご質問を受けたり,あるいはお話をしにいったことがありますが, 実際の大学でどう活用されてうまくいっているのか,うまくいっていないのか, 実はよくわかっていないのです。

先ほどお話があった江本先生のポートフォリオは, 学修の成果を示すある意味での統計資料だと思います。

す。そういうポートフォリオの使い方もありますけれども、今日お話しするのはそれとまったく逆のような形で、学生をどう育て上げていくかという学生本意のもの、つまり授業で使うということでお話をさせていただきます。

ポートフォリオの広がりについては中教審が 2008 年の答申以来、かなりの大学で使われております(スライド3)。

これは今年 5 月に文科省が報告しました平成 28 年度の学修ポートフォリオの実施大学でございます(スライド4)。平成 24 年には 174 大学、それが平成 28 年には 259 大学。その内容はどうやっていらっしゃるかわかりませんが、学修ポートフォリオを実施していますかという設問に対して、これだけ多くの大学さんが運用しているということでもあります。

e-ポートフォリオの導入

私立大学の情報教育協会というのがございますけれども、そこの委員をしておりました。そこでポートフォリオは何かということについて、平成 29 年に報告書を出しております(シート6)。ご興味があれば、これを一度ご覧いただければと思っております。

ポートフォリオにつきましては、もう先生方はご承知のことだと思います。今日お話ししますのは、この 4 番目の「教育ポートフォリオ」(シート7)でございます。特に「学生生活における自己管理と自己評価からの気づき」「学修プロセスと成果とを学生・教職員が相互検証」「自己実現への目標⇄学ぶ意欲」という 3 つの問題解決に向けて、活動記録、学生指導記録が活用できるということを、まずお知らせしておきたいと思っております。

ポートフォリオは大きく分けると、「自己・生活管理系」「学修系」「キャリアデザイン系」「総合系」に分類されると思います(シート8)。先ほど江本先生がお話になったのは、4 番目の「総合系ポートフォリオ」に該当するものだろうと思います。シート8の下の方にはいろいろなことを書いておりますけれども、さまざまな利用方法があるわけです。これを 1 つのポートフォリオで行うということは難しいわけですが、活用の方法はたくさんあるということも、これはもうご承知の通りでございます。

こういうポートフォリオでいろいろとやっているわけです(シート9)。実際には、学修ポートフォリオは、その学修過程において学生諸君が作成した多種の成果物を保存するという、これは基本的なものであります。これをどう活用するかということがシート9の下の方であって、学生自身の振り返りもありますし、学生と先生方あるいは学生同士の意見交換にも使える。そういうものを文章化することもできます。

あるいは就職活動のデータにも活用できます。日本の就職活動は卒業見込み証明書の 1 枚であって、実際は大学で何をしたのかということは面接で聴き取ります。面接で学生は何でも、例えば実際にやっていないことも含めて言えるわけですね。何回も面接が重なって矛盾点を突いてくるという、警察の取り調べ

みたいな面接を行うこともあるのかもしれませんが、いわゆるエビデンスを学生自身が持っているかどうかということです。その点で学修データ(レポート、発表資料、作品等)は重要なエビデンスになるわけです。

また当然ながら科目の担当の先生方においては、学生諸君の理解度の把握とか、先生方自身の教授法の改善にもつながる。あるいは職員にとってはデータの整理、解析、分析が行われるということで、いろいろな利用方法はあるわけです。

これが先ほど江本先生がお話になったものの1つの類型なんですけれども(シート10)、さまざまなデータを活用することができる。先ほど講演を終わりました質問が2人の先生からございましたけれども、なかなか難しい点もあるわけですね。データ自体、本当に信頼性のあるものができるかどうかということになると、なかなか難しいわけなんですけれども、総体的に大きな形として見ることはできるだろうと思っております。

そこで、まず総合系のポートフォリオを今日は除きまして、学生が作成する方向だけに絞ってお話します。例えばポートフォリオシステムを構築する目的とはいったい何だろうかということをお使いになる前に大学自身でしっかりと検討しておかなければならないと思います(シート11)。システム自体が不要な場合も当然あるわけですね。

勤務先の崇城大学、あるいはその前の金沢工業大学でも、まず学生の強みと弱みは確認できているのかということからスタートして、それからシステムを構築するとき学内でコンセンサスができるのだろうか。そして誰が、どの部署がこれを担当するのかという順序で検討しました。

それからこれを大学全体でやるのか、あるいは学部なのか、学科なのか、それとも単独の科目なのかということ。そして継続的な資金ですね。資金の支援というのは可能なかどうか、ということを考えておかなければならないだろうと思います。

そこで成功している事例、失敗している事例ということですが、実はともにあまり見たことがないのです。うまくいっているという大学の報告もあまり見たこともございませんし、失敗したことは出しにくいことだろうと思いますけれども、よく分からない。結構な資金が必要でありますし、それだけエネルギーも使っているわけですから、システムとして継続はしているのだろうとは思いますが、どうなんだろうかという懸念もあります。

よく言われることは学生の問題、教職員の問題、それから組織の問題ということがあるわけで、ここに挙げましたような問題が当然起きていることだろうと思っています(シート12)。学生にとってはそのポートフォリオの意義や目的およびメリットが理解できていないとか、書き込みを継続しないといろいろなことがありますね。先生方自身にもメリットが理解できないとか、それからなかには学生にフィードバックをするのは面倒だとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれません。しかしレポートを学生に作成させて、コメントを付けてお返しになっているという先生方が大半だろうと思います。

私の学生時代を思い出しますと、学部4年、修士2年、博士4年間で、返却されたレポートは1本しか

かった。先生方はいかがでしょうか、ご自分の学生時代を思い出されて。私には1本しか返ってこなかったなという鮮明な記憶がございます。今はそんなことをやりますと特に私立大学の場合は保護者からクレームが来ます、授業料を返せと。要するに、それだけのことをしなければならないのです。

それから大学の組織での問題点。これも先ほど申しました財政的な基盤とか、あるいはシステムに精通したエンジニアの方々をどう確保するかということも、実はなかなか難しいところがございます。

そういうようなことで、構築と展開の条件は6つほど挙げておきましたけれども(シート13・14)、1番目は学修ポートフォリオの位置付け、活用方法、利用のメリットを明確に提示することが必要だろうと思います。それから、科目の評価項目の1つに入れてしまう。いわゆるレポートも提出だと置き換えて考えていただければと思います。

先ほどの江本先生のところで行われているのは「達成できた」、「できなかった」というラジオボタンで押すわけです。そういうものと違ってやはり文章で評価をしなければならない。学生さんに作成をしてもらうわけですから当然、担当の先生方には負担が増えるわけですね。3番目にあるようにコメントをしなければならないということになります。

それから大学の組織という面では、学長先生のリーダーシップで全学的に取り組むかどうかということ、意識変革ということ、先ほど申しました人為的資源の配置とか設備、財政も、展開する条件で当然必要になってまいります。

導入形態は大きく分けると3つあると思います(シート15)。独自開発、パッケージの利用とか、オープンソースの利用というものがございますが、それぞれメリット、デメリットがございます。

独自開発はやはり時間とコストが結構掛かります。独自開発をされている大学の方々は、どれぐらいお金が掛かったかお分かりかと思います。パッケージの利用はそこまでは掛かりませんけれども、使っているとだんだんこういうことをやりたいんだけれども、新たにそういう付加をしていきたいなどとなかなか難しい。結構お金が逆に掛かることがあります。

それからオープンソースは専門の教職員さんがいないと、どうにもならないことになります。特に地方の私の勤務先のようなところになりますと、お辞めになったらなかなか補充できないわけですね。しかも何人もそこに人員を配置できないということでなかなか難しい。

現在勤務しております崇城大学では、1番目の独自開発ということで取り組みました。次に本学で今運用しておりますシステムをご紹介します。

崇城大学のポートフォリオ

現在は、ここに挙げました5つのポートフォリオを運用しております(シート16)。このなかには「e-ポートフォリオ」導入以前は紙媒体でやっていたものもございます。例えば1番目「学生面談カルテ」、2番目「入

学時自己診断シート」, 3 番目「学期末活動報告書」, これらは紙媒体でやっておりました。先生方に「e-ポートフォリオ」の使い勝手ということをまず理解していただくために, 紙媒体のものに少し新たなものを加えまして, 「e-ポートフォリオ」をスタートしたわけです。学生はパソコンからもスマートフォンからも入力できる。ですから, いつでもどこでもできるという環境を整えました。

本学の大きな問題の 1 つは, 入学目的と学修意欲が欠如している学生さんが目立つことです。学修時間数も絶対的な量が不足しております。それから先生方の問題は, やはり知識注入型の座学が中心であることです。

今は崇城大学と申しておりますけれど, 元は熊本工業大学で工科系の単科大学でした。そこで先生方がおっしゃるには, とにかく知識をどんどんどんどん与えていかないと 4 年間でエンジニアとして世の中に出不せないということ。おそらく工科系の大学では, 共通的な認識だと思いますし, 学部ごとあるいは学科ごとの体系的で伝統的な教育が, 非常に強く行われていると思っています。

そして, その知識量の測定をする試験が行われ, しかも再試験, 再々試験とずっと続いて最終試験という, 実はよく分からない試験が行われている実態もございました。こういうものもすべて, 今は改善中でございます。それから, 学生指導の情報の共有が不足している。このようなことを何とかして, ポートフォリオで少しでも解決できないかというのが, もとからの発想です。

例えば学修時間数を見てみます。これはよく先生方もご存じになるグラフだろうと思いますが, アメリカと日本の 1 年生の学修時間, 家庭学習の時間, 自学実習の時間が示されています(シート 18)。

本学でもいろいろなデータを探しました。少し計測する時間帯が違うのですが, 結構近い。あまり勉強していないという数字です。また後ほど, ちょっと別の角度からご覧いただきたいと思います。こういう学修時間の不足というものも, 問題があるということです。

そこで, まずは学生さんたちに机に向かつてもらおうじゃないかということも含めまして, この気付きから意欲と努力を引き出そう。これは言葉では簡単ですけどもなかなか難しい。こういうものをできるようにしましょうということで 3 つを目標としました(シート 19)。自学自習, 生活スタイル, 継続的なキャリアデザイン, これら大きな目標を 3 つ立てて, これに教職員のフィードバックを必ず入れてやろうということが教職員の役割になってきたわけです。

一つ一つ説明いたしますけれども, これは「学生の面談カルテ」です(シート 20・21)。チューター制をひいておりますので, 学期の初めと学期の終わりに個人面談, 個別面談がございます。その面談の記録をこれまで紙媒体で行っていましたが, これでは学生の情報が面接者だけにしかわからない。要するに, 面談をやっていますというアリバイだけであったわけです。それを, やはり共有しなければならない。

それから保護者会もございますので, 保護者との面談のときも使える。あるいは保護者の方々がどうしてお考えなのかということも記入してもらおう。また就職課, 学生課, 学生相談室, さまざまなものを一括して

時系列で記録していこうというものです。もちろんこれは当然非公開と公開の選択もできますし、チューターは自分の担当学生だけしか見られないなど、いろいろなアクセス制限も掛けております。こういうものを、まず先生方に慣れてもらうために電子化したということです。

それから、2 つ目は入学時の「自己診断シート」です(シート 22・23)。2017 年まで紙媒体でしたが、昨年「e-ポートフォリオ」で試行いたしました。150 文字程度で書いてもらおう。実は書かせることが大事になるわけです。

こうして学生さんたちが入学したときに、こういう目標あるいは考えていますということを入力し、これを持ってチューターとの面談に臨みます。この面談結果は6月の保護者面談時の話題としています。

それから「学期末活動報告書」があります(シート 24・25)。これも従来紙媒体で行われていました。設問項目に対して「よくできた」「できた」「あまりできなかった」「できなかった」のどれか選択をするというような形でしたが、これも e-ポートに変わりまして、ラジオボタンの黒ボタンで該当するものを選択します。これに加えて、新しく「今学期の目標とその到達度」など6項目の自己評価等を100～200文字程度で入力するようにしました。このようにして、いまだ少し個々の学生さんの指導を丁寧にやっていこうという試みです。

新しい機能

次が新しく入れたものです。科目の「学修到達度レポート」で、これはレポートと付くところがみそです(シート 26・27)。どの大学さんのシラバスにも、学生の到達度目標とか、達成度目標とかあります。先ほど、江本先生のところもございました。科目単位の目標があるわけですね。

そこで自己評価。この例で申しますと、1 番目の到達度目標が「よくできた」「まあできた」「あまりできなかった」「まったくできなかった」のいずれかを選択します。そうすると、科目ごとにデータが集計できるわけです。

ところが、それだけでは精度がよく分からない。例えば、A 君の「よくできた」と B 君の「よくできた」とは違うと思うのです。その理由を学生さんたちに書いてもらおう。それがレポートの意味です。到達度目標は最大6項目載せることができますが、1科目約1000文字ぐらい。学生が1学期で10科目履修しますと1万文字で、結構な量を書かないといけないわけです。

こうして、もう少し一人一人の到達度の中身を見ることができないか。学生は自分の強みあるいは弱み、こういうところが少しまだできていないんだということをはっきり意識する。それを文章化する。先生方はこう教えたのに A 君と B 君は同じ到達度であっても理解度がちょっと違うな。そういうことで先生方個人の FD にもなる。

この到達度レポート作成が終わりましたら、続けて授業アンケートに進めるようになっています。当然その授業アンケートは誰が書いたか分からない。我々教員はその集計結果しか見ることはできません。学生さ

んたちは一応画面上に名前が出ていますので緊張してアンケートに答えるようになりました。これを導入してからとそれ以前とでは、自由記述のコメントの書き方がかなり変わったということを、他学科の学科会議や教務委員会の報告で聞いております。

これは全科目行うわけですが、ここに先ほど申しましたことの繰り返しになりますが、(シート 27) 学生に対しては①内省による主体的なマナビ促進へのしかけにひとつ、②文章表現力の継続的トレーニングを目的とし、先生方に対しては①FD の素材確保を目的としているわけです。工学系の場合は JABEE (*Japan Accreditation Board for Engineering Education*: 日本技術者教育認定機構) の共通基準にも合致するやり方だと思っております。

最後は「今週の活動とトップニュース」です。これは崇城大学に着任したときに実験的に私の担当した1年生クラスだけでやっていたものです。新聞ポートフォリオということで毎回新聞の記事を1つ読んで、その概要を書き、その中で特に気になったものについて批評を書きなさいということをやっていました(シート 28 の①)。学生にとっては新聞を読むこと自体が大変な苦痛だったようですし、紙媒体の新聞はないと、じゃあ、ネット上の新聞でもいいということをやっていました。

ネット上の新聞を読む場合、新聞名を挙げなさいという「Yahoo!」と書いたりしていましたので、それは「〇〇新聞という出典があるはず」ということを丁寧に教えるわけです。いろいろなことを聞いていると、「〇〇新聞と△△新聞と◇◇新聞の3つを読んだけれども記事が全部一緒なんだ」という質問もありました。共同通信と書いてあるわけですからそういうこともやっぱり教えていかなければならない。結構これがよかったんです。

それから、次の年には学生の行動を入れるものを考えました(シート 28 の②)。2種類のポートフォリオの試行をしました。もともとは新聞と行動の記録、別個のものを作ってやっていました。2つを出すとさすがに学生が勘弁してくださいと申しますので、2つを結合してこういうものをつくり上げました(シート 29・30)。新聞は毎日読み見出を入力し、そのうち1つだけを選びその概要と批評を入力することにしました。これは紙媒体でなくて電子で試行を1年間行いました。

このポートフォリオには、学修時間、課外活動時間、睡眠時間の自動集計もできます。それから教員のコメントですが、先生方がどのようなコメントをすべきか分からないということでしたので、参考までにプルダウンの定型文を入れました。それを利用しながら書いてくださいということです。そういうことをして、先生方にも少しずつ慣れていってもらおうということにいたしました。

実は一番肝心なのは、担当教員がこれを読んでコメントを返すことです。これは結構きついわけですね。最初の試行のときは1クラス60名ぐらいの単位でやっていましたけれども、これは到底できないということで今年から30名前後に減らしました。

このようなことを通して、昨年度の7月1年生の前期を終了した時点でこの活動とトップニュースは自己

管理という面で役立ったか、もう1つは社会の動きを知る上で役立ったかと授業アンケートで尋ねました(シート 31)。ある程度役立ったと思っている、あるいは役立ったという人は8割を超え、多くの学生がこれは役立ったと答えてくれました。それは成果の一部かもしれません。

このようなことをやっているわけです。この4月から新しいカリキュラムがスタートしましたが、先ほどのクラスはその前の試行の段階で旧カリキュラム科目「キャリア基礎Ⅰ(1年次必修)」と「キャリア基礎Ⅱ(2年次必修)」を1年間借用したわけです。新カリキュラムの「SOJO 基礎Ⅰの概要」をご覧ください(シート 32)、えーと思われるかもしれませんが、1年生の前期の工学部、生物生命学部、それから情報学部の共通のプログラムです。今年度からは薬学部も初年次教育に参加しました。薬学部はまた別個のメニューを作っております。芸術学部だけがこれに参加をしておりません。それで、基本的には旧の工学部系と考えてください。

科目の概要をご覧くださいますと、例えばキャリアデザインとは何かとか、チーム学修の基礎とかをやりながら、授業形態はチームで問いの解決行うPBL型です。例えば前期の4回目、5回目、所属学科のホームページをしっかり見なさい。ほかの大学の同じ学科も調査しなさい、自分が受験した大学とあるいは行きたがった大学とをよく調べさせます。

その後に今度は自分の所属学科の研究室を徹底的に見なさい。そしてほかの大学の同じ学科の研究室もしっかり調査し、学科と研究室の概要を理解し、所属学科への帰属意識を持たせるとともに、今後の学修モチベーションを高めることを目的としています。この「SOJO 基礎」は「Ⅰ・Ⅱ」と通年の必修科目になっていますので、前期の14回目、15回目にはレポート作成を夏休みの宿題としています。

(シート 32)の右側の方ですが、赤い文字で書いてありますが、先ほどの「今週の活動とトップニュース」という個人でやる作業ですね。そして、青文字部分がチームでやる作業です。授業中にやるのではなくて、これらを授業ごとの課題として挑戦させることを組み込みました。

これが評価の基準です(シート 33)。半分ぐらいの評価割合がポートフォリオ、この赤い部分ですね。これを評価に組み込むということです。このやり方を前任の大学でもやっていたのですが、なかなか評価をしづらいということもあり、基本的には学生が書いていることを真実と考えて評価することになっています。

例えば新聞記事の内容について、感想になっている場合があるわけですね。感想ではなくて、どう批評するかを評価していく。そして感想の場合は減点をしていくという方式で、先生方にもお願いしているところです。

学習時間

先ほどの学習時間のことですが(シート 34)、ちょっとややこしいですが、上2つは先ほどお見せしましたアメリカと日本の学生さんの1年生の課外学修時間です。それから3番目のものですが、ちょっと中

央を見ていただきますと、昨年の授業アンケートなのですけれども、2 年生以上ですから今の 3 年生以上になりますが、これには薬学部も芸術学部も入っています。

これを見ますと 1 時間未満が 32%、上のグラフと計測の時間帯区分が少しずれているので申し訳ないですけれども、色分けをしておりますのでそれをご覧いただければと思います。結構な学生さんがあまり勉強をしてないのですが、実は昨年度の 2 年生以上は、このプログラムを受けていないのです。

下の方は昨年の 1 年生、今の 2 年生ですけれども、彼らは薬学と芸術学を除いた学生さんたちだけの集計ですけれども、1 年間このプログラムの試行授業を受けています。昨年 4 月に試行をしたクラスです。少なくとも、学修時間数が昨年度 2 年生以上の学生よりも多くなっています。

今年 4 月から始まった新しいプログラムでは薬学もやっておりますが、まだ集計ができていないので今日はお見せすることができません。学修の質を考慮せず時間というものについてだけで見ると、学修時間の量が増えたということは分かります。

これはポートフォリオを用いて、すべての科目において「到達度レポート」を作成することも含めて、成果が出てきているのではないかなと思っております。

もう少し分析しますと学科ごとのデータもございます。あまり細かいのでこのデータは先生方のお手元にはございません。この IDE のセミナーに資料を出したときにはできていませんでしたので、写真を撮っていただいて結構ですから、ご覧いただければと思います(追加シート 35)。確かに増えているようだということは、ご理解いただけるかと思います。

e-ポートフォリオの将来像

ポートフォリオによって期待できるもの。これもよくいわれることですが、修学生活の自己管理と分析ができる。そして何ができたのか、できなかったのか、その原因は何なのか等を学生自身が文章で内省していく。そのことにやはり担当教員も、目を向けることが必要だろうと思います。

なぜこんなことを私が力説するかといいますと、私立大学の場合、特に本学がそうなんですけれども多様な入試形態で学生を受け入れています。着任したときにびっくりするような試験、入試制度がございました。推薦入試、指定校制、そんなのは当たり前ですけれども、専願志という入試制度がありまして、それはいったい何ですかと、指定校制とどう違うんだろうと思うと、AO みたいなものらしいのですが、もっと緩やかで、どうも異なることをやっている。また、高等学校での履修状況によっては、例えば物理を履修していない学生さんですね。あるいは数Ⅱがなかなかうまくいかない学生さん、いろいろな学生さんが入ってくるわけです。そうすると例えば機械工学科で 1 年生の時間割を見ますと、月曜日の 1 限目に基礎数学、2 限目に基礎物理をやって 3 限目に機械力学を学んでいる。それは無理でしょうと思うんですね。しかし現実はそのようなことを平気でやっているわけです。

大学大綱化以来、専門科目がどんどんどんどん前倒し前倒しになってきています。そういう多様な学生さんがいるにもかかわらずです。しかしカリキュラムを2本同学年に走らせるのもなかなか難しいわけですから、もしかすると、第2機械工学科をつくらなければいけないような事態にも追い込まれるかもしれません。そこら辺は難しいところですが、多様な学生さんがいるということです。それに何とか対応しなければならない。e-ポートフォリオを使えば教職員による迅速な修学学生の指導もできるようなことになるだろうと思いますし、保護者懇談会での記録も反映できるかもしれません。

今後順調にいけばの話ですが、いろいろなものにポートフォリオを拡大できるわけです(シート36)。例えば作品集などもあります。理工系の場合だったら実験実習のノート。数年前に大きな話題になった実験ノートがありますが、こういうものをデータ化していくということです。それから卒業、修士研究等の活動記録、例えば将来日報や週報、月報につながっていくだろうと思います。それから学生プロジェクトの記録、大学の学修、活動記録、こういうものができる。

こういう記録(エビデンス)を持って、就職活動をしてもらいたい。私は大学でこういう活動をしてきました。卒業証明書あるいは単位取得証明書だけではなくて、こういう実績のある私を採用してくださいという、いまとは逆の就職活動形態になっていくだろうという気がしております。

先生方の中にも参加をされた方がいらっしゃるかもしれませんが、先週(8月)東京のある大学でありましたセミナーで、企業の方々がいろいろとお話ししてくれました。大手の特に情報系の方からの話では、今の日本では労働人口が減っていった学生さんたちの売り手市場になっている。それは事実だ。でも我が社は、ある企業さんですけども、求人は日本人の学生だけではない、と。

その一言であとはすべてお分かりかと思いますが、学生自身が自分はどういう力を持って、どういうことで活用できるんだということを、エントリーシートの文章や面接時の言葉ではなくて、成果のエビデンスを持っていかなければならない。大学の科目の履修の成績表が全部Sであれば、それでオーケーですかという話です。そうじゃないわけですね。学生が実際に培ってきたものを、エビデンスで残す必要が当然出てくると思っています。

本学のポートフォリオにも最終的にはこういうことを期待しているわけですけども、相当な時間がかかるか、あるいは挫折するか、どちらかになるかわかりませんが、要するに社会の状況の変化が非常に早いということ踏まえて、これから考えていきたいと思っております。

e-ポートフォリオの意義

さて、なぜポートフォリオなのかということを、少し大きな視点から考えていきたいと思います。10年ほど前にこういう記事がありました(シート38)。ご記憶はございますでしょうか。大学卒業後に認定試験を検討する。私立大学は一斉に反発しました。猛反発があったわけですね。

でも、教育再生会議がこのようなことを提案したときに、やはり言い出したかという気がしました。要するに、簡単に卒業できない、出にくくする、ということです。ある一定の知識、あるいは能力もスキルも測ることができる試験が実施できればですけども、ある程度成績を満たすことができなければ、その大学を卒業させないという方向に持っていかだろろうと感じてはありました。

その翌年にはややトーンが落ちまして、今言っていますように成績評価を非常に厳しく、厳格化しなさいという方向に少しトーンダウンしました。厳格な成績評価ということは具体的にどういうものかも難しいことです。ありますし、大学としてそうやっていてもお一人お一人の先生方に温度差はかなりあるわけです。

いろいろなシラバスを拝見しておりますと、非常に事細かに、例えばレポートが何点で定期試験が何点で小テストが何点でと、項目ごとに挙げられているシラバスもあれば、出席状況を見て総合的に判断するという、どうしているのかまったく分からないような成績評価をお書きになっているシラバスもございます。

ですから、その辺は各大学あるいは各学部、学科の統一的なご判断があるだろうと思いますが、卒業認定試験という記事が出たからには何とかしなければならないという気がしております。

現在の大学は、非常に複雑になっておりますし、多機能化しています(シート 39)。学士課程教育とは正課教育と正課外の教育のすべてを含めており、ごちゃごちゃになってなかなか分からない。その中で自分はいったいどの部分を担当しているだろうかということを理解し実践しなければなりません。教員だけではなくて、職員の方々もいろいろなものに参画するようにもなっている。これも事実です。じゃあ、教員と職員だけが頑張ればいいのかというと、そうじゃない。学生さんもこれに巻き込んでやらないといけない。これが一番肝心なところですよ。

もう 1 つは、大学の中、1 つの大学というプール、池の中で完結するかというとそうじゃない。企業あるいは自治体等、社会的要因も大きくかかわってくるので、大学教育が大きく変化していることは、いや応なく分かるわけです。特に先生方の中には、すべての先生とは申しませんけれども、自分の学生時代のことを思い出されて、「僕はこうした、私はこうした。だから、今の学生もそうすべきである、あるいはできるはずだ」。ということで、昔ながらのお考えでいらっしゃる先生も決して少なくはございません。

学生というものは教員の背中を見てついてくるものだと理解されている先生も一定数いらっしゃると思います。研究をする大学、推進している大学はそれでもいいかもしれませんが、ここまでユニバーサル化した現在の日本の高等教育を見ますと、「俺の背中を見てついてこい」と言って振り向いたら、誰もいなかったということになりかねないわけです。

ですから、そういう意味においても、学生一人一人に対してどのような教育をやるべきかが求められている時代だろうと思っています。文科省もよく言っておりますけれども、「教える教育から能力を引き出す教育へ転換」しましょうということです。

これもやらなければいけないことですが、なかなか難しい。能力を引き出す前に知識を与えなければな

らない。知識を与えるためには時間が必要である。時間は昔よりもかかる。補習もやらないと。これだけやってもうまくいかない。ですから、どうしても知識注入型の授業にならざるを得ない。このことを深刻にお悩みになっている先生方も大変多くいらっしゃるわけです。

そうすると、どうするか。これは今日のポートフォリオとちょっと別の次元の話になるので、深くはお話しませんが、1つの方法は大学の大綱化以来、前倒しになってきた専門科目を思い切って後ろ倒しにすること。それから、一部の大学等でお始めになっているんですけれども、学部4年と大学院2年、6年を1つの一貫教育みたいに考える柔軟なやり方です。もちろん4年間で学士課程卒業、6年目に修士修了ということは制度上残っていますから守らないといけませんので、学修システム上で組み替えてやるべきではと思っています。

それは置きまして、こういう教育をするためには教える教育から学修をさせる教育へ。そしてその次には、学生が主体的に学修する方向に向かわせる。時間がかかるかもしれませんが、こういうことを目標にして、生徒から学生、そして社会人へと育てることへのしかけづくりが現在の勤務先の教育改革の目標でもあるわけです(シート40)。

それからポートフォリオに16年間先ほど携わってきたと申しましたけれども、ポートフォリオに対してはいくつかの考えがございます(シート41)。まずシステムを導入すれば何とかかなと思うことは大きな間違いです。例えば、学修ポートフォリオのシステムの展覧会みたいなものがございますよね。いろいろな業者さんが来て、きれいな色でシステム化された製品を見て説明を受けた瞬間に、これでうちの大学は大丈夫だ、と思われる方が多いのですが、なかなかそうはいかないということです。結局は学生さんと一緒にやらないといけない、汗をかかないといけないということになります。

せっかく導入したのなら、1クール、4年間は歯を食いしばってやってみる。短期的にあまり変えない、とにかくやってみるということです。そうすると組織的運用がだんだんと個人的な運用に拡大している場合があります。そして、ポートフォリオを作成すること自体は目的ではなくて、あくまでも学生の支援ツールであることを念頭に置かないといけない。これも大事だろうと思います。

もう1つの考え方は、大学の改革です(シート42)。大学の改革をやっていらっしゃる大学はないと思いますが、現在の高等教育には大綱化の問題があって、ユニバーサル化、複雑化、機能変化という多様なものが出てきました。

そして、教育改革、入試改革、経営改革といろいろなことをやっている。ですから、教職員の意識改革が必要です、と言っているんですけれども、なかなか難しい。本当に難しいわけですね。仕事が増えるとか、やらされ感とか、新しい試みはちょっと不安だとか、あるいは危機意識の欠如という、さまざまな理由が挙げられるでしょう。

このような中で、例えば1つのやり方として、意識改革をせざるを得ない仕組みを構築することも必要か

かもしれません(シート 43)。要するに教職員の改革だけでよいのか。そうすると、まず教職員目線の図面だけができてしまって、机上の作戦で終わってしまうような心配があるわけです。ですから当然ながら、学生も参画せざるを得ない仕掛けをつくらないといけない。だから、学生にも意識を変えてもらいましょうということです。その 1 つの例としてポートフォリオを使うこともできるのではないかなと思っています。

ここまでの大きなことです。とにかく学生のため、それから先生方もある意味半強制的に意識を変えてもらう 1 つの手段でもあるわけです。本当の仕掛けといいますか、私が考えている仕掛けは(シート 44)、先ほど申しましたように、1 つは学生の意識変革の仕掛けだということです。

2 つ目は、先生方にプロセス評価を行ってもらいたい。私が着任したころの崇城大学の成績の評価区分を見ますと、期末試験 1 回 100 点なんですね。合格点に達しない場合、先ほどちょっと申しましたように、再試験、再々試験、ずっと続いて最終試験と延々と続くようなものでした。最終試験に通らなかったらどうなるのかというと、驚くべき制度があって、ここでは申せないような制度がございましたが、それだけは、さすがにすぐ廃止をいたしました。それがホームページの学則に載っていたわけですね。すぐ削ってくださいと言ったぐらいで、とても今申せませんのでそれだけはちょっとご勘弁していただきますが、後ほど小声でお話しすることがあるかもしれません。

そういうことで、先生方にプロセス評価をしていただく。要するに多様な項目で学生を評価してください。よく今の教育学の先生がパフォーマンス評価というようなことをおっしゃっていますけれども、そういうものを含めても構わないと思いますが、どう定量的に評価できるかということです。

それから 3 つめは、法人、それから職員の顧客満足度の分析です。顧客というのは学生です。そして、それは保護者でもあります。また就職先の企業も含まれます。そういう人たちが満足するような分析を行う。

そしてこれらを可視化するという事に向かわせるわけです。先ほど江本先生がお話になったものは、その 1 つの方法だろうと思います。

実は私はこれらを崇城大学で行っている改革の 3 つの柱と思っているわけです。あまりこういうことを先生方、職員の方々に表立っては申しませんけれども、こういうことをやりながら自然とひとつの方向に持っていっていけば大変ありがたい。しかし、なかなかうまく行きませんので、小出しでお話しするようにしています。これが実は教育改革の原点であり、「SOJO ポートフォリオシステム」を導入した大きな経緯、きっかけでもございます。

データの利用

最後に、その得られたデータをどう使用するかということ。いわゆるみなさま方の大学でも IR ということでいろいろなことをおやりになっていると思います。学生のポートフォリオ、それからおそらくティーチングポートフォリオ等をおやりになっている大学もあろうかと思っています。

それらのデータ, それから学習支援管理システムのデータ, これらをもとにして, 大学の運営あるいは方針, 戦略の決定に利用できるはずなのですが, データを1ヵ所に集めて分析する, あるいは加工して提案するというようなシステムがうまく作用している大学さんは, 一体いくつあるんだろうかなという気もしています。

そういうことをやるのは大事なところだろうと思います。文科省がいろいろな施策で補助金を提供していますが, 特に私立大学の場合はこういうことをやっていますか, やっていませんか, とかいろいろとお尋ねのアンケートが来ますよね。私立大学の先生はよくご存じだと思いますけれども。

そうすると, やっている, やっていない, どれくらいやっていると答える。やっているというのはどこまでやっているんだ, ということがよく分からないんですけれども, とにかくやっていると答える。文科省はどうしてこんなことを言い出したのかというと, 大学改革が思ったように進んでいないからです。ですから, 文科省が補助金をちらつかせて我々大学を強く再教育, 再審査しているわけです。

よく耳にすることですが, そのアンケートのある項目に対して, 本学はやっているとの回答が多いそうです。もちろんエビデンスを付けてです。ところが, そのエビデンスはエビデンスになりません, という文科省からのお返事が来る。大学は提出したエビデンスがエビデンスにならないということが分かってない。ある項目を単に行ったという、アリバイにすぎないことに気がつかないのです。

また, IRを担当する専門の先生方や職員の方々を, 私立大学, 特に私どものような地方の小さな大学では十分に確保できない。申し遅れましたけど, 1学年740名ぐらいの小規模大学です。小さな大学ではIR, 情報関係の専門職の人的資源の充足が難しいことも実は起きているわけです。

ただ, このような方向で, こういうふうにできますよという見本はあっても, なかなかそれが現実的に動けるかどうかは, まずは大学での意思決定ということになるだろうと思います。今日お話ししましたポートフォリオもその1つの問題ではありますけれども, まだ解決しないといけないものがたくさんあるわけです。例えば, 学生が書いた文章をどういうふうに分析するのか。AIが行うのか。AIだけに任せると, エントリーシートをAIで分析してもらってしまうというようなことにもなりかねませんので, なかなか難しい。

ですから, 完璧なものはおそらくできないでしょう。先ほど評価できない部分もたくさんあるということを江本先生もおっしゃっていましたが, ある程度限界はあると思うんです。ただ, 学生一人一人, 多様な学生さんが今後ますます入学するわけですので, そういう学生さんにどう対処をしていけるのかというのが, 特に私立大学においては問われているわけです。

つたない話で申し訳ございませんでしたが, 高等教育に携わってまいりました一員として, 金沢工業大学と現在の崇城大学のことを混ぜながらお話ししました。何か1つでも先生方の, あるいは職員の方々のご参考になることがあれば幸いです。どうもありがとうございました。(拍手)

渡辺: 藤本先生, 大変興味深いお話, どうもありがとうございました。それでは藤本先生のご講演に対する

ご質問、ご意見をお受けしたいと思います。質問のある方は挙手をお願いいたします。担当者がマイクをお渡ししますので、所属とお名前をお知らせいただいた後に質問をお願いします。よろしくお願いします。

今井： 北大の今井です。最後に文章の分析の話をちょっとおっしゃっていたと思うんですけど、前の方で文章も一緒に入れるようなポートフォリオを作らせている。それによってアンケートの答えのコメントがだいぶ変わったというようなお話をされていたように思います。変わったというのは何か分析をしてやったというよりは、先生方の感覚としてそうなったということをおっしゃっているんですか。

藤本： 授業アンケートの結果が教員に返ってくるんですね。即座に返るんじゃないですけども、時間がかかって。それを担当教員が今までの学生さんとそのポートフォリオをやったからの学生さんでは明らかに違うと、お一人お一人が。

要するに、例えばふざけた書き方とか先生方を中傷するような文言、これが極端に減っている。ゼロじゃありません。なくなってきた。アンケートというのはどういうものかということは当然教えていますけれども、到達度レポートの入力画面に名前が出ていますから、そういうような緊張感があるんでしょうね。もちろん学生には一切名前は伝わらないと言っていますし、我々も知ることはできませんけれども、やはりそういう一種の緊張感があるということは先生方がおっしゃっています。

今井： その分析をされたりとかというのはされてないんですか。

藤本： はい。それはあまりできていません。やるべきだと思いますけれども、現在の崇城大学ではそこまではまだまだ時間がかかると思います。金沢工業大学はやっているんですね。IBM で、Watson 君ですか。あれは相当な資金が掛かるんですよ。うちじゃ、なかなか難しいですから、もうちょっと単価が安くなったときに考えます。

今井： 分かりました。我々も同じように分析をどうしようかと思っていたので、ちょっとお聞きしたかった。

藤本： もし北大の方でそういうシステムができましたら、こちらにお分けいただきますように。

今井： ありがとうございます。

渡辺: ほかにありますでしょうか。

安居: 室蘭工大の安居です。金沢工大のお話も以前にうかがって、先生の共通したポリシーというのは、文章を学生に書かせること。これは大変いいことだと思っているんですね。その一方で、どんどんペーパーレス化に進んでいる。

だけれども、先生として完全ペーパーレス化に行っているのか、それともここだけは紙媒体で残しておきたいという、その部分があるのかということをおうかがいたいのですが。

藤本: 完全なペーパーレス化はおそらくできないだろうと思っています。そして、この部分だけ残しておきたいというのは、ペーパーの方が見やすい場合があるからですね。一覧でさっと見るときに。ですから、到達度、達成度レポートというのは学生にプリントアウトして提出してもらっています。

自分の担当科目で例えば 50～60 人の受講生がいたとき、それを画面で見ながらやるというのは、いちいち開いて見ると結構大変なことになるだろうと思います。学生にも、今週の活動とトップニュースは別にしまして、例えば学生に配布したものとか、学生が作成したレポートというのがありますね。それらを「SOJO 基礎」では全学科とも紙バインダーに綴じるようにさせています。

ですから、1 科目 1 紙バインダー。背表紙も付けて。これは卒業するまでに 60 冊ぐらいできるはずだ。それは必ずためになるからそうしなさい。要するに、単位を取りっぱなしにしない。こういうことがあったという記録が必ず役に立つと言って、保存させています。

そういう集大成したものを持って就職活動するのがアメリカです。そういうことも考えながら、学生には記録媒体として電子媒体もいいけれども、それも残しておきなさいということで整理させています。

渡辺: ほかにありますでしょうか。どうぞ。

空閑: どうもご講演をありがとうございます。室蘭工大の空閑と申します。私もかつては学務担当の副学長をしているときは、本学の学務系のことは 100%押さえているつもりでした。けれども、今現場を離れて、なかなか本学の「e ポートフォリオ」の活用状況を、聞けば分かると思いますが、分からない。この途中のところで、教員からのコメントを書く欄とかがあって、どのくらいの先生方がこういうところにきちんと関与をされているのかをおうかがいしたい。

その後、そこを通過しないと授業アンケートにつながっていかないとのことですが。これでどのくらいの授業アンケートが実際学生諸君から取れているのか。あと本学で一番私が担当していたころに弱かったのは、それを学生諸君にフィードバックしたり、あるいは教員が授業に実際役立てたりすることを考えると、結果が

出てくるまで非常に時間がかかって、そこが大きな課題でした。先生のところはどのような感じなんですか。

藤本: もともと紙媒体で崇城大学がやっていたときには、アンケートの集計と公表まで半年以上、下手をすれば1年かかっていた。そうすると使いものにならないわけですね。金沢にいたときもそういう事情が起きていたんです。そこで金沢の場合は、人的資源を投入してこの電子データ化をしました。その専用のアンケート職員が2人。そうすると、1月かからないのです。

前期の授業が終わって、前期の科目の授業アンケートの集計、それから教員がフィードバックしますけれども、その締め切りは9月いっぱいだったんです。後期の場合は3月いっぱいでは新年度はそれがアップされるように。これは学長からの至上命令でした。フィードバックをしない場合先生には、名前の一覧が出る。そこまで徹底するかどうかです。

崇城大学の場合は電子化しましたが、人的な資源の問題がある。それから学生のアンケートの内容、文章によっては、極端に少なくなったんですけども、先生を誹謗中傷するような文言がある。それを見て、何を言っているんだと思う先生もいらっしゃる、すごくショックを受けて、がくつとされる先生もいらっしゃるんですね。そういう文言を除く作業をやっている。ですから、昨年度の後期の科目が出たのが確か7月ぐらいだったと思いますね。だから、やはりそれは遅い。

それからもう1つ、先生がおっしゃった、学生がどれくらい入力しているかということ。「到達度レポート」があって授業アンケートに進みます。「到達度レポート」が評価の10点分ぐらいあるわけです。それを出さない学生さんは、残念ながらまた来年会いましょうということになる可能性が高い。ですからほとんどの学生が提出している。もちろんそれは科目ごとの提出者数でわかります。ただ、それは数的にどうだということじゃありませんが、少なくとも私が今年受け持った学生で提出しなかったのは1名いました。今頃は出しているだろうと思います。

渡辺: あと2〜3分で。よろしくお願いします。

鈴木: 北海道科学大学の鈴木でございます。大変興味深い話で、ありがとうございました。それで、少し細かいことをまずおうかがいしたいんですが、「PowerPoint」の13ページ目のところで、〈2〉として学生に継続的に利用させる仕掛けとして「各科目のシラバスに」というふうにお書きになっています。この具体例が先ほどの崇城「SOJO 基礎」の場合にはたぶんポートフォリオが52%というふうに書かれている、ここだと思います。各科目にというのは、例えば数学だとか物理だとか英語でも何でもそういうものに、必ずこのポートフォリオに記載するということは何らかの形で達成目標として入れられて、その達成目標の評価としてこれを配

点していくと、そういうふうを考えればよろしいのでしょうか。

藤本: 資料の 33 ページにシラバスがあります。これは一部ですけれども、「SOJO 基礎 I」の評価基準です。その上の方に中間試験、定期試験、小テストがありますが、これが全科目の統一のシラバスの成績評価の区分です。そして、到達度レポートは必ず作成するということを付けていますので、必ずポートフォリオの評価に入るわけです。

だいたいどの学科でも 10%, 10 点分ぐらいをお書きになっています。もう少し低くしたいところがあれば 5 点。学生はあまり低くすると 5 点を捨てちゃうんですね。そういう学生もいます。それから独自のポートフォリオをやろうとしている、あるいは紙媒体で科目によってはおやりになっているところもあるので、それもうこういうところに加える場合もあります。お返事になっていますでしょうか。

鈴木: すみません。せっかくですから、もう少し教えてください。つまり、到達度レポートというのが、例えば数学ですとか生物ですとか、そういった科目の中のどういった学修成果の達成と関連しているかというところはどこかに書かれていますか。

藤本: 学生の到達度目標が、シラバスの中に書いてあるんです。科目ごとに、その科目独自のものが。それは CP に沿った、DP に沿った形で書くようになっていますけれども、それがそのまま「到達度レポート」の設問項目になります。

鈴木: そうすると、カリキュラムマップのどこかには必ずこれが最終的にディプロマポリシーにつながるような設計になっているという。

藤本: なっている、なっているはずですが、申し訳ございませんけれども。そういうような設計思想であることは事実でございます。

鈴木: よく分かりました。ありがとうございます。それともう 1 つだけ、すみません。この電子媒体でうちもいろいろ書かせるということをするんですけど、100 から 250 字とかって言っても、本当に 10 文字ぐらいしか書いてこない学生がたくさんいる。すべてのこういったところについてそれぐらいの量、この新聞なんかも拝見しても相当なボリュームで書かれているので、きっとそうなんだろうなと思いますけれども、だいたい皆さんびっちり書いてこられる？

藤本： クリアしています。それは制限文字数を守らない場合はゼロになっちゃいますから、減点されます。学習を仕事と置き換え、その仕事の制約条件を守らなければどうなりますか、と学生に問いかけています。

鈴木： 分かりました。ありがとうございます。

藤本： ただ、今、先生のご質問にあったんですけれども、弊害もある。200 文字、250 文字でだいたい書くわけです。それをずっと何回もやっていると、こんな感想が出てくる。これで私は長文を作成する能力が付いた。要するに彼らにとっては 200～300 文字が長文なんです。でも、やはりそういう文章を書くことがなかった学生が、250 字を書き続けていく。それを習慣化していく。リポートは別に大きいリポートもありますので、やはりそういうところからこつこつとやっていくしかないかなと思っています。

鈴木： ありがとうございました。

渡辺： よろしいでしょうか。先生、1 つお聞きしてよろしいでしょうか。先ほど学生面談カルテというのがありましたけれども、チューターがやっているということですが、そのチューターというのは特別にそういうチューターの先生がいらっしゃる？

藤本： 崇城のチューターは、もちろん学生相談室の先生方は特別にいらっしゃいますけれども、そうじゃなくて、各学科の先生方がお 1 人当たり 5 名、1 学年 5 名。ですから、約 20 名ですね。4 年生は研究室になりますから、15 名ぐらいの学生を担当します。それで教員が不足している学科については、私がおります総合教育センター、基礎教育系の先生方が応援に行っています。

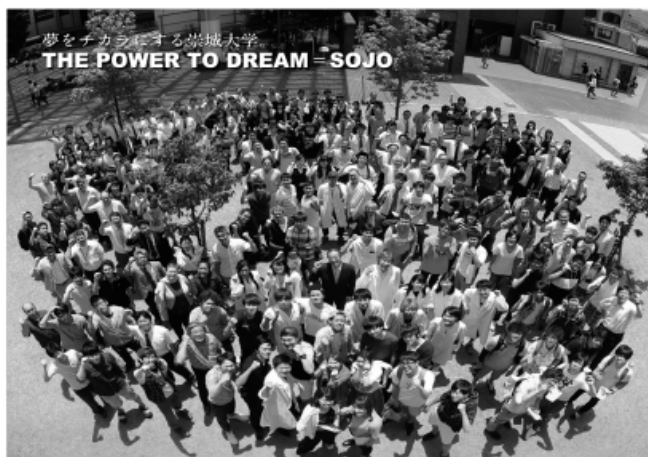
渡辺： はい、ありがとうございます。それではちょうど時間となっておりますので、特別講演の 2 を終了させていただきます。藤本先生、どうもありがとうございました。（拍手）

細川： 藤本先生、渡辺先生、どうもありがとうございました。それでは、これからおよそ 15 分の休憩を取りまして、予定通りシンポジウムは 15 時 30 分から開始いたします。

令和元年度 IDE大学協会セミナー 主催 IDE大学協会北海道支部 共催 北海道大学 190830

学修ポートフォリオの運用と課題 ～SOJOポートフォリオシステムの構築をとおして～

1. はじめに
2. ポートフォリオとは
3. SOJOポートフォリオシステム
4. おわりにかえて なぜポートフォリオなのか～より大きな視点から～



【大学院】
工学研究科 芸術専攻科
薬学専攻科
【学部】
工学部
機械工学科
ナノサイエンス学科
建築学科
宇宙航空システム工学科
情報学部
情報学科
生物生命学部
応用微生物工学科
応用生命科学科
芸術学部
美術学科 デザイン学科
薬学部
薬学科

藤本 元啓

1. はじめに

ポートフォリオの広がり

中央教育審議会答申(2008年)

学生が、学習過程ならびに各種の学習成果(例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など)を長期にわたって収集したもの。

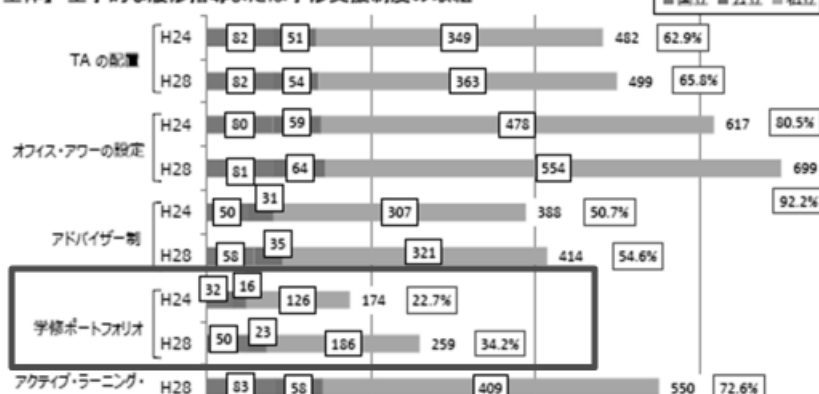
それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的とする。

従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。

3

学修ポートフォリオ実施大学

【大学全体】全学的な履修指導または学修支援制度の取組



H24: 国立32、公立16、私立126 計174@22.7%

H28: 国立50、公立23、私立186 計259@34.2%

平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)

令和元年5月28日文科科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室

4

2. ポートフォリオとは

5

学修ポートフォリオシステムの 導入・活用等の参考指針

平成 29 年 5 月 31 日

公益社団法人 私立大学情報教育協会
大学情報システム研究委員会

大学情報システム研究委員会委員名簿（平成 29 年 5 月 31 日現在）

	氏名	大学・企業名	所属
担当理事	近田 康行*	立教大学	経済学部教授
※	大野 高敏**	早稲田大学	理事
委員長	猪井 淳	帝塚山大学	学長
委員	片岡 竜太	昭和大学	歯学部教授
※	杉山 由紀男	創価大学	文学部副学部長、教授
※	小川 賢代	日本女子大学	理学部数物科学科教授
※	藤本 元香	崇城大学	総合教育センター教授
75'△'4'-	森本 康彦	東京学芸大学	情報処理センター准教授
※	小松 大*	株式会社朝日ネット	営業二部部長
※	酒井 智行**	※	※
※	加藤 博文	株式会社ニッセイコム	公共情報事業本部システム第二部部長
※	奥出 健太郎	株式会社富士通マーケティング	システム本部関西・中部システム統括部関西第二システム部

* 平成 25 年度～平成 27 年度（大学・企業名、所属等は当該期間のもの）。

**平成 28 年度より

<http://www.juce.jp/info-system/port.pdf>

6

ポートフォリオ (Portfolio) とは

1. 紙挟み、バインダー
2. 写真家やデザイナーなどが自分の作品をまとめたもの
3. 金融機関・機関投資家などが所有する各種金融資産の一覧表
4. 教育ポートフォリオ

修学生活における自己管理と自己評価からの気づき

学修プロセスと成果とを学生・教員が相互検証

自己実現への目標 ⇄ 学ぶ意欲

①活動記録、成果物、自己評価

ノート、プリント、ワークシート、メモ、大福帳、
グループで作成した発表資料や報告書、作品、
レポート(成稿、草稿、資料)、自己評価記録etc

②学生指導記録

7

eポートフォリオの種類

- ①自己・生活管理系ポートフォリオ
- ②学修(ラーニング)系ポートフォリオ
- ③キャリアデザイン系ポートフォリオ
- ④総合系ポートフォリオ

記憶

記録

- ①学修過程の記録・確認による成長過程
- ②知識やスキルの意識化
- ③自己分析、自己認識、自己発見
- ④将来の目標設定
- ⑤自己達成感
- ⑥生活習慣・タイムマネジメント

人間教育
人間形成

- ⑦個人面談資料
- ⑧FD、SD、IR
- その他……

教職員、法人

8

学修eポートフォリオの活用

学修過程において作成した記録や成果物の保存

- ①修学・生活やキャリアデザインの記録、目標達成度
- ②レポート、発表資料、テスト、
 - ・レポートや発表の場合は収集した情報・草稿・成稿など
 - ・発表の場合は討議資料・プレゼンテーション作成資料・パワーポイントデータ・最終レポートなど
- ③製作・制作の場合は設計草稿図・完成図・作品の写真やビデオなど

eポートフォリオの活用

- ①学生自身による振り返り
- ②学生と教員あるいは学生同士の意見交換・評価とその文章化
- ③学修目標について学生個人が自己評価、あるいは第三者を交えた相互評価と文章化
- ④成果の公表、発表会
- ⑤就職活動の自己データ
- ⑥教員にとっては、学生の理解度の把握、自らの指導過程の確認
- ⑦職員にとっては、データの整理と分析、IR

9

総合系eポートフォリオ(統計資料)

【単位修得状況】

教育課程凡例

法学基礎	英語教育	数理基礎	基礎実務	専門教育	その他
------	------	------	------	------	-----

卒業要件に必要な最低単位数 124単位

120	20	40	60	80	100	120
-----	----	----	----	----	-----	-----

進捗率 20% 40% 60% 80% 100%

単位修得状況

120	20	40	60	80	100	120
-----	----	----	----	----	-----	-----

【学系度重取得状況】

No.	資格試験・課外活動	単位取得	試験日	結果	点数	合格したポイント
1	Excel1207	1期	2011/5/15	合格	84	
2	Word2007	2期	2011/5/15	合格	76	前日に本番と同じ条件で模擬的に模擬試験を行ったものの、欠点があった。
3	ITパスポート試験	3期	2011/5/15	合格	1180	更新

履歴コード別試験の履歴

履歴コード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Excel1207	合格									
Word2007	合格									
ITパスポート試験	合格									

【学系度重取得状況】

No.	期	科目	内容	履修理由	履修者
1	1期	2008/9/10	学修中に科目以上履修し、学修ポイントが0-324	条件を満たした。	
2	1期	2008/9/10	学修に対する取組みの高まりが認められた。	履修理由 2	
3	4期	2008/9/27	学修として履修の行動があった。	履修理由 3	

履歴コード別試験の履歴

履歴コード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Excel1207	合格									
Word2007	合格									
ITパスポート試験	合格									

【学系度重取得状況】

No.	期	科目	内容	履修理由	履修者
1	1期	2008/9/10	学修中に科目以上履修し、学修ポイントが0-324	条件を満たした。	
2	1期	2008/9/10	学修に対する取組みの高まりが認められた。	履修理由 2	
3	4期	2008/9/27	学修として履修の行動があった。	履修理由 3	

履歴コード別試験の履歴

履歴コード	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Excel1207	合格									
Word2007	合格									
ITパスポート試験	合格									

学内にある情報

時間割

履修

出席

成績

ポート
フォリオ

修学実績

ポートフォリオ
レポート
学期ごと／科目ごとの成績
学期ごと／科目ごとの出席状況
資格取得状況 ...

現状把握

GPA
成績
出席状況
履修状況
時間割
課題の提出状況や提出期限 ...

10

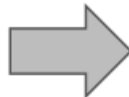
eポートフォリオシステム構築の目的は何か

自学の教育にどのような変化をもたらすことができるか
つまり教育プロセス全体をいかに向上させることができるか

1. 学生の強みと弱みの確認はできているのか
2. システム構築のコンセンサスは得ているのか
3. 誰が、どの部署が先導するのか
★ポートフォリオの精通者とシステム技術者
4. 運用は大学全体、学部、学科、単独科目なのか
★カリキュラム上の位置付け
5. 継続的な資金支援は可能なのか

11

成功事例は？
失敗事例は？



うまくいっているの？

【学生の問題点】

- ・ポートフォリオの意義、目的及びメリットが理解できていない。
- ・学修状況の書き込みを継続しない。
- ・効果的な学修方法を身につけようとししない。

【教職員の問題点】

- ・学生にポートフォリオのメリットを理解させられない。
- ・教育プログラムの評価に反映する方法がわからない。
- ・学生の記録や自己評価にフィードバックをしない、煩わしい。
- ・そもそも学生の記載情報は正しいのか、効果への懷疑。

【大学組織での問題点】

- ・導入目的や意義が組織として十分に認識・共有されていない。
- ・組織的に活用する体制が確立されていない。
- ・継続的に運営するための財政的基盤、設備、人的資源がない。

12

eポートフォリオシステム構築と展開の条件

- ① 教育課程や各科目において学修ポートフォリオの位置づけ、活用方法、利用のメリットを明確に提示する必要がある。
- ② 学生に継続的に利用させる仕掛けとして、各科目のシラバスに学修ポートフォリオの活用方法を明記し、評価項目の一つに学修ポートフォリオの活用状況の設定を加える。
- ③ 学生に積極的に利用させるためには、学修記録の内容や振り返りに対する教員のコメントなどのフィードバックが不可欠である。

13

eポートフォリオシステム構築と展開の条件

- ④ 学修ポートフォリオの導入及び利活用には、学長のリーダーシップのもと全学的かつ組織的に取り組むことが求められる。
- ⑤ 大学組織として学生を支援するためには一人ひとりの学生の学修に寄り添う覚悟が求められていることから、教職員の意識変革を促す努力が必要である。
- ⑥ 学修ポートフォリオの実現・維持には、人的資源の配置、施設設備、財政的支援等の適正化に関して理事会を中心とした組織での共通認識と意思決定が必要である。

14

eポートフォリオシステムの導入形態

(1)「独自開発」

学生の振り返りによる学修習慣の確立の他に、教員の教育改善の促進及び組織的な教育改革を実現するという明確な理念を全学的な場で確認した上で、設計方針を確定していくことが重要である。他方、システムを開発した後も修正を加えて行くことが多いことから、時間とコストが拡大する可能性が高い。また、導入に伴う開発業者の責任問題として、業者の倒産やサービス撤退など、eポートフォリオシステムの継続的な運用に協力が得られない場合があるので、業者の選定を厳格にする必要がある。

(2)「パッケージ利用」

パッケージソフトの基本機能が中心となっているので、活用方法・内容に適合したものを選択することで比較的導入の手間が少ない。他方、ポータル機能やシラバス機能などオプションとして追加・実装することもできるが、コストの拡大に繋がる可能性が高い。その上で、クラウドサービスを利用する場合には、サーバ設備を管理・運用するメンテナンス費用の負担や担当者の人件費を軽減できるが、長期間に亘る利用となることから、利用料の設定をどのように見通すかが難しい。また、導入に伴う販売業者の責任問題として、業者の倒産やシステムの保守サービス撤退など、eポートフォリオシステムの継続的な運用に協力が得られない場合があるので、業者の選定を厳格にする必要がある。

(3)「オープンソース利用」

無料使用の場合が多い。但し、海外システムではメニューが英語表示になっており、日本語化への費用が発生する可能性がある。システムのバージョンは、比較的頻繁に更新されており、システムに不具合が生じた場合でも対策が講じられている。また、オープンソースを利用する場合には、運用をシステムに合わせる必要がある。しかし、学内の要求に応じたシステムにカスタマイズする場合は、専門の教職員が必須となり、該当者が不在の場合には改めて業者に依頼することが必要となる。そのために、学内に専門家が必要となるため大学での活用が広がらない悩みがある。また、導入に伴う関係者の責任問題として、オープンソースの利用に専門的な知見を有し、維持・運用にリーダーシップを発揮する学内関係者が退職するなど、eポートフォリオシステムの継続的な運用に協力が得られない場合があるので、複数の関係者を確保しておく必要がある。

15

3. SOJOポートフォリオシステム

1. 学生面談カルテ
2. 入学時自己診断シート
3. 学期末活動報告書
4. 科目の学修到達度レポート
5. 今週の活動とトップニュース

★学生はPC、スマートフォンから入力

16

崇城大学の問題点

学生

1. 入学目的、学修意欲の欠如
2. 学修時間数の不足

教員

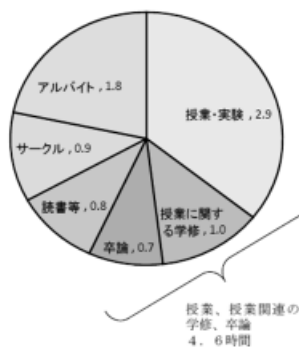
1. 知識注入型の座学授業が中心
知識量測定型試験の比重大
再試験、再々試験……、最終試験
2. 学生指導情報の共有不足

これらの打開ツールとしてeポートフォリオを活用できないか

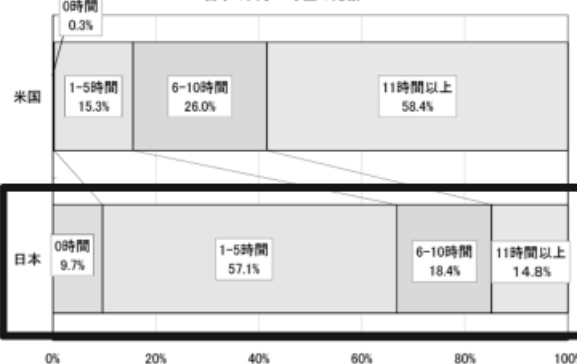
17

例えば、学生の学修時間の現状

学生の活動時間の分布(計 8.2時間)

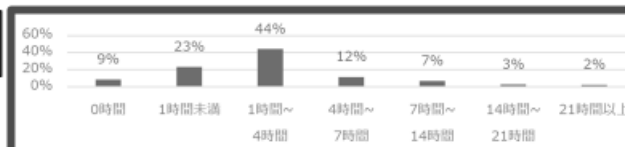


授業に関連する学修の時間(1週間あたり)
日米の大学一年生の比較



出典: 東京大学大学経営政策研究センター(CRUMP)『全国大学生調査』2007年、サンプル数44,905人

崇城大学学生の 1週間あたりの学修時間



対象者: 全学部・全学科の2年生以上(2,746名) 実施日: 2018年4月9日

18

「気づき→努力→自信→意欲」を引き出す
SOJOポートフォリオシステム

1. 自己実現の目標設定し(Plan)
2. 目標を達成するための活動プロセスや成果を記録(Do)
3. 集積した記録をもとに到達度を自己評価(Check)
4. 次の改善を図る活動計画を作成し実行(Action)

1週間単位、学期単位、学年単位で自らの目標の到達度を
確認しながら、

- ① 自学自習の姿勢を身につける
- ② 生活スタイルを確立する
- ③ 継続的なキャリアデザイン実践を身につける

これをサポートするのが教職員のフィードバックコメント

19

1. 学生面談カルテ

(2017年度まで紙媒体、2018年度からeポートフォリオ)

■ 学生情報

■ 面談記録一覧

時系列での記録
情報の共有による迅速な対応
保護者面談時の手元資料

全文検索:

検索

面談日時	2017/09/20 13:00 ~ 14:00
面談内容	修学, 進路
コメント	公開中 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
登録者	日電 一郎
登録日時	2017/09/20 13:24:56

面談日時	2017/09/15 13:00
面談内容	修学, 資格, 進路
コメント	非公開 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
登録者	日電 一郎

非公開情報とすることも可能

崇城大学 = SOJOポートフォリオシステム =

1. 学生面談カルテ

1. 目的 学生の対する迅速な修学生活指導
保護者に対する説明責任
2. チューター個人面談記録
 - ・1年次
 - ①入学直後、(前学期末)
 - ②後学期オリエンテーション、(後学期末)
 - ・2～4年次
 - ①前学期オリエンテーション、(前学期末)
 - ②後学期オリエンテーション、(後学期末)
3. 保護者面談記録: 保護者会総会、地区保護者会
4. 学修相談、学生相談、CA面談、CC面談、その他
5. 閲覧アクセス権限あり

21

2. 「入学時自己診断シート」

(2017年度まで紙媒体、2018年度からeポートフォリオ)

1. あなたは所属する学部で何を学ぼうと考えていますか。【150文字程度】 [0文字] 2. 現時点で、あなたは卒業後にどのような進路(職種・分野・進学等)を考えていますか。【150文字程度】 [0文字] 3. あなたは卒業後の進路を現実化するためにどのような行動をとるべきだと考えていますか。【150文字程度】 [0文字] 4. あなたの1年次での目標は何ですか。【150文字程度】 [0文字] 5. 上記4で記した目標をどのように達成するつもりですか。【150文字程度】 [0文字] 6. あなたが本学学生として最低限守るべきと考えるルールやマナーは何ですか。【150文字程度】 [0文字]	従来の設問項目を改編 150文字程度の記述式 1. あなたは所属する学科で何を学ぼうと考えていますか 2. 現時点で、あなたは卒業後にどのような進路(職種・分野・進学等)を考えていますか 3. あなたは卒業後の進路を現実化するためにどのような行動をとるべきだと考えていますか 4. あなたの1年次での目標は何ですか 5. 上記4で記した目標をどのように達成するつもりですか 6. あなたが本学学生として最低限守るべきと考えるルールやマナーは何ですか
--	---

22

2. 入学時自己診断シート

1. 目的

- ①入学時の考えを自身の記録として残しモチベーションの向上
- ②キャリア形成のはじめの一步
- ③チューターとのコミュニケーション
- ④入学時面接修学指導資料
- ⑤保護者会面接手元資料

2. 作成時期

- ①入学時オリエンテーションで作成を指示(紙媒体)
★面談時に持参
- ②ポートフォリオシステムへの入力を指示

23

3. 学期末活動報告書(全学年前後期)

(2017年度まで紙媒体、2018年度からeポートフォリオ)

報告書内容		従来の項目	新設した項目
1. 表中の項目について自己診断し、「評価」の欄に次の記号で示してください。 記号：○(よくできた)、△(できた)、△(あまりできなかった)、×(できなかった)			
	自己診断の項目	評価	
履修計画	将来の目標や計画・○○などを踏まえた履修計画を行った	▼	
	履修登録した科目は全て履修した	▼	
授業	授業内容を理解するために予習または復習を行った	▼	
	レポートなどの課題を提出した		
	授業中はノートをとった		
	授業には休まず出席した		
学習成果	実践・実習では成果を出した		
	授業の内容は理解できた		
	授業内容に興味を持ち、積極的に参加した		
課外活動	部活・サークルで活躍した		
	資格取得や課外学習を行った		
	インターンシップに参加した		
	友人・先輩・先生と交流した		

2. 新設した項目と評価基準について記入してください。

① 100文字程度

② 200文字程度

③ 300文字程度

④ 400文字程度

⑤ 500文字程度

⑥ 600文字程度

⑦ 700文字程度

⑧ 800文字程度

⑨ 900文字程度

⑩ 1000文字程度

24

3. 学期末活動報告書

1. 目的
 - ①振り返りと次学期の行動計画による主体的学びの意識化
 - ②修学指導、保護者会談手元資料
2. 作成時期：前学期末、後学期末
3. 個人面談実施日（次学期）にプリントアウトしてチューターに提出
チューターは本報告書をもとに面談し、「学生面談カルテ」に内容を入力
4. 入力項目
 - ①履修計画、授業、学修成果、課外活動に関する自己評価
★（◎○△×の4段階評価）
 - ②前学期の目標と到達度評価（各100文字）
 - ③前学期の修学・生活状況の反省と改善点（200文字）
 - ④前学期において、希望進路とその実現に向けて実際にとった行動・成果・展望（自学自習、資格挑戦・取得、インターンシップ、研究室選択）など（200文字）
 - ⑤前学期の大学生活において、自分自身で最も成長したと思うことの具体的な事例とその理由（200文字）
 - ⑥今学期の目標とそれを達成するための行動予定（200文字）

25

4. 科目の学修到達度レポート（開講全科目）

（2017年度試行版：紙媒体、2018年度からeポートフォリオ）

- ①シラバスの「学生の到達度」についての自己評価（ラジオボタンでの選択）
- ②その理由を200～250文字で記述
 - 1) 学生の内省（不足する知識や能力の確認と今後の対応）、文章作成能力の訓練
 - 2) 教員のFD

例) SOJO基礎 I

1111111 崇城太郎

1. 「今週の活動とトップニュース」と「時事WS」の作成をとおして、自己管理能力と社会への関心度とを高めることができる。

(1) 到達度 ◎できる ○おおよそできる △あまりできない ×できない

(2) その理由を200～250文字で記しなさい。

2. 学科HPと研究室の調査をとおして、自己の目標を定め、キャリアデザインの基礎を構築することができる。

.....
教員からのコメント
.....

以下、授業アンケートに自動接続

26

4. 科目の学修到達度レポート

1. 目的 学生	
-------------	--

①内省による主体的学び促進へのしかけのひとつ

- ★JABEE共通基準2. 2「主体的な学習を促す取り組み」
②文章表現力育成の継続的トレーニング
★学期あたり約10科目、基礎的汎用的能力)

教員
①FDの素材

- ★授業アンケートとは異なる観点、学生個々への視点
★JABEE共通基準4「教育改善」

2. 対象科目: 授業アンケートと連動のため開講全科目

3. 入力項目
①到達度: できる おおよそできる あまりできない できない

- ②その理由を200～250文字で記す

5.「今週の活動とトップニュース」

① 新聞ポートフォリオ (2016、17年度紙媒体試行)

学科: 情報資料 番号: 氏名:

月/日	曜日	見出し、新聞名、ページ(面)	記事の内容・要旨
5/19	木	毎日新聞「AIの〇〇」のページへ 「AIの〇〇」のページへ	「AIの〇〇」のページへ 「AIの〇〇」のページへ

①新聞

5/19 木 朝日新聞(朝刊) 東京都 4 版(社会) 36 面
 ②新聞＋行動

5/26 金 5/29 金 週刊新聞: PCウイルス対策と金魚飼育 今週の行動記録

5/24	火	朝日新聞:「94.9-100号型黒鉄如八 3号4輪の発見」	2	東京新聞、N77(近藤)	4	東京新聞、N77(近藤)	5	東京新聞、N77(近藤)	6	東京新聞、N77(近藤)	7	東京新聞、N77(近藤)	8	東京新聞、N77(近藤)	9	東京新聞、N77(近藤)	10	東京新聞、N77(近藤)	11	東京新聞、N77(近藤)	12	東京新聞、N77(近藤)	13	東京新聞、N77(近藤)	14	東京新聞、N77(近藤)	15	東京新聞、N77(近藤)	16	東京新聞、N77(近藤)	17	東京新聞、N77(近藤)	18	東京新聞、N77(近藤)	19	東京新聞、N77(近藤)	20	東京新聞、N77(近藤)	21	東京新聞、N77(近藤)	22	東京新聞、N77(近藤)	23	東京新聞、N77(近藤)	24	東京新聞、N77(近藤)	25	東京新聞、N77(近藤)	26	東京新聞、N77(近藤)	27	東京新聞、N77(近藤)	28	東京新聞、N77(近藤)	29	東京新聞、N77(近藤)	30	東京新聞、N77(近藤)	31	東京新聞、N77(近藤)	32	東京新聞、N77(近藤)	33	東京新聞、N77(近藤)	34	東京新聞、N77(近藤)	35	東京新聞、N77(近藤)	36	東京新聞、N77(近藤)	37	東京新聞、N77(近藤)	38	東京新聞、N77(近藤)	39	東京新聞、N77(近藤)	40	東京新聞、N77(近藤)	41	東京新聞、N77(近藤)	42	東京新聞、N77(近藤)	43	東京新聞、N77(近藤)	44	東京新聞、N77(近藤)	45	東京新聞、N77(近藤)	46	東京新聞、N77(近藤)	47	東京新聞、N77(近藤)	48	東京新聞、N77(近藤)	49	東京新聞、N77(近藤)	50	東京新聞、N77(近藤)	51	東京新聞、N77(近藤)	52	東京新聞、N77(近藤)	53	東京新聞、N77(近藤)	54	東京新聞、N77(近藤)	55	東京新聞、N77(近藤)	56	東京新聞、N77(近藤)	57	東京新聞、N77(近藤)	58	東京新聞、N77(近藤)	59	東京新聞、N77(近藤)	60	東京新聞、N77(近藤)	61	東京新聞、N77(近藤)	62	東京新聞、N77(近藤)	63	東京新聞、N77(近藤)	64	東京新聞、N77(近藤)	65	東京新聞、N77(近藤)	66	東京新聞、N77(近藤)	67	東京新聞、N77(近藤)	68	東京新聞、N77(近藤)	69	東京新聞、N77(近藤)	70	東京新聞、N77(近藤)	71	東京新聞、N77(近藤)	72	東京新聞、N77(近藤)	73	東京新聞、N77(近藤)	74	東京新聞、N77(近藤)	75	東京新聞、N77(近藤)	76	東京新聞、N77(近藤)	77	東京新聞、N77(近藤)	78	東京新聞、N77(近藤)	79	東京新聞、N77(近藤)	80	東京新聞、N77(近藤)	81	東京新聞、N77(近藤)	82	東京新聞、N77(近藤)	83	東京新聞、N77(近藤)	84	東京新聞、N77(近藤)	85	東京新聞、N77(近藤)	86	東京新聞、N77(近藤)	87	東京新聞、N77(近藤)	88	東京新聞、N77(近藤)	89	東京新聞、N77(近藤)	90	東京新聞、N77(近藤)	91	東京新聞、N77(近藤)	92	東京新聞、N77(近藤)	93	東京新聞、N77(近藤)	94	東京新聞、N77(近藤)	95	東京新聞、N77(近藤)	96	東京新聞、N77(近藤)	97	東京新聞、N77(近藤)	98	東京新聞、N77(近藤)	99	東京新聞、N77(近藤)	100	東京新聞、N77(近藤)
------	---	----------------------------------	---	--------------	---	--------------	---	--------------	---	--------------	---	--------------	---	--------------	---	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------	-----	--------------

5/24	火	朝8時開演: 国生先生の「70年代の音楽」について A: 久三先生、N: 久保先生	Androidアプリ開発: 探検の兵器達 (Eclipseでアンインストールも、PC?)-7-27?を先行しAD?の再参入
5/25	水	朝8時開演: 国生先生の「70年代の音楽」について A: 久三先生、N: 久保先生	今週のトピック: ニュースの発表と経緯
5/26	木	朝8時開演: 国生先生の「70年代の音楽」について A: 久三先生、N: 久保先生	本学マサチューセッツ工科大学の学生さん(4月25日、朝8時開演 7-27?)

上記記事の内、とくに印象に残ったものについて、5月
と上記記事の同時期に印象に残ったものについて、5月

[illegible]

6/28 (金)	「アノチン」の上映 「アノチン」の上映	「アノチン」の上映 「アノチン」の上映	・Androidで動く電卓アプリ(6h) ・Javaで遊ぶ(2h)	08h
6/29 (土)	「アノチン」の上映 「アノチン」の上映	「アノチン」の上映 「アノチン」の上映	・Androidで動く電卓アプリ(6h) ・Javaで遊ぶ(2h)	08h

6/25 (土)	・英語 英会話 (100分) ・英語 英会話 (100分)	○	0h
6/26 (日)	・英語 英会話 (100分) ・英語 英会話 (100分)	○	4h
6/27 (月)	・英語 英会話 (100分) ・英語 英会話 (100分)	○	0h

[illegible]

このようにして、今度は境界断面を4角断面に、背のことも2倍に伸ばした。12m 実物

5. 「今週の活動とトップニュース」

(2018年度からeポートフォリオ)

① 月/日 /曜日	② 今日のニュース 見出し/新聞名	③ 自学自習(予習・復習・宿題・GW資格)の内容 各時間数/合計時間数	④ 課外活動内容(チーム学習、クラブ・サークル、習い事、ボランティア、アルバイト等)/時間数	⑤ 朝食	⑥ 昼食	⑦ 夕食	⑧ 睡眠時間
4/16/日	〇〇産業新商品開発/〇〇新聞 Web	英語(宿題) 1.0、ポートフォリオ 0.5	アルバイト 5.0	5.0 h	○	○	8h
4/17/月	日本製スーパーコンピュータが世界一に輝く /▲▲新聞	教員採用試験 2.0	▲▲部の活動 3.0	3.0 h	○	○	8h
4/18/火	生活保護費削減の方針へ：不安を募らせる受給者たち/日本〇〇新聞 Web	0 h	▲▲部の活動 3.0	3.0 h	○	○	10h
4/19/水		数学(復習) 1.0、英語(予習) 1.5	▲▲部の活動 3.0	3.0 h	○	○	8h
4/20/木	県産自動車、●●自動車を買収	0 h	▲▲部の活動 3.0	3.0 h	○	○	6h
4/21/金		0 h	▲▲部の活動 3.0	3.0 h	○	○	6h
4/22/土		0 h	アルバイト 5.0	5.0 h	○	○	10h
		合計	6.0 h	22 h	○	○	66h

③ 今週のトップニュースの見出し/概要 生活保護費削減の方針へ：不安を募らせる受給者たち
/国家予算の悪化から生活保護費の削減が検討されることになったが、受給者の不満が強く、国会での賛否は

④ トップニュースの批評 (200文字程度感想不可)
改めて日本にも生活保護を受けて暮らしている人たちがたくさんいるのだと思った。社会的に弱者と言われる人たちの保護はどうあるべきなのだろうか。累進課税制度などとともに、社会的・経済的不平等を是正するあり方について改めて検討すべきである。

⑤ 今週の達成度評価、成果(頑張った・良かったこと)、出席状況、反省(学習・生活)、次週の課題等について (200文字程度)
〇〇資格の対策がまったくとれなかった。その理由は、.....であることがわかっていて、今後は.....を行い、計画を進めていきたい。また数学の試験に備えてかなりの問題を解いたが、結果はあまりよくなかった。今後は学習センターに通い弱点を克服したい。今週の学習時間が6時間だったことは少ないと感じている。毎日、新聞を読むことができ、このシートを完成できなかったことは大いに反省したい。.....

⑥ 教員コメント

プルダウンの定型文あり

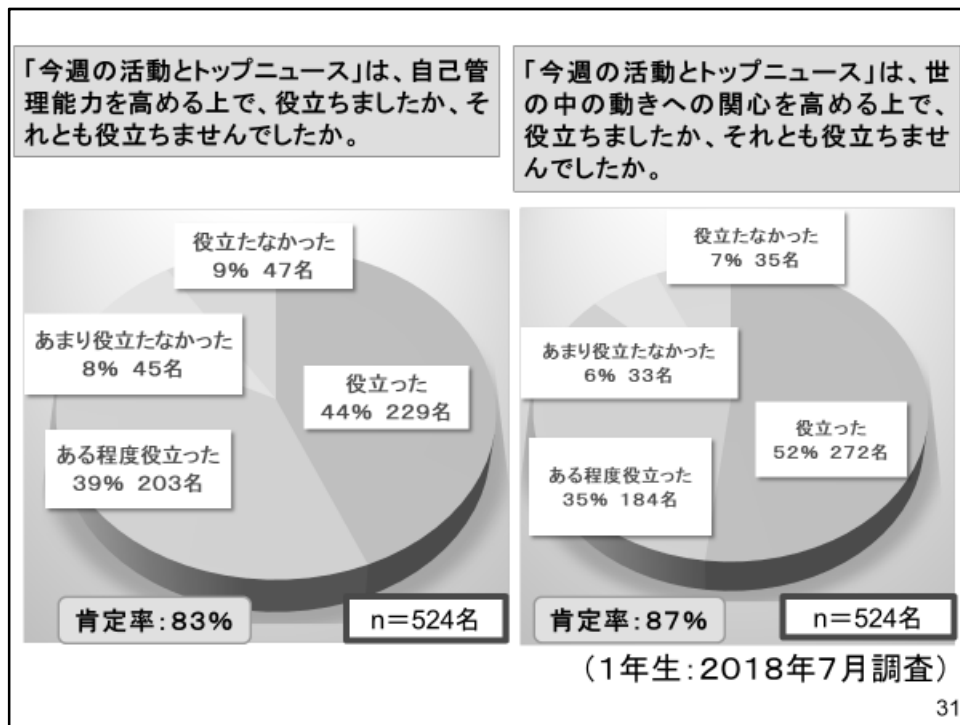
文字数の自動集計

29

5. 「今週の活動とトップニュース」

- 目的
 - ①初年次教育とキャリア教育とを一体化したプログラムのツールで、エビデンスにもとづく自己評価と相互評価による振り返りの誘発
 - ②自己管理、社会とキャリアへの関心、学修意欲と自学自習の促進
 - ③批評能力、文章作成能力の向上 ★ライティングの「はじめの一歩」
- 担当:総合教育センター教員、キャリア系教員
- 対象科目:「キャリア基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(1～3年必) ★31年度「SOJO基礎Ⅰ・Ⅱ」(1年必)
- 入力項目(プリントアウトして、毎週、授業開始時に提出)
 - ①今週の目標(達成可能な直近の学修目標)
 - ②毎日の新聞で興味を抱いた記事の見出し(記事の内ひとつは学科領域に関連するもの)
 - ③前項②の中で特に興味を持った記事の見出しと概要100～150文字)
 - ④前項③の批評200～250文字(感想不可)
 - ⑤毎日の自学自習内容(授業以外:予習、復習、宿題、チーム学習、資格、教養読書など)とその所要時間数
 - ⑥課外活動の内容(プロジェクト、クラブ、サークル、習い事、ボランティア、アルバイトなど)とその所要時間数
 - ⑦朝食・夕食の摂取の有無
 - ⑧睡眠時間数
 - ⑨今週の目標の達成度200～250文字(成果、出席状況、反省、次週の計画、質問など)
- 科目担当教員はフィードバックコメントを入力(毎週)

30



31

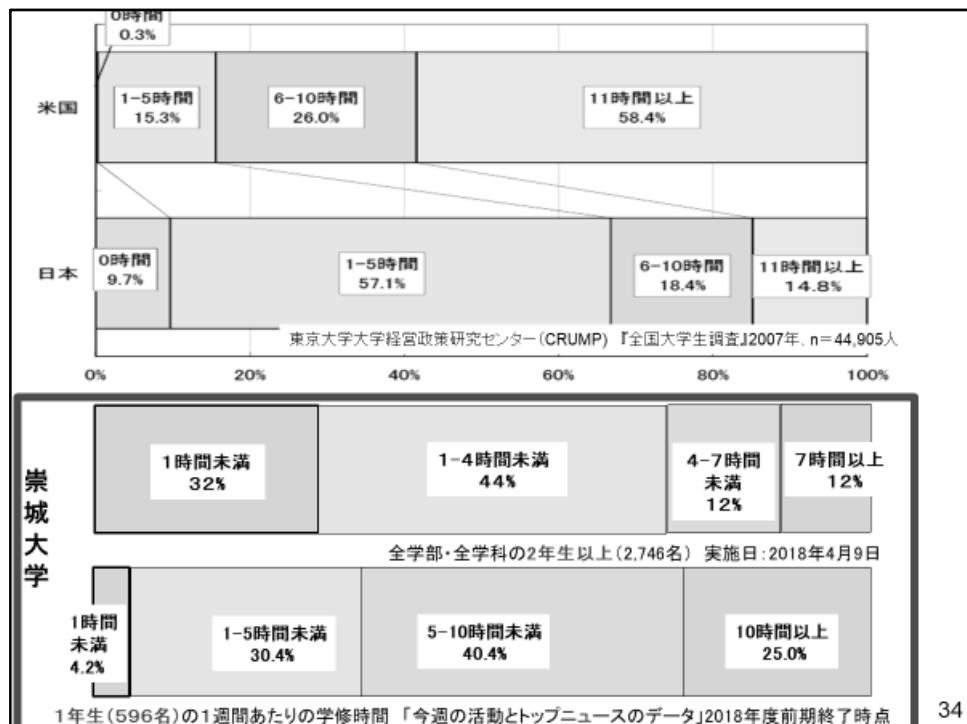
「SOJO基礎Ⅰ」の概要

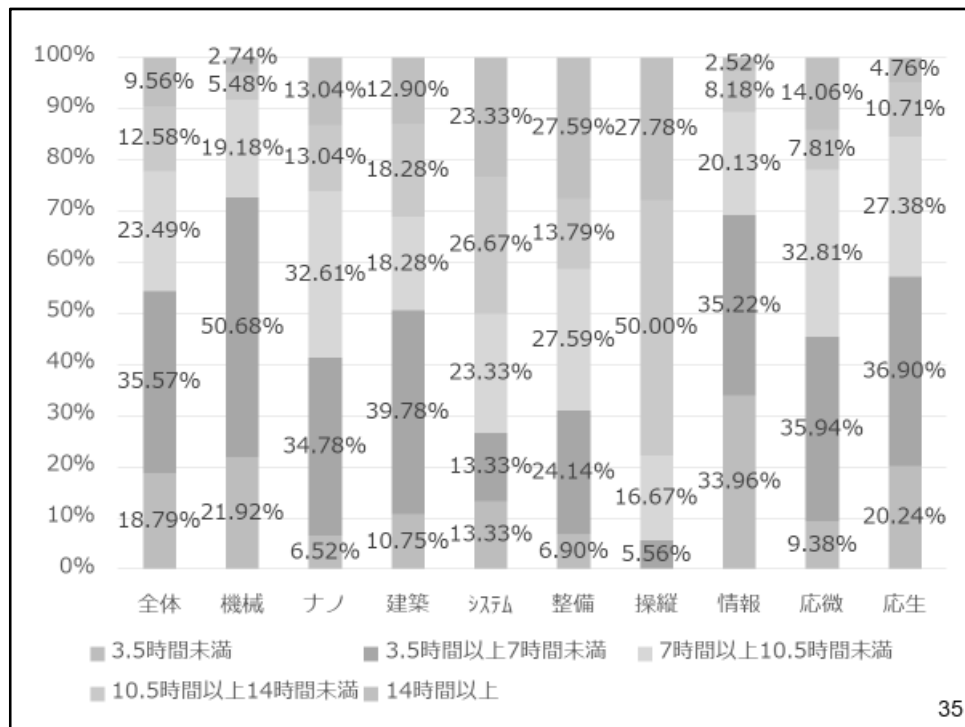
青文字:チーム活動 朱文字:個人作業

回	授業	課題・宿題
1	オリエンテーション:「生徒」と「学生」の違い	時事WS①
2	キャリアデザインとは何か	時事WS②、今週の活動とトップニュース①
3	チーム討議の基礎	時事WS③、今週の活動とトップニュース②
4	プレゼンテーションA準備 「所属学科HPの探求」	時事WS④、今週の活動とトップニュース③、プレA準備
5	・他大学学科HPの調査	時事WS⑤、今週の活動とトップニュース④、プレA準備
6	プレゼンテーションA発表会、7分	今週の活動とトップニュース⑤
7		今週の活動とトップニュース⑥、プレB準備
8	プレゼンテーションB準備 「所属学科研究室調査」	今週の活動とトップニュース⑦、プレB準備
9	・他大学研究室の調査	今週の活動とトップニュース⑧、プレB準備
10		今週の活動とトップニュース⑨、プレB準備
11	プレゼンテーションB発表会、15分	今週の活動とトップニュース⑩、プレB準備、活動報告書
12		今週の活動とトップニュース⑪、活動報告書、貢献度
13	プレゼンテーションB活動報告書作成	今週の活動とトップニュース⑫、活動報告書、貢献度
14	文章作成の基礎:レポート作成 ①〇〇学科学生としてのありかた、②〇〇学科関係業界をめぐる諸問題とその解決法の提案、③最近の時事問題に対する解決法の提案	今週の活動とトップニュース⑬、到達度レポート
15	④崇城大学への提案 まとめ	夏期課題:レポート作成、時事WS、学期末活動報告書

32

「SOJO基礎 I」の評価基準									
評価方法 (配点)	中間 試験	定期 試験	小テスト	レポート	成果発表 (口頭・実技)	作品	ポート フォリオ	その他	合計
	0	0	0	15	20	3	52	10	100
評価 明細 基準	1. レポート:「プレゼンテーションA・Bをととした私のチームへの貢献度」A4用紙1枚、1行40文字、1頁40行、MS明朝、余白各25mm、項目:①反省点②貢献内容、各項目300文字以上 15点 2. 成果発表(プレゼンテーションA) チーム発表:7分間(内容、独自性、投影画面、参考資料等) 5点 3. 成果発表(プレゼンテーションB) ①チーム発表:15分間(内容、独自性、投影画面、参考資料等) 10点 ②チーム活動報告書:チームで1部提出(PowerPoint資料、報告分析) 5点 4. 作品:授業資料(テキスト、時事ワークシート、調査資料等、詳細は別途指示)を紙バインダーに整理 3点 5. ポートフォリオ:入学オリエンテーション時に紙媒体で作成した「入学時自己診断シート」を5回目の授業時間までに「SOJOポートフォリオシステム」に入力しておくこと。3点 6. ポートフォリオ:「今週の活動とトップニュース」を「SOJOポートフォリオシステム」に入力。5回目の授業までは紙媒体に記述し提出してもよいが必ず入力すること。入力がない場合は得点化しない。3点×13週分=39点 7. ポートフォリオ:学生の到達度目標①～⑤の「到達度評価レポート」を「SOJOポートフォリオシステム」に入力し、プリントアウトして、15回目の授業時間に提出すること。10点 8. その他:時事ワークシート 2点×5回=10点								
すべて 課題									
	33								





35

SOJOポートフォリオに期待される効果と活用拡大の可能性

期待される効果

1. 修学・生活の自己管理と分析(自立と自律への第一歩)
2. 自己評価の文章化による自己表現(基礎的汎用的能力、就職エントリーシートへの接続)
3. 目標、行動設定、行動、内省のサイクル(主体的学修、キャリアデザイン)
4. 教職員による迅速な修学・生活・進路指導(めんどうみのいい大学)
5. 保護者会個別懇談手元資料(保護者への説明責任)
6. IR(将来、他のデータを含めたビックデータを解析するための準備)

活用拡大の可能性(学修のエビデンス)

1. 作品集(芸術、建築等)
2. 実習ノート(教職、薬学等)
3. 実験ノート
4. 卒業・修士研究活動記録(日報・週報・月報等)
5. 研修記録(留学、海外研修、インターンシップ等)
6. 大学学修・活動集成(プロジェクト活動記録、就職面接資料等)
7. 学修支援カルテ(学修支援センター、学修相談等)

将来は教職員の
ティーチング&スタッフ
ポートフォリオ

目標、教育研究、
業務活動成果報告等

36

なぜポートフォリオなのか ～より大きな視点から～

37

教育の質保証と学生に対する教育責任

大学の卒業時点での学力を認定する卒業程度認定試験を導入するなど出口管理が必要

H19. 3. 21 陸空新聞

成績評価の厳格化、教育の質保証

20. 3. 26 日刊工業新聞

学士 厳格に成績評価

中教審 改革方向まとまる

文部科学省・中央教育審議会・分科会部会の報告書に、十三課程教育の構築に「学習者の個性と能力を最大限に引き出すこと」が第一とされている。また、この報告書に「学習者の個性と能力を最大限に引き出すこと」が第一とされている。また、この報告書に「学習者の個性と能力を最大限に引き出すこと」が第一とされている。

る姿勢を初めて明示。91年の「大学設置基準の大綱化」の答申以降、教育課程が多様化し、質が問われるようになった。

この報告書は中央教育審議会の大学分科会に対し、その下の制度・教育部会から25日に提出された。大学進学率50%超と伸びを積極的に受け止め

の教育による連名の地位、学力不問が問題になっている推薦・AO（アドミッシヨソオフィス）入試見直し、高校での修に配慮した初年時教育などを挙げている。

大学卒業に認定試験検討

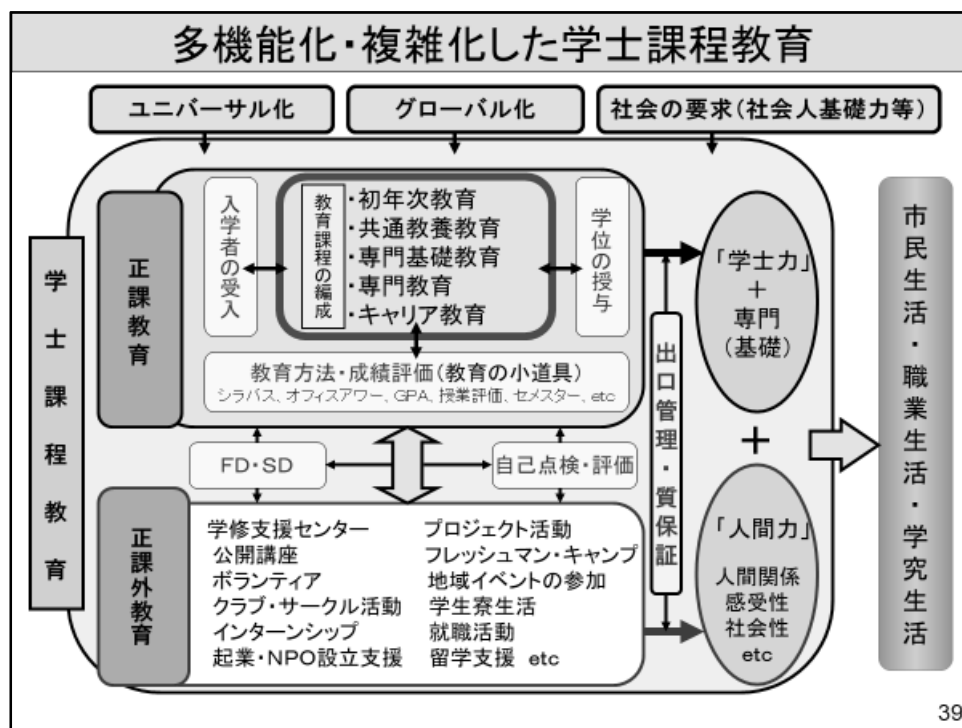
教育部教育の質維持
教育再生会議

達目標の設定は成績評価の厳格化③語学や文筆作 業教育の充実——なども述べた。

野の難保を確保するため、卒業時の選定試験の導入を急務とする。そこで一致して、分野別に試験を実施し、試験の結果に基づいて卒業生選定する仕組みを想定している。この事業は次期報告書で公表されることとなる。

また、学部教育の3原則

10



「教える教育」から「能力を引き出す教育へ」

多様な学生の入学を許可する大学においては、ポートフォリオの活用を継続的に実施することで、学年移行におけるモチベーション・学修姿勢の向上を段階的に図り、学生個々の学修進捗状況を把握して、大学全体の教育を「教える教育」から「能力を引き出す教育」へ転換すべきである。

大学が掲げる教育目標を達成した学生を実社会に送り出しているかどうか、つまり学士課程教育の質保証の観点からも、ポートフォリオは重要な証拠資料のひとつとなるはずである。

組織レベル、個人レベルにおいて、この点を真剣に考え実行すべきときが「いま」であって、「将来」ではない。

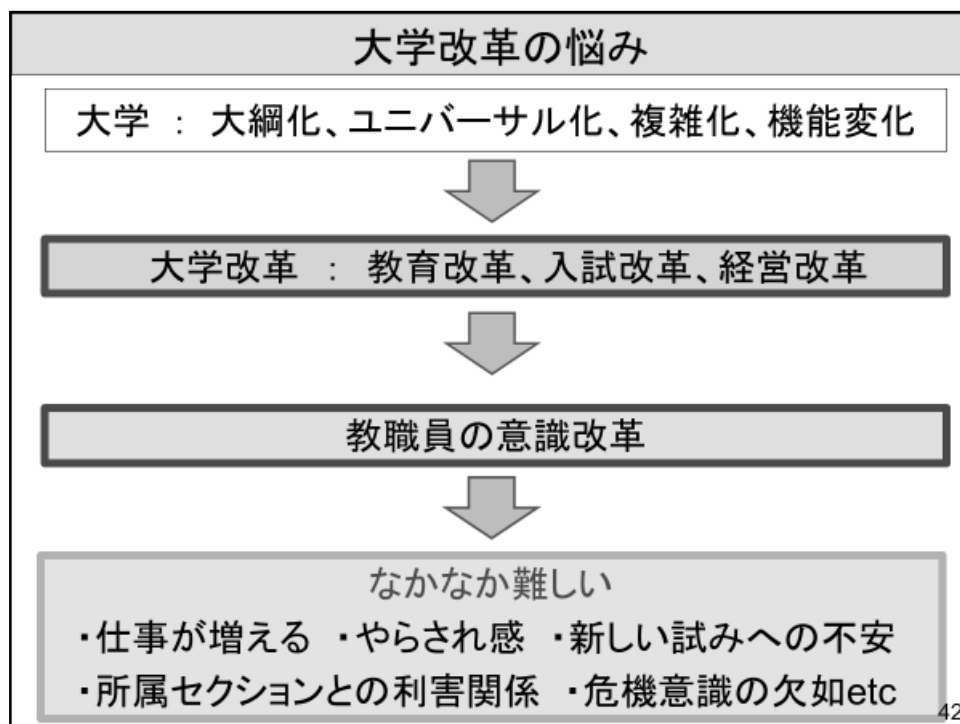


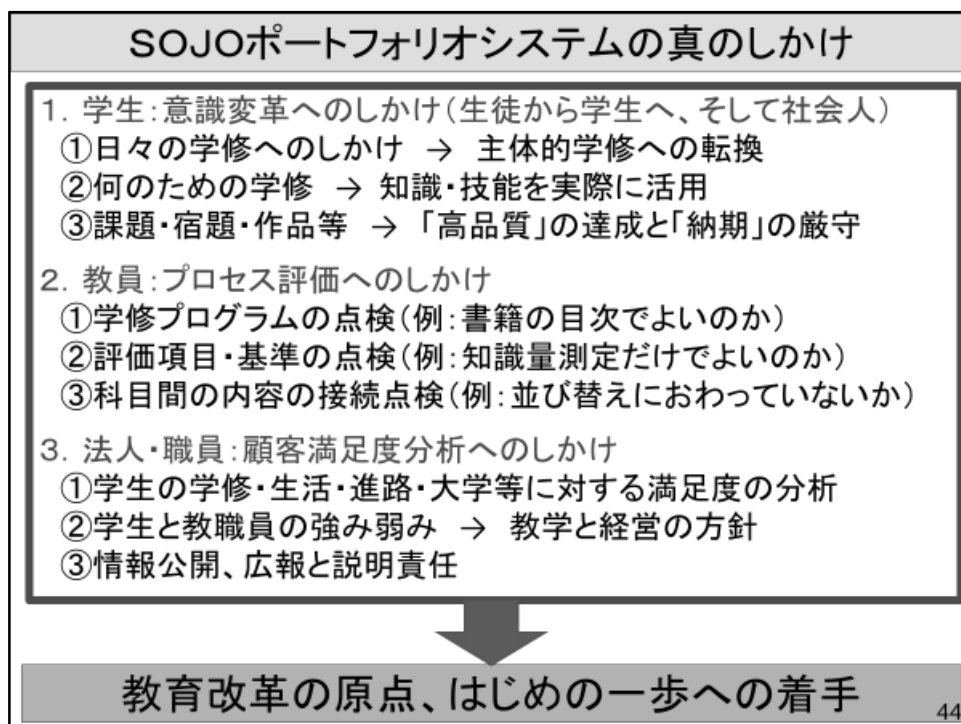
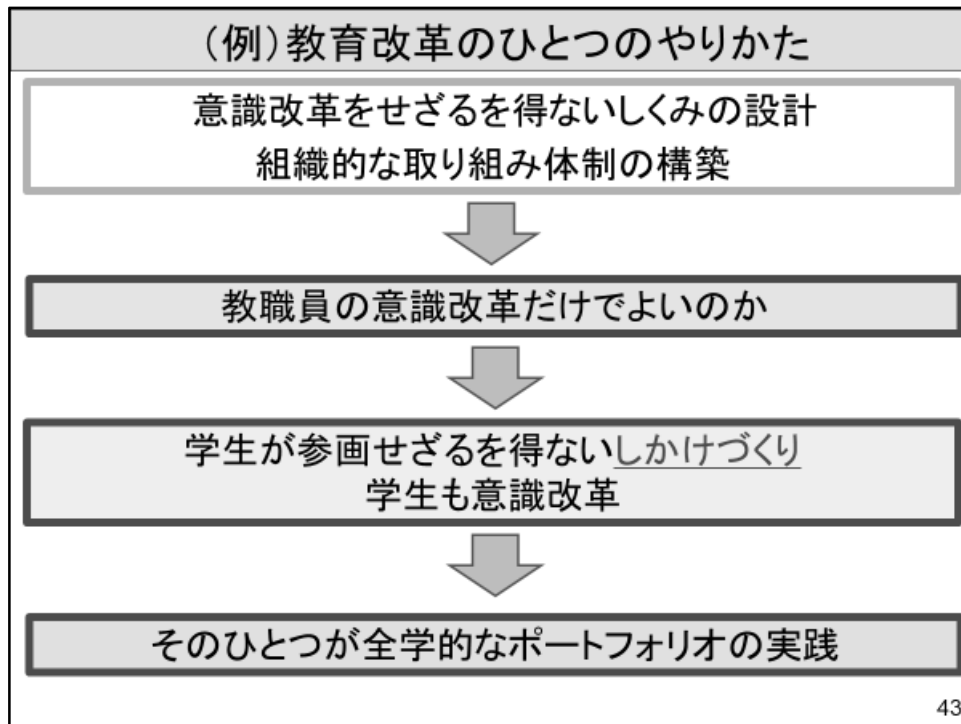
教える教育→学修させる教育→主体的に学修する教育へ

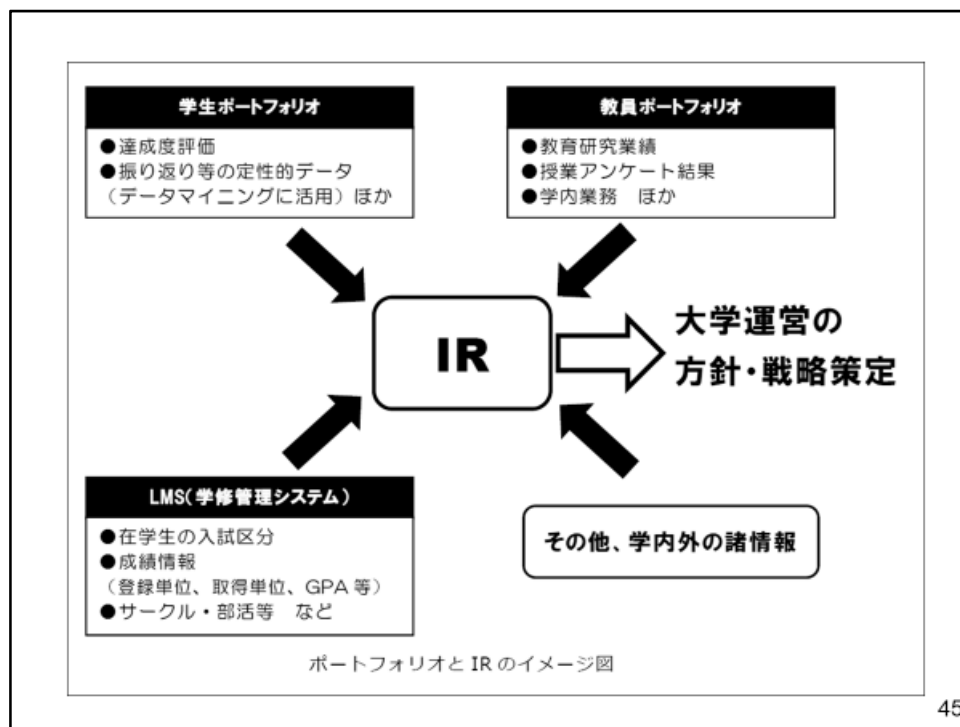
「生徒」から「学生」へ そして「社会人」へ

eポートフォリオに携わった16年間の結論	
1. システムの導入だけでは何も始まらない ・できる部分からスタート(欲張らない) ・学生との協働作業であることの認識 ・学生の意識を変えるという強い意志	フィードバック
2. 組織的運用は1クール4年間の継続	
3. 組織的運用が個人的運用へ拡大	
4. 初年次から2年次→3年次→4年次への連続性 ・カリキュラム上の位置づけ	
ポートフォリオ作成が目的ではない ポートフォリオはあくまでも学生支援ツール PDCAサイクルの自然形成	

41



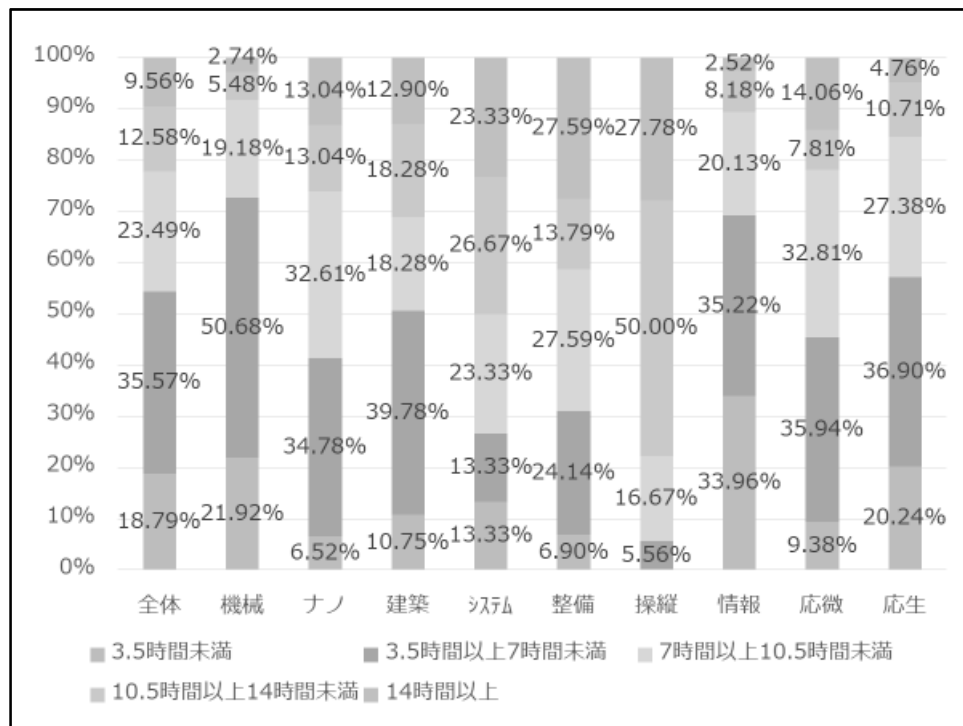




すべては学生のために

ご清聴ありがとうございました
mfujimoto@ed.sojo-u.ac.jp





シンポジウム

テーマ

「北海道における可視化の展開」

シンポジスト

帯広畜産大学	講師	齊藤 準
札幌学院大学	教授	石川 千温
苫小牧工業高等専門学校	教授	村本 充
北海道大学	教授	細川 敏幸

3. シンポジウム

北海道における可視化の展開

司会:北海道大学 教授 細川 敏幸

細川: 時間になりましたので、これからシンポジウムを始めさせていただきます。前半のご講演は道外のお2人の先生をお招きしてお話をいただきました。シンポジウムでは、道内から私を含めまして4人の先生方をお願いしております。

まず、進行の方法について説明いたします。本日は私を含めまして4名のシンポジストの方々においていただいておりますので、それぞれおよそ20分程度のお話をお願いしております。全員のお話が終了したところで休憩時間を取りますので、その間にお手元にお配りしております質問用紙にご記入いただきまして、会場の後方に回収箱を用意しておりますので、そこに入れていただきますよう、お願いいたします。4人が前に集まりまして、それらの質問用紙にお答えしたいと考えております。それではまず始めに、帯広畜産大学人間関係研究部門講師の斉藤準先生をお願いしたいと思います。テーマは、「アセスメント・ポリシーの導入」です。では、よろしくお願いいたします。

3.1 アセスメント・ポリシーの導入

帯広畜産大学 講師 斉藤 準

斉藤: 皆様、こんにちは。帯広畜産大学からまいりました斉藤準と申します。本日は帯広畜産大学で導入しておりますアセスメント・ポリシーについてご紹介したいと思います。本来でしたら、アセスメント・ポリシーの導入・運用の責任者、あるいはIRの担当者がまいってお話しすべきところですが、私も一部運用や計画、設計段階でかかわっておりますので、今日は私からご紹介させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは簡単ですが、そもそもアセスメント・ポリシーとはどういったものなのかということを確認させていただきます。つづいて、帯広畜産大学の実際の様子をご紹介してまいりたいと思います。お手元の資料と基本的には同じスライドで進めてまいります。参考文献は一応このページにございますので、後ほどご覧いただければと思います。

全体像

始めに、アセスメント・ポリシーの話をするに当たりまして、まずはいわゆる3つのポリシーといわれるDP, CP, APについて簡単に確認させていただきます。まずはディプロマポリシー、DP、卒業認定、学位授与の方針です。こういう学生であれば学位を授与します、という大学の教育の目標を定めたものということです。

そして、その目標を達成するためにどういう教育を行って、どういうふうな方法でやっていくのかという方法を定めたのがカリキュラムポリシー、教育課程編成、実施の方針ということになります。

さらに、大学ですから、誰でも無条件に入学できるというわけではありませんので、アドミッションポリシーとして学生に準備しておいてほしいことを定めて、DP, CP に沿う教育をすんなり受けられるようにきちんと明確化する。以上が3つのポリシーです。

アセスメント・ポリシーは、この3つのポリシーをきちんと評価、検証する、あるいはどういうふうに関係、検証するかということを確認したものと理解することができます。すなわち、DP, CP, AP、3つのポリシーに沿って教育活動がきちんと行われているのかどうか。あるいは、その教育活動に応じる形できちんと学生の学修が行われているのか。もちろんその結果として、成果がきちんと上がっているのか。このようなことを大学の側が能動的に関係、検証していくための方針であると言えます。

あくまでもこのアセスメント・ポリシーで評価したいのは学位プログラムの方、つまり大学の教育内容を評価したいということであって、学生を評価するのが目的ではないということが1つポイントになるかと思います。それから、実際にアセスメント・ポリシーに従って評価を行っていくときには、多くの場合はいろいろなデータ、いろいろな指標が出てきますので、必然的に学内のIRと連携することになることが多くなります。あるいは、大学間で比較などをするときには学外のIRという形で連携することも多くなると思います。いろいろな指標、多面的な指標で学内だけではなく総合的に評価するということも重要になってくるということです。

右側の図は、大ざっぱにDP, CP, AP、それからアセスメント・ポリシーを位置付けたものです。DP, CP,

AP の間はそれぞれ図のような関係があります。もちろん教育ですので必ず学生がいて、実際に学修を行っていくのは学生であるということになります。

目的としては、DP がきちんと機能しているのかどうか、その通りに教育が行われているのかどうかということとを調べたいわけですが、DP だけを見ていても、それがいいのか悪いのかというのは調べようがありませんので、実際にデータを取って調べる対象は学生になります。ただし、先ほどの繰り返しになりますけれども、だからといって、学生そのものを評価して、成果が上がっているからこの学生はいいですねとか、上がっていないからもっと頑張りましょうという評価をしたいのではなくて、成果が上がっているのであれば、確かに DP, CP, AP がきちんと回っているということになりますし、もし成果が上がっていないのであれば、もったいなく DP, CP, AP に沿って教育をやっていかなければいけない。そういう大学側の評価であるというところを重視していきたいと思っています。

学修の評価ということが重視されてきた背景として、1 つ大きいのは、教える側を主体とする、古いティーチングのパラダイムから、学修あるいは学生を中心とした新しいパラダイムに全体として教育が変わってきたということがあると思います。こちらはご参考までに後ほどご覧いただければと思います。質保証等を含めて評価が重要になってきたという背景です。

アセスメント・ポリシーが国内の教育政策としてどういうふうに出てきたのかという経緯をまとめたのがこのページです。こちらでも後ほどご参考までにご覧いただければと思います。

帯広畜産大学の取り組み

それでは、実際に帯広畜産大学でどのようにアセスメント・ポリシーをつくって、現状はどうかということをご紹介していきたいと思っています。アセスメント・ポリシー自体は本学のウェブサイトの方にすべて公開になっております。

本学のディプロマポリシーを簡単に確認したいと思いますが、まず前文で、帯広畜産大学では教育課程で定められた授業科目を履修して、所定の卒業要件単位数を習得し、以下の知識や能力を身に付けた学生に学士の学位を授与します、として、この「以下の知識や能力」という部分を具体的に 3 項目挙げています。

1 つ目は、帯広畜産大学は獣医と畜産の大きく 2 つで構成されていますので、その獣医・農畜産融合の視点。具体的には、食料の生産の現場から消費に至る一貫した過程にかかわる課題解決に、主体的に取り組んでいく態度。これをしっかり身に付けさせたいというのが 1 つ目です。

2 つ目は、国際性に関する見識、あるいは基礎的コミュニケーション能力を身に付けさせたい、となっています。そして、獣医あるいは農畜産の専門知識や技能と、それらの分野における課題解決の能力をしっかりと育成したいというのが 3 つ目になっています。

前文にありますように、基本的には知識、能力を身に付けさせたいというのが大枠です。いわゆるコンピテンシーやリテラシーと、それらに加えて専門知識、専門技能、技術、こういったものをきちんと身に付けられれば学位が授与されるということを述べているわけです。

具体的にその目標を達成するためにどういう教育をどのような方法で行うのかを述べているのがカリキュラムポリシーですが、こちらは全部で 8 項目あります。DP を達成するための基礎的、汎用的、専門的な科

目を順に展開していくということがここでまとめられています。こちらをご参考までに後でご覧いただければと思います。

そして、そのカリキュラムポリシーに沿う授業を行うわけですが、それをきちんと受けられるように入学の段階で準備してほしいということをアドミッションポリシーとしてまとめております。こちらは全部で5項目ありまして、DP、CPのねらいにかなう学生を受け入れたいということを述べているわけです。

DPは全部で3項目、CPは全部で8項目ありましたが、それらの対応表もホームページで公開しております。例えばDP1の能力を身に付けさせるためには、カリキュラムポリシーの1, 2, 3, 4, そして8に配慮した授業や教育を展開、提供していくと見ることができます。同じようにDP2であれば、3とか6とか7の科目を提供していくという見方ができます。

ちなみに左側のAPとCPの対応は公表されておられません。今回のスライド用に私の方で対応を書いたものです。例えばカリキュラムポリシーの3番の方針に沿って学修を進めるためには、入学までにAP3とか4とか5の項目をきちんと身に付けておいてほしいというふうな見方をすることができます。

理想的にはこれでよいわけで、実際に合格して入学した学生というのはきっとみんなAP1から5まで準備できているでしょうし、そしてDP1, 2, 3に沿った授業がきちんとカリキュラムポリシー1から8に沿って提供されているはずですし、それで単位を取っていけば自動的にDPが達成されることになっているはずで

す。

では、本当にそんなにうまく機能しているかどうかということをごきちんと検証したい。どうやって検証するか定めたものがアセスメント・ポリシーということになります。アセスメント・ポリシーは本学の第3期中期目標の中で掲げられておりまして、具体的には中期計画の方にアセスメント・ポリシーを明確化すると書かれています。平成28年度に明確化すると書かれていまして、それと関連する項目として平成29年度に学修ポートフォリオを導入する、あるいはカリキュラムマップを充実する。同じく平成29年度に学修到達度調査を実施する。成績評価のルーブリックを活用していく、となっています。平成28年度、29年度ということですので、これらはすでにその通り実施されていることになっています。

あるいは平成30年度には新しい入試を導入して、合わせてアドミッションポリシーが機能しているかどうかを評価していくということも中期計画に入っております。これらのことは本学の大学教育センターの所掌になりまして、特にその中の教育支援室が中心になって担当しております。私もこの教育支援室のメンバーになっております。

さて、平成28年度に、年度末でしたけれども、アセスメント・ポリシーができまして、実際にそれを使っていこうという話になったわけです。けれども、単にそれだけでは、なかなか学内の周知ができないということで、FD、SDを実施しまして、アセスメント・ポリシーというのはどういうものなのか、どういうメリットがあるのか、ということをご教職員の中で共有してきました。

平成29年度にはアセスメント・ポリシーや3ポリシーの第一人者であります、関西国際大学学長の濱名先生にお越しいただきまして、総論的なお話をいただきました。同じ年度に今度は各論として、もう少し具体的なアセスメント・ポリシーの運用についてのFD、SDもやっております。

それから平成31年度にはアセスメント・ポリシーの項目の1つであります、ポートフォリオについて理解を深めたいということで、今日もお見えになっていますが、北大の今井先生にお越しいただいて、ポートフ

ォリオについて理解を深めるということを FD, SD でやっております。

実際にアセスメント・ポリシーを使ってきちんと評価、検証していくというのは平成 30 年度から施行すると公表しております。ポリシーを定めたのは平成 28 年度ですが、一部、その中で先行して始めたものもあれば、まだ始まっていないものもありますが、一応平成 30 年度から全体的に始まったとなっています。

本学のアセスメント・ポリシーですが、まずなぜそれをやるのかという目的、なぜ評価をするのかという目的が書かれています。これは教育成果や課題を可視化すること。そして、内部質保証の PDCA サイクルをきちんと確立していくこと。そのために PDCA の P の部分は DP, CP, AP としてまとめてありますが、C の部分をきちんと見るために必要であるということなどが掲げられております。

そして、主に評価したいのは DP の能力、資質がきちんと学生の方で習得されているのかというところですね。ここを見るために、多元的、多角的、多層的な、いろいろな観点と指標を組み合わせることで見ていくということがリストされています。

大きく分けると、評価の方法として、まずは直接的な学修の結果として出てくる数値的なアウトプットで見るのか、あるいはもう少し進んで実際にできるようになったことのアウトカムで見るのか、という分類ができます。

あるいは、その指標が定量的なのか定性的なのか。さらには、学生の学修のデータなのか、それとも大学側が提供している教育のデータなのかという分類もできるかと思います。さまざまな観点から評価を行っていくということです。

それらを通常の授業の単位認定のときに行うのか、学期や学年ごとの進級審査の段階で行うのか、あるいは最後の卒業段階で行うのか、という評価を行う時点。あるいはミクロのレベル、ミドルのレベル、マクロのレベルというさまざまなレベルも組み合わせることでやっていく。それによって、先ほどの江本先生や藤本先生のお話にもございましたが、単一の評価ではなくて、より幅広く精度を上げて見ていくことができると考えられます。

実際には、ここにあるようないろいろな項目がアセスメント・ポリシーの中に書いてありまして、こういうものを全部やっていきますというふうに述べているわけですが、それらを大ざっぱに分類したのがこの表です。いろいろなレベルがあって、どういう指標で見ているのか、非常に多元的な評価になっているということがご覧になれると思います。

本日は学修成果の可視化がテーマです。広い意味ではいろいろな評価を行ってデータが出てくればすべて可視化であるということもできると思いますが、ここでは、いわば狭い意味での可視化として、グラフなどで見やすい結果が出せるかどうかということに着目して、最後に学修到達度調査とポートフォリオについてを簡単に紹介させていただきたいと思います。

学修到達度調査

まず学修到達度調査ですが、これは学生の自己評価アンケートです。DP がきちんと達成されているかどうかのアンケートを、入学してから毎年各学年で行っています。実際には大学 IR コンソーシアムのアンケート項目をそのまま使っておりまして、それに加えて本学の独自項目ということで、DP1, 2, 3 が達成されているかどうかを自己評価で聞いています。

毎年度末に学内のポータルサイト上で、記名式、つまり誰がどの回答をしたのかが分かるようなやり方で実施しています。平成 28 年度に試行して、平成 29 年度から本格的に稼働しております。例としてその結果の 1 つですが、これは共同獣医学課程の学生に DP1 が達成されていると思いますかと聞いた結果を単純なグラフにしたものです。

少しご覧になりづらいかと思いますが、一番下が平成 28 年度の 2 年生の回答結果で、その 1 つ上が平成 29 年度の 3 年生の回答結果です。ということは、この学生が 1 年後この学生になっているということになります。非常に単純な結果ですが、赤いほうが達成されていると思うという答え、ピンクはどちらかといえば思うという答えです。一応、達成されているという人数が増えていることが分かります。1 年たつと学修が進みますので、最初よりはちょっと進んだという理解ができるかなと思います。

同じように 3 年生が次の年に 4 年生になったらどうなっているのか、4 年生が 5 年生になってどうか、というふうなことが見られるわけです。このデータではまずは最初の 2 年度分しかございませんが、やはり 1 年たつと 1 年前よりは上がっているということを見ることができるかと思います。以下、同様のデータが続きますので、割愛させていただきます。

学修ポートフォリオ

続きまして学修ポートフォリオですが、こちらポータルサイト上にあります。履修登録を行ったり、成績を見たりするシステムの中にポートフォリオという項目が 1 つ追加された形で運用しています。ただし、このポートフォリオシステムは非常に簡単なもので、先ほどの江本先生や藤本先生にご紹介いただいたような充実したものと比べますと、本当にポートフォリオと呼べるのかどうかというようなものです。

学生には、毎年学年が始まったときに目標を書いてもらい、学年末にその振り返りを書いてもらいます。それで、教員がその振り返り結果を見てフィードバックのコメントを書き入れるという機能が 1 つです。もう 1 つは、取った科目、単位数に応じて、この科目を取ると DP が何ポイント付くというひも付けがされていますので、今、DP がどのくらい達成されているのかというチャートが出るという機能です。江本先生によるとチャートは注意すべきというお話もありましたが、本学ではこれも学生に示していくということになっています。

機能としては、質的なエビデンスと量的なエビデンスをためて、見えるようにして、学修への動機付けをするためのシステムになっている、とすることができます。

学生にいろいろ目標や振り返りを書いてもらうに当たって、何もなくて書いてくださいというのではなかなか書けませんので、具体的な記入項目を用意しました。このページにはございませんけれども、記入の例も学生には示してあります。例えばこんなふうに書いてくださいという形ですね。

そして、どの科目を取ったら DP の何番が何ポイント増えたことになるのかという対応の表もこういった形で用意してあります。今回お見せしていますのは粗い表で、科目の区分しか書いてありません。実際には、例えば学ぶ基礎という区分の中に物理とか数学とかいろいろな科目があるのですが、すべての科目に対して、この科目は DP の何番です、この科目は DP の何番ですというひも付けがされています。

実際の画面をちょっとだけご紹介します。ポータルサイトの中にポートフォリオがあります。それを押して入りますと、こういう目標を書いてくださいという案内が出ています。学生にはこれとは別に紙で記入の例を配っています。

例えば学修の目標ということで、「1 週間に 10 時間以上学修する。必修の単位を落とさないようにする」とか、そういう目標を書いてもらいます。それで、学年末に、では結果はどうだったかというのを振り返ってもらって、それを見て教員がコメントをすることになります。

DP と科目のひも付けがありますので、最終的にはこのようなチャートが出てきます。実はシステムの稼働自体は今年度からですので、まだこのチャートは学生に見えるようにはなっていないのですが、年度末にはこのように表示される予定です。

最後に、本来ですと DP を達成したかどうかは、履修科目と取得単位数という単純な指標ではなくて、ということができたら達成しているか、という基準が必要だと思います。実際にはそのためのルーブリックが一応できております。ただ、これを使って学生に自己評価してもらったり、あるいは達成状況をフィードバックしたりするということは、まだできていません。

まとめ

では、長くなってしまいましたが、最後にまとめさせていただきます。帯広畜産大学のアセスメント・ポリシーは平成 28 年度に作りました。そして、平成 30 年度から動いています。一部、例えばポートフォリオなどは今年度から始まっているものもあります。

DP, CP, AP を多元的に評価するということを目指しています。今日は到達度調査や、ポートフォリオについてご紹介しましたが、まだまだやり始めたという段階で、きちんとした評価というところには至っておりません。そして、出てきたデータを、どうやって有機的に体系的に、あるいは組織的に活用していくのかというところはまだまだ未検討で、学内の会議等の中でデータの報告がされているのみというのが現状です。

それから PDCA の C に関しては、形式的にはアセスメント・ポリシーができたことによってシステム化されました。その後の改善の方が本当の目的ですので、次は A の方をしていかなければいけないのですが、この A をきちんとシステム化していくというのもまだまだできていない状況です。私からのご紹介は以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

アセスメント・ポリシーの導入

帯広畜産大学 講師 | 斉藤 準

令和元年度IDE大学セミナー「学習成果の可視化」
シンポジウム「北海道における可視化の展開」

2019年8月30日

アセスメント・ポリシーとは

参考文献

- ✓ 濱名 篤 (2016) 「三つのポリシー (AP・CP・DP) をどう実質化するかーガイドライン策定を受けて」 『カレッジマネジメント』 198, 34—38.
- ✓ 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2016) 『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』
- ✓ 細川 敏幸, 山田 邦雅, 宮本 淳 (2018) 「アセスメント・ポリシーの考え方ーアセスメント・ポリシー研究会報告ー」 『高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習ー』 20, 55—59.

学位プログラムに関わる「3ポリシー」

ディプロマ・ポリシー（DP）

- ✓ 卒業認定・学位授与の方針／大学の教育・人材育成目標

カリキュラム・ポリシー（CP）

- ✓ 教育課程編成・実施の方針／目標達成のための教育内容・方法

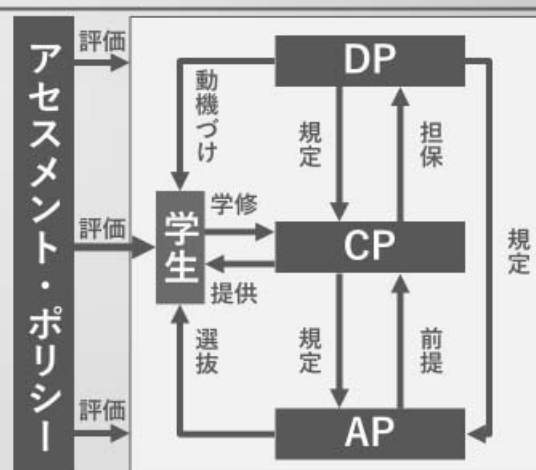
アドミッション・ポリシー（AP）

- ✓ 入学者受け入れの方針／DPとCPに沿う教育を受けるための必要条件

3

アセスメント・ポリシー

- ✓ 3ポリシーに沿う教育活動・学修とその成果に対する能動的評価・検証の方針
- ✓ 学位プログラムの評価であり、学生の評価が目的ではない
- ✓ 機関内外の IR 等と連携し、多面的・相対的に評価することも重要



4

学習パラダイムにおける評価【参考】

	教授（古い）パラダイム	学習（新しい）パラダイム
目的	質の高い 教育プログラムの提供	質の高い 学習と学習成果の創出
方法	専門知識・技能の 網羅的な伝達	専門知識・技能の 実践的な活用・適用
役割	教員＝効率的に教える 学生＝無批判に教わる	学生＝主体的・協働的に学ぶ 教員＝効果的にデザインする
評価	大学＝卒業・進学数 学生＝正解数・単位数	学生＝身につけた能力 大学＝卒業生の活躍

*Barr & Tagg (1995) をもとに作成

5

アセスメント・ポリシーと高等教育政策【参考】

- ✓ 将来像答申（2005）3ポリシーの提言，入試多様化の中で特にAPを重視
- ✓ 学士力答申（2008）3ポリシーを明確化し，学部・学科科単位での作成を求める。APは高大連携の視点も強調
- ✓ 質的転換答申（2012）明確な教育目標の設定とこれに基づく体系的な教育課程の構築（学科単位の細分化でなく全学的教学マネジメントを重視）。DPに従ったプログラム＝学士課程を，プログラム共通の尺度（アセスメント・ポリシー）で評価
- ✓ 高大接続答申（2014）3ポリシーの一体的な作成を法令化（学校教育法）。大学全体としての共通の評価方針（アセスメント・ポリシー）の確立を求める
- ✓ ガイドライン（2016）「抽象的で形式的な記述に留まるもの，相互の関連性が意識されていないものが多い」
- ✓ グランドデザイン答申（2018）教学マネジメントシステム・教育の内部質保証システムの確立，成果の可視化・公表の観点からあらためて3ポリシーとその評価尺度を重視

6

帯広畜産大学の例

参考

- ✓ 帯広畜産大学ウェブサイト「方針／教育方針」 (<https://www.obihiro.ac.jp/navi-educational-policy>)

7

帯広畜産大学ディプロマ・ポリシー

帯広畜産大学では、教育課程で定められた授業科目を履修して所定の卒業要件単位数を修得し、以下の知識や能力を身につけた学生に学士の学位を授与します。

1. 獣医・農畜産融合の視点から、食料の生産から消費に至る過程についての関心が高く、課題解決に向けて取り組む態度を身につけている (DP1)
2. 国際化社会で必要となる見識と基礎的コミュニケーション能力を身につけている (DP2)
3. 獣医農畜産の専門教育コースであるユニットの専門知識、技術及び課題解決に向けた基本的能力を身につけている (DP3)

コンピテンシー＋リテラシー＋専門知識・技術

8

帯広畜産大学カリキュラム・ポリシー【参考】

帯広畜産大学学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、農畜産学及び獣医学とこれらに関連する諸学術分野について、以下の点に配慮しながら授業科目を編成し教育を行います。

1. 農畜産学及び獣医学とそれらを支える様々な関連学術領域に関する幅広い視野と専門性を身につけるための教育を行います
2. 「農場から食卓まで」の幅広い視野に基づいて、食料生産及び食の安全に関わる授業科目を広く修得できる科目を配置し教育を行います
3. 低学年では教養と語学力を向上させるための科目及び専門領域への導入的科目を、高学年では専門領域の科目を配置し、修学の積み重ねを重視したアドバンス制教育を行います

9

帯広畜産大学カリキュラム・ポリシー【参考】

4. 専門教育コースであるユニットでは、より専門性を高めるための科目を配置します。同時に、生命、食料、環境に関する幅広い知識の修得を目的として、他ユニットの科目も適宜選択可能なシステムを設け、専門性を広げる教育を行います
5. 高学年で分属する研究室では、卒業研究や卒業研究ゼミナールを通して専門知識と技術の修得とともに、総合的思考力・応用力を身につけるための教育を行います
6. 学生のキャリアを育てるための科目を配置し、卒業後の進路を配慮した教育を行います

10

帯広畜産大学カリキュラム・ポリシー【参考】

7. 国際教育関連の科目群を配置し、国際社会での活動に対応できるための教育を行います
8. 専門性を身につけるための共同獣医学課程及び畜産科学課程の専門ユニットの科目編成方針は次の通りです
(以下略)

DPを達成するための基礎的／汎用的／専門的科目を設置

11

帯広畜産大学アドミッション・ポリシー【参考】

帯広畜産大学は、獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する実践的な専門職業人を育成するため、以下のような人を学生として求めています。

1. 「農場から食卓まで」の幅広い考え方で現場に適応できる知識と能力を身につけたい人
2. 北海道十勝地域の豊かな自然と風土のもとで、食と農の大切さ、動植物の命の尊さを学びたい人
3. 食や環境等に関する地球規模の社会問題を解決する能力を身につけたい人

12

帯広畜産大学アドミッション・ポリシー【参考】

4. 農畜産学及び獣医学とそれらを支える様々な関連学術領域について学ぶために必要な基礎学力を身につけている人
5. 自分の意見を持ちつつも、他の多様な意見や価値観を尊重して協力することができる人

DPやCPのねらいにかなう学生を受け入れ

13

AP1	AP2	AP3	AP4	AP5	CP	DP1	DP2	DP3
○			○		1	○		
○	○				2	○		
		○	○	○	3	○	○	
○		○			4	○		○
		○			5			○
				○	6		○	
		○		○	7		○	
○		○			8	○		○

これらが実際に機能することを検証→アセスメント・ポリシー

* APとCPの対応は報告者による。

14

アセスメント・ポリシー導入の経緯

第3期中期計画

- ✓ 平成28年度 | アセスメント・ポリシーを
明確化 【I-1-(2)】
- ✓ 平成29年度 | 学修ポートフォリオを導入,
カリキュラム・マップを充実 【I-1-(1)】
- ✓ 平成29年度 | 学修到達度調査を実施,
成績評価ルーブリックを活用 【I-1-(1)】
- ✓ 平成30年度 | 新入試を導入,
アドミッション・ポリシーを評価 【I-1-(1)】

大学教育センター

教育支援室
特別修学支援室
学生相談室
学生・課外活動支援室
就職支援室
留学生相談室
入学者選抜方法研究室
入試広報室

15

アセスメント・ポリシー導入の経緯

FDSDによる周知・共有

- ✓ 平成29年度「アセスメント・ポリシーと大学教育の
組織的質保証」 関西国際大学 学長 濱名 篤 氏
- ✓ 平成29年度「アセスメント・ポリシーの運用」
本学教員
- ✓ 平成31年度「北海道大学新渡戸カレッジにおけるeポート
フォリオの設計と運用」 北海道大学 今井 匠太郎 氏

アセスメント・ポリシーの施行

- ✓ 平成30年度から



16

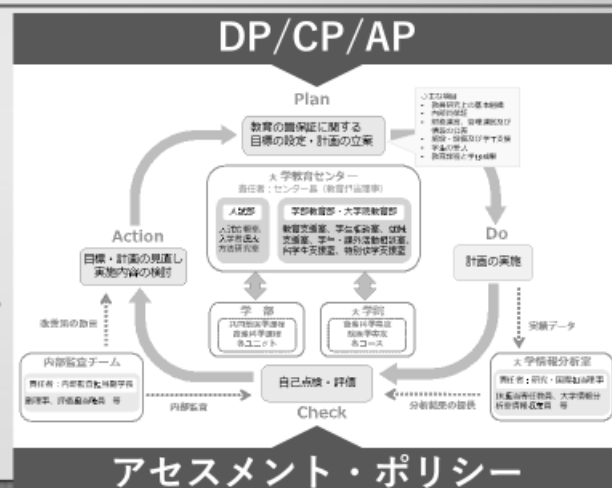
帯広畜産大学アセスメント・ポリシー

評価目的

- ✓ 教育成果・課題の可視化
- ✓ 内部質保証PDCAサイクルの確立

評価対象

- ✓ DPに掲げる能力・資質の修得状況
- ✓ CPの狙いに即した学修状況
- ✓ APに基づく選抜状況



17

多元的・多角的・多層的な評価

評価方法

- ✓ 必要な学修が行われたか = **アウトプット** 《履修状況, 修得単位, ...》
- ✓ 学修目標は達成されたか = **アウトカム** 《自己評価, アンケート, ...》
- ✓ 定量的指標か定性的指標か, 学修データか教育内容データか

評価時点

- ✓ 単位審査 = ミクロ/授業・科目レベル
- ✓ 進級審査 = ミドルアウト/カリキュラムレベル
- ✓ 卒業・修了審査 = マクロ/学位プログラムレベル

18

	アウトプット／定量的指標	アウトカム／定性的指標
ミクロ／ コースレベル	出席状況 授業評点（GP） 教育手法活用状況	授業評価アンケート シラバス
ミドルアウト／ カリキュラムレベル	履修登録状況 単位修得状況（単位数、GPA） 進級状況 インターンシップ状況 資格修得状況	研究計画／進捗状況 学修ポートフォリオ 学修行動実態調査 学修到達度調査・獣医学共用試験 学修到達ループリック
マクロ／ プログラムレベル	卒業／修了状況 進路状況	入学者アンケート 卒業／修了者アンケート 就職先アンケート 学修ポートフォリオ 学修到達度調査 学修到達ループリック 卒業研究／学位論文

可視化の試み

学修到達度調査

自己評価アンケート形式

- ✓ DPの達成度に関する項目
- ✓ 学修行動実態調査に関する項目
- ✓ 卒業／修了者アンケートの項目
- ✓ 入学者アンケートの項目

実施概要

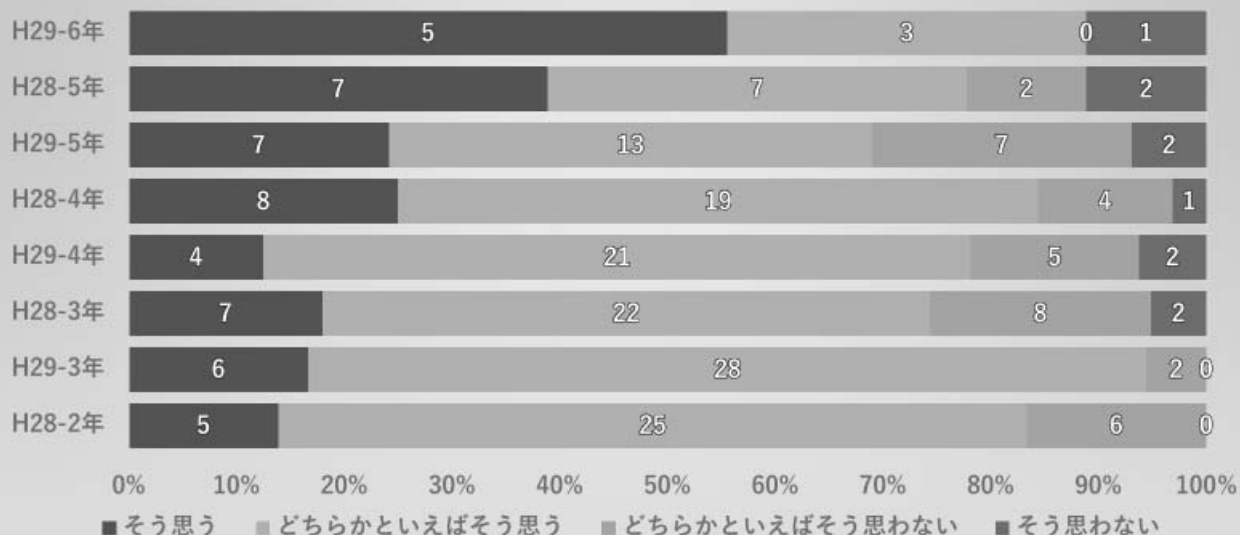
- ✓ 大学IRコンソーシアムの調査項目に本学独自項目を追加
- ✓ 各年度末／入学時に教学ポータル上（記名）で実施
- ✓ H28（2016）年度試行，H29（2017）年度本稼働



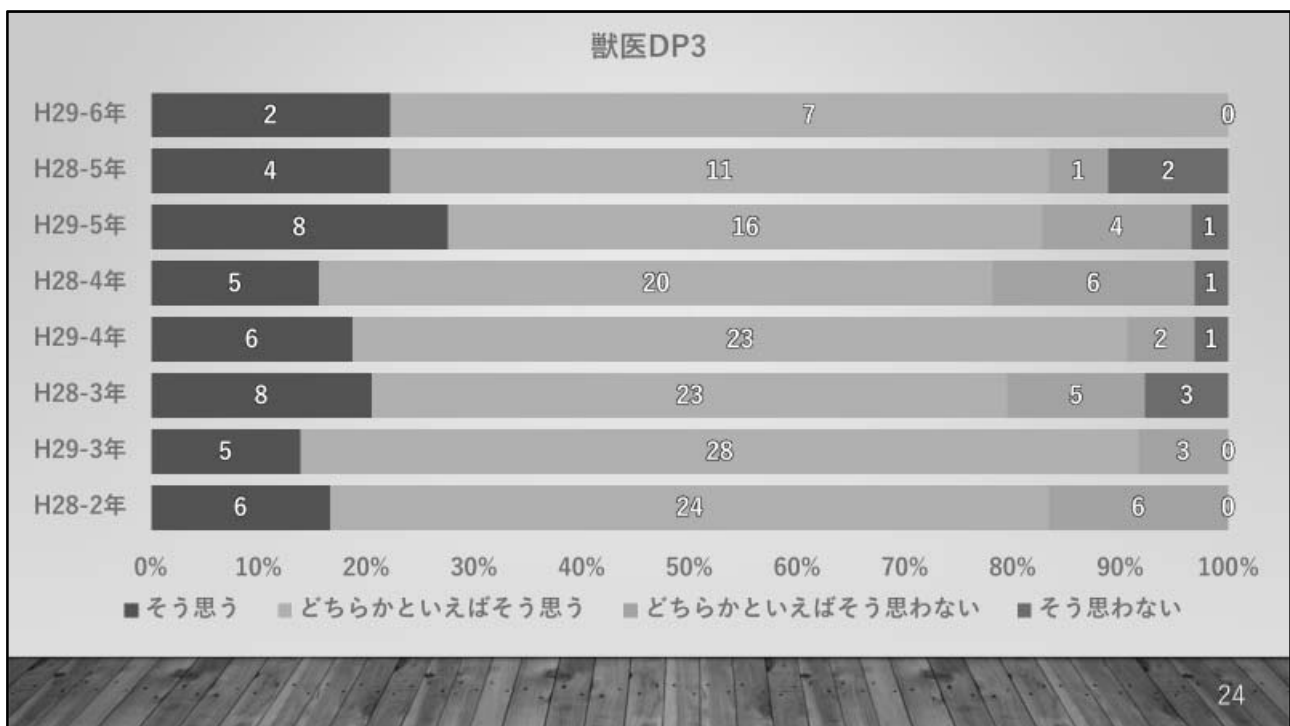
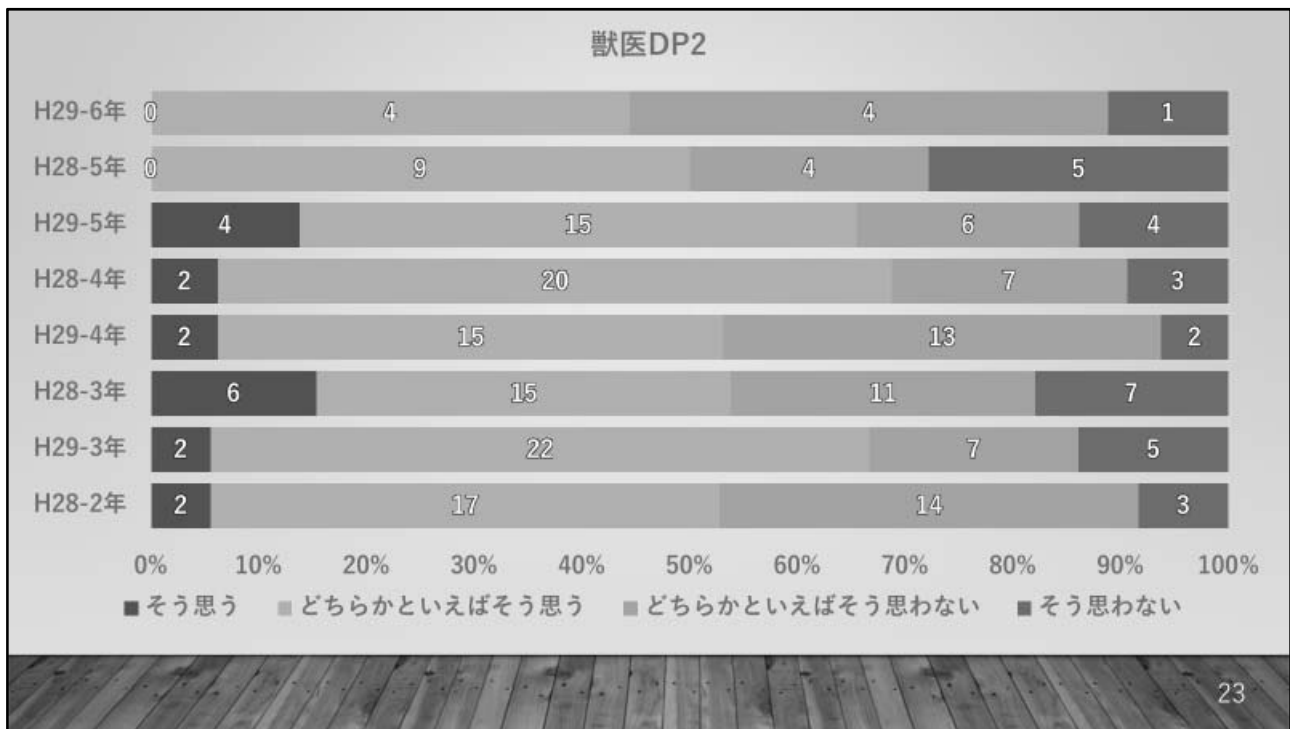
一般社団法人大学IRコンソーシアム
『学修紹介リーフレット』

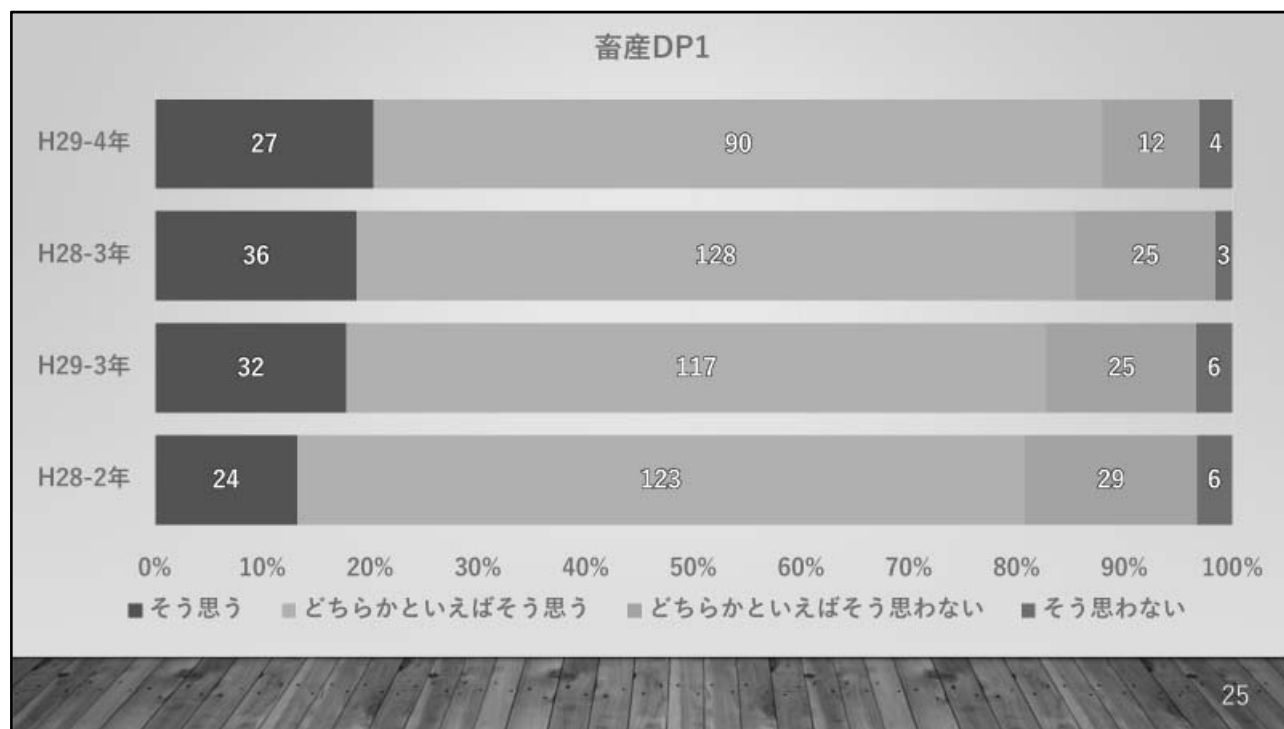
21

獣医DP1



22







学修ポートフォリオ

教学ポータル（履修システム）上に導入

- ✓ 履修・出席状況／成績・修得単位／授業評価アンケート／掲示板

蓄積される情報

- ✓ 学生による目標（学年開始時）と省察（学年末）の記述
- ✓ 教員からのフィードバック・コメント

可視化

- ✓ 修得単位に基づくDP達成状況のチャート

質的・量的エビデンスの蓄積・可視化と学修への動機づけ

28

学修ポートフォリオ | 学生記入内容

目標（○○のために○○する）

1. 大学での学習に関する目標
2. キャリア形成に関する目標
3. 課外の活動や学修に関する目標
4. 生活と健康管理に関する目標

振り返り

- ✓ 各目標に対する結果と、それにもとづく展望

29

DPと科目の紐付け

科目区分	DP1	DP2	DP3-1	DP3-2
学ぶ基盤（理系基礎）	○			
生きる基盤（教養）		○		
共通基盤（語学）		○		
共通教育基礎（専門基礎）	○			
共通教育発展（専門基礎）	○		○	
展開教育（専門）			○	○

* 実際は科目毎に紐付け | 細部は科目により異なる。

30

前回ログイン:2019/06/18 11:23:30 2019年6月18日 11:59:13

ログアウト 文字サイズ 小 **中** 大 日本語 English  国立大学法人
帯広畜産大学

畜大 太郎 さん

トップページ	メッセージ	履修・成績情報	学籍情報	掲示板	アンケート
各種設定	ポートフォリオ				

ポートフォリオ

トップページ > ポートフォリオ

学修目標	達成
学期: ----- ▼ PDF	

トップページ > ポートフォリオ 🔍 ページの先頭へ

学修目標	達成
学期: 2019年度通年 ▼ PDF 大学での学習に関する目標（できるだけ自学・自習に関する目標を含めること） キャリア形成に関する目標 課外の活動や学修に関する目標 生活と健康管理に関する目標 （学年末に記入）大学での学習に関する目標の振り返り（自己評価） （学年末に記入）キャリア形成に関する目標の振り返り（自己評価） （学年末に記入）課外の活動や学修に関する目標の振り返り（自己評価） 編集	

トップページ > ポートフォリオ 🔍 ページの先頭へ

学期：2019年度通年

大学での学習に関する目標（できるだけ自学・自習に関する目標を含めること）
1週間に10時間以上、自学習する。必修単位を落とさない。

キャリア形成に関する目標
インターンシップと海外研修に行きたいので、先輩や先生に相談してアドバイスをもらう。また、実際に行くための計画を立てる。

課外の活動や学修に関する目標
幅広い教養を身につけるために、専門書以外の本を月に3冊以上読む。

キャンセル 確認画面へ

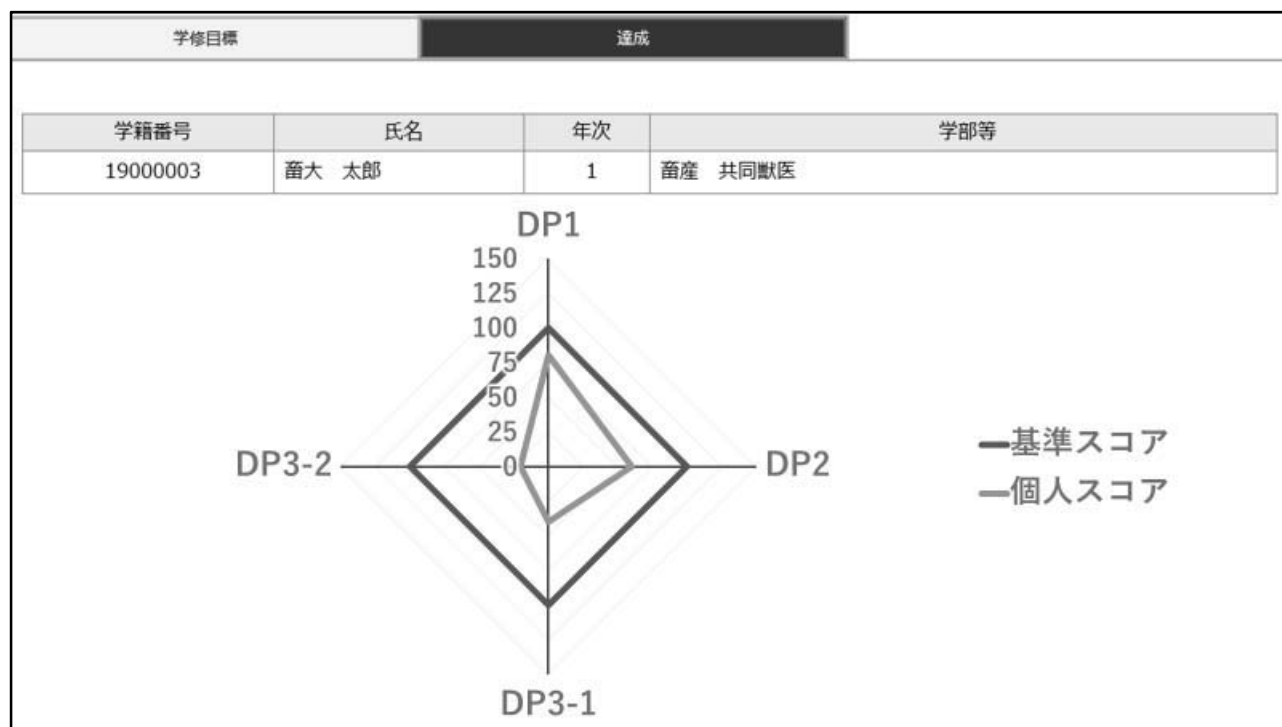
学年開始時に目標を記入

トップページへ 戻る 先頭へ

学修目標	達成
(学年末に記入) キャリア形成に関する目標の振り返り（自己評価）	
(学年末に記入) 課外の活動や学修に関する目標の振り返り（自己評価）	
(学年末に記入) 生活と健康管理に関する目標の振り返り（自己評価）	

【留意点】

学年末に振り返りを記入→その後、教員がコメントを記入



学修到達ループリック（畜産）【参考】

到達目標（DP）

評価基準

十分に到達できている

一部は到達できている

到達に相当の努力を有する

1) 獣医・農畜産融合の視点から、食料の生産から消費に至る過程についての関心が高く、課題解決に向けて取り組む態度を身につけている

2) 国際化社会で必要となる見識と基礎的コミュニケーション能力を身につけている

3-1) 獣医農畜産の専門教育コースであるユニットの専門知識を身につけている

3-2) 獣医農畜産の専門教育コースであるユニットの技術及び課題解決に向けた基本的能力を身につけている

(1) 「家畜生産と獣医学」や獣畜融合科目を積極的に履修、単位修得しこれらの知識を身につけ、自らの専門について両者の視点から課題を説明できる

(2) 「全学農畜産実習」や「農畜産科学概論」の単位を平均より上位の成績で修得し、食料の生産から消費に至る過程について、課題を含め説明できる

(3) 課題を設定した上で幅広い共通教育科目を履修し、専門に偏ることなく順調に単位を修得している

(1) 国際化社会で必要となる見識についての認識を十分供えたうえで、多くの分野の基礎教育科目を履修し単位を修得している

(2) 国際教育アドバンスモデルをはじめ、国際関係の科目を積極的に履修するとともに、必修にとどまらない語学科目を意欲的に修得し海外へ研修に行くなどしている

(3) 2年次TOEIC-IPテストのスコアが1年次との比較で大幅に向上しており、学修の大きな成果が見られる

(1) 開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均を上回る成績で単位を取得している

(2) 卒業論文の内容が、共通教育発展科目、展開教育の講義内容を踏まえた十分な専門知識に裏打ちされている

(1) 開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均を上回る成績で単位を取得している

(2) 卒業研究ゼミナールを履修し平均を上回る成績で単位を取得して卒業研究に向け内容を十分に理解している

(3) 共通教育発展科目、展開教育の実験実習内容を踏まえた適正な研究方法により卒業研究が行われている

「家畜生産と獣医学」や獣畜融合科目を一部履修、単位修得し断片的な知識を有している

「全学農畜産実習」や「農畜産科学概論」の単位を平均的な成績で修得し、食料の生産から消費に至る過程について、部分的に説明できる

課題意識をもちつつ、専門を中心とした共通教育科目を履修し単位を修得している

一般教養についてある程度の関心を持ちつつ複数分野の基礎教育科目を履修し単位を修得している

語学科目を順調に履修し、論文の精読に必要な読解力と日常会話レベルの会話を身につけている

2年次TOEIC-IPテストのスコアが1年次との比較で向上しており、一定の学修成果が見られる

開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均的な成績で単位を取得している

卒業論文の内容が専門知識に裏打ちされている

開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均的な成績で単位を取得している

卒業研究ゼミナールを履修し平均的な成績で単位を取得して卒業研究に向け内容をある程度理解している

適正な研究方法により卒業研究が行われている

「家畜生産と獣医学」や獣畜融合科目を履修することなく、獣医・農畜産融合的な知識を持ち合わせていない

「全学農畜産実習」や「農畜産科学概論」の単位を平均を下回る成績で修得或いは単位を修得できず、食料の生産から消費に至る過程について説明ができない

課題について意識することなく、必要な共通教育科目の単位を修得している、或いは修得状況が芳しくない

漫然と基礎教育科目を履修し単位を取得している、或いは取得状況が芳しくない

語学科目の修得状況が芳しくなく、語学の使用に難がある

2年次TOEIC-IPテストのスコアが1年次との比較で向上していない

共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均を下回る成績で単位を取得している、或いは単位の修得状況が芳しくない

卒業論文の内容に専門知識の不備が見られる

共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均を下回る成績で単位を取得している、或いは単位の修得状況が芳しくない

卒業研究ゼミナールを履修し平均以下の成績で単位を取得しているが、内容の理解が不足している、或いは単位を修得していない

卒業研究の研究手法に不備が見られる

学修到達ルーブリック（獣医）【参考】

到達目標（DP）	評価基準		
	十分に到達できている	一部は到達できている	到達に相当の努力を有する
1) 獣医・農畜産融合の視点から、食料の生産から消費に至る過程についての関心が高く、課題解決に向けて取り組み態度を身につけている	(1)畜産関係科目を積極的に履修、単位修得しこれらの知識を身につけ、自らの専門について両者の視点から課題を説明できる (2)「農畜産演習」や「農畜産科学概論」の単位を平均より上位の成績で修得し、食料の生産から消費に至る過程について、課題を含め説明できる (3)課題を設定した上で幅広い共通教育科目を履修し、専門に偏ることなく順調に単位を修得している	畜産関係科目を履修、単位修得し断片的な知識を有している 「農畜産演習」や「農畜産科学概論」の単位を平均的な成績で修得し、食料の生産から消費に至る過程について、部分的に説明できる 課題意識をもちつつ、専門を中心とした共通教育科目を履修し単位を修得している	畜産関係科目の単位を修得していない或いは成績が芳しくなく、獣医・農畜産融合的な知識を持ち合わせていない 「農畜産演習」や「農畜産科学概論」の単位を平均を下回る成績で修得或いは単位を修得できず、食料の生産から消費に至る過程について説明ができない 課題について意識することなく、必要な共通教育科目の単位を修得している、或いは修得状況が芳しくない
2) 国際化社会で必要となる見識と基礎的コミュニケーション能力を身につけている	(1)国際化社会で必要となる見識についての認識を十分供えたうえで、多くの分野の基礎教育科目を履修し単位を修得している (2)国際教育アドバンスモデルをはじめ、国際関係の科目を積極的に履修するとともに、必修にとどまらない語学科目を意欲的に修得し海外へ研修に行くなどしている (3)1年次末のTOEIC-IPテストのスコアが入学次との比較で大幅に向上しており、学修の大きな成果が見られる	一般教養についてある程度の関心を持ちつつ複数分野の基礎教育科目を履修し単位を修得している 語学科目を順調に履修し、論文の精読に必要な読解力と日常会話レベルの会話を身につけている 1年次末のTOEIC-IPテストのスコアが入学次との比較で向上しており、一定の学修成果が見られる	漫然と基礎教育科目を履修し単位を取得している、或いは取得状況が芳しくない 語学科目の修得状況が芳しくなく、語学の使用に難がある 1年次末のTOEIC-IPテストのスコアが入学次との比較で向上していない
3-1) 獣医農畜産の専門教育コースであるユニットの専門知識を身につけている	(1)開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均を上回る成績で単位を取得している (2)課題研究の内容が、共通教育発展科目、展開教育の講義内容を踏まえた十分な専門知識に裏打ちされている	開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均的な成績で単位を取得している 課題研究の内容が専門知識に裏打ちされている	共通教育発展科目、展開教育の講義を履修し平均を下回る成績で単位を取得している、或いは単位の修得状況が芳しくない 課題研究の内容に専門知識の不備が見られる
3-2) 獣医農畜産の専門教育コースであるユニットの技術及び課題解決に向けた基本的能力を身につけている	(1)開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均を上回る成績で単位を取得している (2)獣医学共用試験に平均を上回る成績で合格し、参加型臨床実習に十分培えられる技能・能力を身につけている (3)共通教育発展科目、展開教育の実験実習内容を踏まえた適正な研究方法により課題研究が行われている	開講年次にしたがって共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均的な成績で単位を取得している 獣医学共用試験に平均的な成績で合格し、参加型臨床実習を受講するだけの技能・能力を身につけている 適正な研究方法により課題研究が行われている	共通教育発展科目、展開教育の実験実習等を履修し平均を下回る成績で単位を取得している、或いは単位の修得状況が芳しくない 獣医学共用試験に平均を下回る成績で合格或いは不合格で、参加型臨床実習の受講に当たって技能・能力の不足がみられる 課題研究の研究方法に不備が見られる

まとめと課題

まとめと課題

帯広畜産大学アセスメント・ポリシー

- ✓ 平成28（2016）年度に設定，平成30（2018）年度に施行
- ✓ 既存の評価と新設の評価により，DP，CP，APを多元的に評価
- ✓ 到達度調査，ポートフォリオ等（新設評価）は年次進行で運用開始

課題

- ✓ 運用途上であり，有機的・体系的・組織的な具体的活用は未検討
- ✓ 教育PDCAの「C」までは一定程度システム化 → 「A」のシステム化が必要

3.2 札幌学院大学のIRの取り組み

札幌学院大学 教授 石川 千温

石川: 皆さん、こんにちは。札幌学院大学の石川でございます。今日は、私どもの大学のIRの取り組みということで、今回のテーマである学修成果の可視化という観点においては、今日お集まりの方の発表と若干色合いが異なる部分がありますが、私どもの現状を素直にお話しするということでお聞きいただければと思います。

まず、札幌学院大学のIRです。学内に教学IR委員会というのが構成されまして、そこで学内の教学にかかわるデータを集約して分析する。それを各部署、学部とか、学科とか、各種委員会とか、そういったところへ報告するというのが委員会の役割です。

当初想定された目的ですが、IRの報告を受けて各部署は、おのおのの事業の中で予算獲得とか、事業評価、事業計画の根拠データとして活用していくことです。あとは、先ほども話題に出ております、3ポリシーが達成されているかどうかということを検証するということでした。

只今述べた目的はどちらかというとマクロの視点です。マクロな視点での活用方法と言えます。将来的な目的としてはこのスライド下にあります、エンrollmentマネジメントです。個々の学生たちの休退学を何とか予防したいという、本学にとっては非常に長年抱き続けている課題があります。それをこういった学修成果の可視化ですとか、IRを進化させて、発展させてできないかということが遠い目標としてあります。こちらはどちらかというと、ミクロな分析と活用ということになるかと思います。ただ、優先順位としては、やはり各事業体の評価に使う。あと、3ポリシーの評価に使うということが目的でした。

では、実際それが活用されているかという、必ずしもそうではないというところがあります。各部署にIRの報告書を提出しますが、そのときに翌年の事業計画にそれが生かされているかどうかということを検証しています。

実際のところ、IRがこういう分析をしたから、次年度本委員会ではこういう事業計画を立てて、これだけの予算が欲しいと論理立てて要求しているところは少ない。なかなかそこがうまくいかない、という感じはしております。例えば委員会のメンバーとか、IRでこういう結果が出ていたから次年度はこうした方がいいのではないかということは各々の委員会の中でなされています。しかし、それをきちんと明文化して、表に出して、IRがこうだからこうだという言い方がなかなか出てこない。俗に暗黙知化される傾向が見られるところがあります。

ただ、例えば入試に関するデータとかは、学部や学科にとっていろいろな意味で重要なパラメーターになりますので、いろいろ活用している部分がだんだん出てきました。もう1つ、3ポリシーへの評価と改善への活用に関しては、結局これが最終的に活きるのは、認証評価のときだろうということですが、なかなかそれを意識して活用できていないのが現状です。

IRがこう言っているから、ディプロマをきちんと書き直して見直した方がいいのではないかといいところにはまだまだ至っていない。ただ、2022年に私どもの大学は認証評価がありますので、それまでの間にはIRで出された指標が、DPとか、CPとか、APにいろいろ反映されて、改善に使われているよというような言い方がなされると理解しております。

遠い目標であるエンロールメントマネジメントですが、言うはやすく行うは難しで、なかなかできていない。ただ、この秋から全学的にすべての学生の出席状況なども全部 IC カードでデータを取れる状態にはなっておりますので、それらをやりましょうということになりました。

それ以外のデータも徐々に集約しつつあります。それらを何らかの形で分析することができれば、退学の予兆とか、休学の予兆とか、そういったことが予測モデルを立ててできるのではないかな。一部研究費なども投入しまして、機械学習の仕組み、先ほど金沢工業大学は Watson を使っているという話もありましたが、そういったものを利用しつつ、こういう退学予知みたいなものに活用することをこの 2~3 年で考えていこうと思っています。ただ、現状としましては、人も時間も足りなくて、IR の機能をきちんとした形で各部署に有機的に組み込む工夫が最優先だと認識しております。

学修成果の可視化という観点においては、正直、本日報告されている大学から比べると、私どもの大学は非常に遅れております。IR のマクロ的な視点ではいろいろ試行錯誤を重ねながら、こういう分析結果が出ましたということはやっていましたが、個々の学生の学修到達度がどうかとか、ディプロマに対して達成度がどうかという観点は、これまでまったく想定しておりませんでした。

ただ、この学修成果の可視化というキーワードは、ここ 2~3 年、非常に本学ではにぎやかになってきております。文科省からもこのキーワードが必ず伝えられてくるということで、ようやくこの春からいろいろ議論が進んできました。1 つがこの外部アセスメント試験の導入、これをやってはどうかと。

北海道科学大学さんはすでに実施されていると聞いておりますので、本学でも導入できないかということでいろいろ検討しましたが、予算が付かないということで、あきらめました。あと、例えばルーブリックの導入なども、これは一部の講義、実習で試行的に行われている段階で、まだ全学的には反映されておられません。

それと、ポートフォリオです。今日も、各大学の取り組みがたくさん報告されておりますが、これもようやく今年度後期から全学部導入でやることになりました。一部の学部においては 4 年ぐらい前から紙ベースのものを導入していたということで、一気に全学的にこの秋からやろうという話になりました。あと卒業生アンケートですね。これも今年度の 3 月の卒業生を対象にやることが決定しました。

なぜこれだけ一気に話が進んだかという、高等教育の無償化という、大学にとっては非常に足かせといいですか、これを実現するためには、この学修成果の可視化ということを含め、あらゆる条件をそれに合わせていかなきゃいけない。ということで、一気に議論が進んで、やるということになりました。ようやくです。

それまでは、私立大学総合改革経費のタイプ 1 にエントリーするから何とかこれをやらせてくれというように、歴代の教務部長とか、副学長とか、学長が学内に同意を得ようと努力しておりました。けれども、補助金を取ったからといっていくら補助金収入が増えるのかという、その程度の議論でなかなか導入が進まなかった。今回、高等教育の無償化、授業料が無償化になるというところのこの制約は非常に大学にとっては重しが効くというか、学内で合意形成が一気にされるというような側面が正直あるように思います。この制度の是非の議論は別にありますけれども、私どもの大学にとっては、この流れによりやく乗れたという側面があります。

それでも、個々の学生の学修成果の可視化というのは進んでいないのですが、マクロな視点での可視化はそれなりに進んでおります。ただ、大学 IR コンソーシアムでやっているような標準的な分析ではございません。独自の視点でやっております。

なぜかという、このスライドに書いてありますように、教職員が知りたいことにターゲットを絞ることで、IRは動いております。先生がこういうことを知りたいんだけど、ちょっと分析してくれない？とか、正直、これはどうなんだろうということを吸い上げて、IRがそれに対して答えを出す。

入試の分析

例えばここに書いてあるように、「本学を目指す高校生はどのような生徒なのか」、「入学した学生の高校での活動と入試制度の関係、入学後の状態はどうなのか。GPAと卒業後の進路の関係はどうなのか。」、先生が知りたいというのはそういうことが多いので、それをIRで示すということになっています。

それで、今日は取り組みの紹介ということで、受験している学生の状況とか、その辺をご紹介したいと思います。ただ、なかなか表に出せるデータではないので、ここでスクリーンだけでお話をさせていただきます。

まず、本学を受験している学生の層をいろいろ調査した結果です。これは昨年までのデータで、今年度のデータではありません。今年度のデータはまた別にあります。高校のランクはS, A, B, C, D, E, F, G, H, Iというランクで、この横軸は入試制度です。私どもの大学も私学なので、入試制度がたくさんあります。横軸はその入試制度で、どのランクの学生がどれくらい来ているのか、受けているのかというのを出したデータです。

拡大表示して示します。あまり表立って出せないんですが、赤のラインは割合が多いところですよ。例えばこれで言うと、新たに導入したスカラー入試。この入試制度は、「4年間の授業料免除」の奨学金が与えられる入試制度ですが、これを導入すると、上位層が増えてきたという傾向が見られる。こういったことをIRでやっております。

この次のデータはどの高校ランクで受験して、卒業しているのか、卒業できているのかということですね。こちらのデータは、高校のランクに対して実際の卒業率を出していく。休学したかとか、転籍したかとか、そういう状態を可視化したものです。

4年間卒業率を見たときに、これはさらに横軸に高校評定ランクと高校のランクと合わせて、実際どのくらいの4年間卒業率があるのか。赤色は卒業率が低めというところを示していて、この評定平均だとちょっと入学後にまずいんじゃないかということを統計的に出しているものです。このデータは高校の評定平均がGPAとどう関係あるかということを示していますが、相関を取ってみますと0.36ということで、弱い正の相関がある。一方、こちらのデータはどこの大学もそうでしょうけれども、1年次のGPAと卒業最終GPAの相関を取ると、非常に強い正の相関がある。

つまり、1年次の成績でほぼ4年間決まってしまうというのが現状で、例えばこの中で我々が大学でさらに調べているのは、逆転できている学生はいるのだろうか、ということ。1年次のGPAが低くても、この4年次のGPAが上がった学生をピックアップして、それらが実際にどういう学修行動を取っていったか、どういう授業を履修してどう変化したかを、追跡調査をします。

時間外学習時間

これは時間外学習時間のデータです。学修行動調査ということで、毎年1年の秋と2年次の秋に、学生

から記名式で学修行動調査を取っていて、1 週間の学修時間の調査をしています。ある先生から、「時間外学習の時間が長ければ成績が良いというのが本来あるべき姿なんでしょう。それが正しいから時間外学習をたくさんさせると当局は言っているんだから、GPA と相関があるのか調べてみなさい。」と言われて調べたところ、実はあまり相関がないことが分かったところです。たくさん勉強しているからといって GPA が高いというデータにはなり得ていないとです。

ただ、学科によってちょっと差があるということで、この学科なんかは相関係数が 0.3 ということで、それなりに相関が出ているのが分かる。ただ、これも入学年度によっていろいろ差が出てきました。先ほどちょっと触れましたけれども、この上のグラフは 2014 年から 2017 年度の変化を示したものです。これは本当に 0.1 ぐらいしか相関がない。

ただ、昨年の入学者のデータで見ると、これが 0.25 まで、0.1 ほど上がりました。この理由はそれこそスカラシップ入試を導入して、それなりに学力の高い層の学生たちが入ってきたというのも 1 つの側面なのかもしれません。これから詳しい分析を進めていこうと思っております。

課外活動

あとは課外活動ですね。課外活動をやっている学生の成績はどうなのか。これは縦軸に GPA をランク付けて、一番上が S。これは 3.5 以上になりますけれども、そこから 0.5 刻みでランクを付けて、それで GPA がどうかを調べています。

これもある先生から、「本学の学生で音楽系サークルに入っている学生がちょっと成績が悪い。そういう傾向があるんじゃないか、ちょっと調べてくれ」と言われて、実際に調べたものです。音楽系サークルの学生たちが GPA ランクで言うとどのくらいの分布かという、A, B, C, D, E ランクがだいたいいるんですが、その他と比べると確かに若干下の方に階層があるかなというところが見えてきた。

就職

あとは進路ですね。実際 GPA のランクと進路の関係、つまり就職はできているのかどうかという側面のデータです。今日はお見せできないんですが、就職した後の初任給と GPA の関係はあるのか、などの先生方からの要求もありまして、実際に調べたところ、まったく相関がございませんでした。ゼロでした。相関ゼロ、マイナス 0.0 いくつだったかと思えます。

就職関係で IR で調べているのはそういうものですか、あるキャリア教育関連の講義の出席率が就職につながっているのかというデータだったりします。例えば出席率が正規雇用につながっているのかどうか。社会科学系ではあまり明確な関連性はないのですが、人文学系の学科になると出席率がよいと就職につながることが分かってきた。

こういったことをやりながら、IR のマクロ的分析を個々の講義レベルまで落とし込むことが必要だと考えています。その上で受講する学生の学修状態をミクロに分析する。学修成果に見合う講義がちゃんと提供されているかというところを IR で測りながら、なおかつ、個々の学修状態を把握しつつ、大学の教育改善を行っていくことを目指しています。

実際にはきめ細かく学生の状態を把握することとか、IR を現場担当者レベルまで落とし込む。IR に携わ

る人間しか分析ができないというところでなかなかうまくいかないこともあります，できるだけ現場レベルの先生や職員も使えるようにしたいと思っています。

最終的には，IR と個々の学生の学修成果の可視化を実現して，大学が進むべき道を明確にしたい，このように考えております。以上で私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）



2019.8.30
令和元年度IDE大学セミナー
シンポジウム

札幌学院大学のIRの取り組み

札幌学院大学
 経営学部 石川 千温

www.sgu.ac.jp





2

札幌学院大学のIR



❖ 教学IR委員会

- 学内の教学に関わるデータを集約し分析し、各部署へ報告

❖ 当初想定された目的

高
優先
順位
低



- 各部署は各々の事業の中で、予算獲得、事業評価、事業計画の根拠データとして活用
- 3ポリシーの検証と改善のために活用
- エンロールメントマネジメント
 - 学生の休退学者の予兆を掴む
 - 休退学者の防止
 - 学生の総合的サポート

}

マクロ的な分析と活用

ミクロ的な分析と活用

www.sgu.ac.jp 



3 マクロ的活用の達成は？



❖各部署の事業計画等への活用？

NO or YES

- IRからの分析を積極的に活用しているものはまだ少ないが、徐々に広がりつつある。
- IR結果が関わる教職員の意識に内在化してしまふ、暗黙知化される傾向が見られる。

❖3ポリシーへの評価と改善？

NO

- 評価のサイクルが長く、ポリシー自体が抽象的で、IRの定量的分析が入り込む余地がない。
- 第3次外部認証評価（2022年）では使用予定。

www.squ.ac.jp 



4 ミクロ的活用の達成は？



❖エンロールメントマネジメント

NO

- 言うは易く、行うは難し
- 個別のデータを日々追跡する時間的余裕がない
- 統計的分析だけでも精一杯
- 予測モデルが確立していない

❖目標実現のためには

← 機械学習を導入予定

- 人も時間も足りない
- IRの機能を各部署に有機的に組み込む工夫が必要と考える

www.squ.ac.jp 

5

学修成果の可視化は



❖ミクロ的な分析と活用が不可欠

- エンロールメントマネジメントも遠い目標設定

❖学修成果の可視化

教学IR委員会では
そもそも想定外

- 外部アセスメント試験の導入
 - 予算がつかない
- ルーブリックの導入
 - 一部の講義・実習で試行的に
- ポートフォリオの導入
 - 一部学部が4年前から導入（紙ベース）
 - 今年度後期から全学部導入で検討
- 卒業生アンケート
 - 今年度から導入予定

www.squ.ac.jp 

6

札幌学院大学のIRの役割



❖機能を限定してアウトプットする

- 札幌学院大学を目指す高校生はどのような高校生か？
- 札幌学院大学に入学した学生の高校での活動と入試制度の関係、入学後の状態は？
- 入学後のGPAと卒業後の進路の関係は？
- GPAに影響を及ぼす課外活動は？
- 在学中の特定科目が進路に影響を与えるか？
- 大学全体と学科別ではどうか？

現時点で、教職員の知りたいことにターゲットを絞る

www.squ.ac.jp 

7

IRの取り組みの紹介



❖札幌学院大学を受験しているのは？
❖高校の評定平均とGPAの相関は？
❖GPAと課外活動の関係は？
❖GPAと進路は？

詳細について講演内に限定して説明する予定です。
現時点で資料として配布することができません。
あしからずご了承ください。

www.squ.ac.jp 

8

学修成果の可視化とIR



❖IRのマクロ的分析を個々の講義レベルまで落とし込むことが必要

- 特定の科目の評価が全体にどう影響するか
- 科目選択によって有利、不利は生じるか
- 特定の学科で評価に偏りがないか

❖その上で受講する学生の学修状態をミクロ的に分析することが必要

- 学修成果に見合う講義が提供されているか
 - 受講生のレベルが講義レベルとマッチしているか
- 「要領の良い・悪い」学生？

www.squ.ac.jp 



9

IRから学修成果の可視化への展開



- ❖きめ細かく学生の状態を把握する
- ❖IRを現場担当者レベルまで落とし込む
 - 統計の知識が無くても使える
- ❖様々なデータのフォーマットを均一化する
 - データのクレンジングに要する時間を短縮化
- ❖EBM文化を定着させる
 - エビデンスに基づいた政策決定

IRと個々の学生の学修成果の可視化を実現
して大学が進むべき道を明確にする

www.sgu.ac.jp



10

謝辞



ご清聴ありがとうございます。



上記調査は札幌学院大学教学IR委員会の業務として実施しています。
また本調査の一部はJSPS科学研究費 補助金（科研費）JP19K02868
の助成を受けたものです。

札幌学院大学
経営学部 石川 千温
chiharu@sgu.ac.jp

www.sgu.ac.jp

3.3 国立高専における教育の質保証の取り組み

苫小牧工業高等専門学校 教授 村本 充

村本: 苫小牧高専の村本でございます。本日は「国立高専における教育の質保証の取り組み」ということで、国立高専全体の話と、あと苫小牧高専の話と両方を織り交ぜながらお話をしていこうと考えております。一応、このような流れでお話をしていきます。

まず、初等中等教育では、プログラミング教育、理数教育が今後重視されていきます。高専としてはこういうことをすでに学んできた生徒さんが入学してくるので、それによって高専も変わっていかねばいけないなというのを感じています。

一方、高等教育はどうかというと、これは皆さんご存じのところですが、ちょっと拡大しますと、教育の質の保証という今日のテーマの部分で言うと、教学マネジメントシステムの確立、それから学修成果の可視化ということがここで書かれているわけです。それで、線を引いたところは、学生の成長実感、満足度というキーワードがあり、それでこれまでの発表の中ではポートフォリオとか、そんな話が出てきているのかなと感じているところです。

では、2040 年に向けたグランドデザインで高専がどう書かれているかということ、それがこの数行、ここしか高専に関しては書かれていない。この中で高専は、下の方ですが、国際化を進めていくことによって教育の質を高めていくことが重要だと書かれています。高専はここ最近すごい勢いで国際化も進めてきております。

高専は大学と違うので、高専を知らない先生もいるかもしれませんので、先にちょっとだけご説明をします。高専は全国に国立高専が 51 校、あと公立と私立が 3 校ずつありまして 57 校ある学校です。国立の高専は 51 校、55 キャンパスあるわけですが、1 つの学校は 1000 人程度の小さい学校ですが、すべてを合わせますと、全国で約 5 万人弱の学生を抱えていますので、かなり大きな大学に匹敵をすることになります。

ですので、国立高専全体でいろいろなものを決めて、それを各高専が実施していくという、大きな流れもあります。その辺も含めながらこの後お話をしていこうと思います。

高専の戦略

国立高専の重点戦略としては、この 3 つの大きな戦略があるわけです。1 つ目は今日のテーマになっている教育の質保証。それと特色形成。51 校の学校がまったく同じであってはいけなくて、それぞれの学校でいろいろな特色を出して頑張らなさいと言われております。3 番目として国際化と情報化。小中学校からこれからプログラミング教育等が始まってくるわけです。高専としては、専門系によらず高専の卒業生であれば情報セキュリティ能力を持っている卒業生を輩出しようという動きがあるところです。

今日お話しする内容をすべて 1 つにまとめると、こういうことになります。小さくて見えないと思いますが、上の方に 3 ポリがありまして、真ん中の方に実際の流れがあって、下の方にはそれを支えるツール群が書いてあります。ちょっと小さくて見えないと思いますので、ここからつまみ食いしながら、この後お話をしていきます。

最初にご説明しなければいけないのは、モデル・コア・カリキュラムです。これは何かというと、これが高専の教育の質保証する要になるんですが、モデルとコアがあります。

コアとは、国立高専のどの高専を卒業してもこれだけは身に付けていますよというミニマムスタンダードになるわけです。各高専のカリキュラムのうちのおよそ 6 割から 7 割ぐらいがこのコアに該当するように、それぞれの学校はカリキュラムを設計しています。残り 3~4 割の部分で特色を出すという考え方でカリキュラムを設計しています。そして、いわゆるジェネリックスキルに相当するようなものがモデルになります。コアの部分ですが、これはさらに 2 つに分かれまして、基礎的能力、これは分野共通の部分。それと専門的能力、分野ごとの部分に分かれます。それぞれの細かい到達目標が設定されていることになります。

モデルの部分には人間力、分野横断能力です。正課の授業以外にもインターンシップですとか企業との共同教育ですとか、高専ではロボットコンテスト、あるいはプログラミングコンテストといったようなさまざまなコンテストがありますので、そういういろいろな活動を通じて養成していくものになろうかと思います。これにも取り組むということです。

モデル・コア・カリキュラムを具体的に説明するために、電気系の部分をお見せします。読み上げませんけれども、ここにあるように何々できるという形で書かれております。電気系の学科であればすべての国立高専が卒業時までにはこの到達目標を達成させるというカリキュラムを組むことになっています。

あと、このそれぞれの到達目標にはレベルがありまして、左から「1, 2, 3, 4, 5」と書いてありますが、これは難易度ではなくて到達レベルです。どういうことかという、レベル 1 は基礎記憶レベル、レベル 2 は理解レベルといった具合です。

例えばある公式があったとして、公式を知っていればレベル 1 を達成している。その公式を使って計算問題を解くことができればレベル 2。問題の難易度によらず、易しい問題、難しい問題関係なく、公式を使って計算ができればレベル 2。その公式を自分の専門分野に応用できればレベル 3。こういうレベルという考え方も使って、あなたはこの目標に関しては現在このレベルまで達成していますねということを見ていきます。

ルーブリックも取り入れております。実験スキルに関してもルーブリック評価を今後取り入れていきます。今、一部の高専で行ってまして、今後全国展開していく予定になっています。これも先ほど言いましたように、教員の助言を受けながら、あらかじめ用意された手順書通りにできるというのがレベル 1。それから、指導を受けなくても、指導書を読みながら実験ができればレベル 2 という形でレベルが設定されています。

高専全体の教育の質保証システムは、今説明したモデル・コア・カリキュラムというのを核として PDCA のサイクルを回す。高専全体でも回すのですが、下の方に、A 高専、B 高専となっていますが、それぞれぞれの高専でも PDCA を回す。各高専が PDCA を回すとともに、国立高専全体でも PDCA を回して、組織として全体で底上げを図っていく取り組みをしております。この後、詳しく説明していきます。

ICT の活用

ちょっと違う話になりますが、高専の特徴的なところは、ICT 活用教育に力を入れていることです。高専卒業生は情報の能力を持っているという社会的な評価もありますので、この辺には力を入れているわけです。高専全体として、現在「Office365」を活用しています。いくつかの使い方をこの後、説明します。LMS と

しては、高専全体で「Blackboard」を採用して、これを活用しています。

それから右側ですが、いろいろな共通のアプリの開発をしています。一部は動き出しています。今日の話でも、ソフトウェアの開発にお金が掛かるということがありましたが、高専ごとに開発する余裕はありませんので、高専全体でいろいろなシステムを開発しているところです。

まず、「Office365」ですが、お使いの学校も多いと思いますけれども、当然「Word」、「Excel」、「PowerPoint」が使えるとか、メールが使えるというのが当たり前ですが、本校では緊急連絡網としても活用していますし、グループウェアとしても活用しています。右にグループウェアのキャプチャ画面がありますけれども、この中で一番上の緊急連絡というところに書き込みをすると、自動的に全教職員、全学生にメールが配信されるようにプログラムが組まれています。

昨年、地震の後にメールを使って生存確認をしたところ、30分間で約半数からすぐに返事がありまして、その後も少しずつ返事が来ました。一人一人電話をかけていけば大変な時間と手間がかかりますが、こういうものを今後活用することでいろいろ便利だなというのを実感したところです。この「Office365」ではアンケートを取ったり、クリッカーとして用いたりということもできますし、授業アンケート等にも活用しています。

続きまして、右側の共通アプリについてお話をしていこうと思います。いろいろなアプリ開発を今進めています。最初に考え方を説明します。これまでは左側にあるようにA高専、B高専というそれぞれの高専が、例えば教務システムであったりですとか、シラバスのシステムであったりですとかというものをそれぞれ持っていました。それぞれのアプリケーションは独立していて、それぞれデータを持っていました。これを右側のようにまるきり考え方を変えました。

1つのデータベース、高専オープン・ソース・データベース、略してKOREDAと呼んでいます。1つのデータベース、クラウド上にあるこのデータベースにすべてのデータが蓄積されていきます。この周辺にいろいろなアプリケーションを配置していきますが、それぞれのアプリケーションは共通データベースからデータを持ってきて動くことになります。今までは、例えば学生情報であれば、いろいろなシステムに全部それぞれ学生情報を持っていたと思いますが、今開発しているアプリケーションでは、アプリケーション自体はデータを持ちません。KOREDAというデータベースにアクセスしていろいろな情報を持ってくるということになります。

例えば、左上にCBT(Computer Based Testing)と書いてあるのですが、CBTのシステムはテストを行うだけのシステムです。試験の結果はKOREDAというデータベースに入ります。それを別のポートフォリオのシステムで分かりやすく表示をすることもできます。1つのデータベースをいろいろなアプリケーションが使っていきますので、そのようなこともできる。そういうシステムを開発しております。

アセスメントを考える上での課題としては、まずコストの問題があるかと思います。今まで説明しましたように各高専が開発するのではなくて、高専機構全体で開発していくということでコストの問題を解決していこうと考えています。それから、教員負担もそうですけれども、学生負担というところでは、例えば同じことを別の部署からアンケート調査があり、これこの前も回答したよなというアンケートを何回も聞かれる場合があるかと思います。データベースは1つなので、質問をする部署が違ってもすでにデータベースに入っていればそこからデータを持ってくればいいだけです。何度も同じことを学生に聞く必要がないということが今後できるようになってきます。

あとは、1 つのデータベースに全部の学校のデータが入りますので、高専間の比較もしやすい。客観的な評価も今後できるようになるので、いろいろなメリットがあることになります。これは、まだできていませんけれども、今後こういうことを考えています。ある評価項目に従って、例えばレーダーチャートを作るとしたときに学校ごとにそれを比較する。うちの学校はここが特色だというのが分かるようになります。先ほどまで説明していた共通データベースを利用することによって、こういうことが今後できるようになるだろうと考えています。

新しいシステム

システムのうち、すでに動き出しているものをご紹介します。「Web シラバス」はすでに動き出していて、高専と「Web シラバス」で検索をするとすぐに出てきますので、皆さんにもご覧いただけたと思います。最初に学校を選択すると科目が表示されて、科目を選択するとシラバスが表示されるようになっております。すべての高専が同じ書式で全科目についてシラバスが作成されていて、このシラバスをもとに授業が行われています。下の方に評価の仕方とかが書いてありますが、その評価の仕方に従って評価をするところまでは、すでに全高専で実施しているところです。この「Web シラバス」は、先ほど説明したモデル・コア・カリキュラムに完全準拠していきまして、その MCC(Model Core Curriculum)とのひも付けもされていますので、この到達目標はどの科目で教えているのかということも一目で分かるようなシステムになっています。

続きまして、CBT のシステムです。CBT のシステムについても到達目標とのひも付けがされて問題が作られていますので、MCC に準拠しています。目的としては、試験ですので当然学生個々の点数が出てきますので、学生個々の学修効果を検証することもできます。それ以上に授業やカリキュラム改善につなげていくことも必要になってくるというか、そのためにも行います。例えば、学校全体あるいはクラスで分析をしたときに、この到達目標はずいぶん達成できてないよねというのが分かれば、翌年度はその部分をカリキュラムでちょっと時間をかけるようにするとか、そういうこともできるようになると考えています。

この CBT ですが、問題を作るのは全国の高専で分担します。例えば、機械工学の担当教員は全国に約 300 人おりますし、数学を担当する教員も各高専に 4~5 名、全国には 200 名近くいますので、1 人の教員が 1 題、2 題作れば毎年数百題の問題がどんどんできていくことになりますので、みんなで協力して問題を作り、それを全国の高専で使うという考え方です。このように問題を作っていきますが、四択に限定したシステムになっています。試験の結果、それぞれの問題については CTT(Classical Test Theory)分析ですとか、IRT(Item Response Theory)分析という統計分析をかけまして、それぞれの問題が適切かどうかということも評価をしています。

これは 1 例です。左側に下と書いていますが、左右の軸は学生の能力、100 点満点の点数の低い学生が左側、優秀な学生が右側になり、それぞれのグラフは一題一題の問題を見えています。ですので、左側のグラフでいうと、左側は成績の低い学生でも 60%解けている。成績が高い学生でいうと、ほぼ 100%解けているような易しい問題になります。選択肢ごとにグラフを作っていますので、どの選択肢が誤答として利いているかとか、そういうことも分かります。

左の問題であれば、実際は四択なんですけど、事実上二択の問題になってしまっていますので、残りの 2 つの選択肢を改善して翌年試験をするということもできます。右側が難しめの問題です。このように各問題

の分析をかけています。それによって1回実施した問題をいい問題なのか、悪い問題なのかということを分析して、翌年使うか使わないかを決めたりですとか、そういうこともやっています。

続きまして教材共有システムです。これもMCCに完全対応していきまして、授業で使うスライド1枚から試験問題など、いろいろなものをこのシステムに保存することができるようになっています。MCCとひも付けて保存します。全国の高専でいろいろな先生が授業で使っているものをアップロードしていけば、必要なものが見つかるでしょうという考え方になっています。今年から動き出したばかりです。

今日はアセスメントポリシーが話題になっていましたので、苫小牧高専では、まだアセスメント・ポリシーは制定していませんが、おそらくこんな感じになるのかなというのを昨日作ってきました。教育課程におけるアセスメント・ポリシーであれば、最初の黒い部分は一般的なこんな感じでどこの大学も設定していたりするのかなと思うんですけども、高専の場合には2番目も必要になるのかなと考えています。MCCの対応状況から教育課程の適正性について客観的に、ほかの高専との比較もできますので、客観的に測定評価できることになります。

科目ごとのアセスメント・ポリシーは、最初の黒い部分というのが一般的なポリシーかと思いますが、CBTの結果を踏まえて達成状況を測定評価できるというのが、高専の特徴になろうかなと考えています。

苫小牧高専の特色

ここからはモデルの部分、苫小牧高専の特色の部分について若干紹介をして、今日のお話を終わろうと思います。苫小牧高専は4年前に1学科に改組しています。1年生は混合学級で2年生になるときに専門分野に分かれるというような、そういう構成に変わっています。1年生といっても中学校を卒業したばかりの、高校1年生と同じ年代なわけですけども、この1年生はまだ専門分野が決まっていませんので、ここで工学の基礎をたたき込まなければいけない。その辺の話をちょっとこの後、ご紹介したいと思います。

次世代教育という名前を付けましたが、次世代教育を5年間かけて行っています。1から3年生の部分、高校生に相当する部分には創造工学I, II, IIIという科目を設けて、PBL等を行っています。4～5年生の部分では、これは一部の学生ですが、フロンティア研究という専門分野横断の社会実装型の研究を行うようなこともしています。それから5年間で卒業した後、専攻科がありますが、その部分では地域の企業と共同教育によるPBLを行っています。また、1年生つまり高校1年生の年代から、グループワークやプレゼンテーションを取り入れまして、コミュニケーション能力、プレゼン能力を徐々に鍛えるということで、学会発表の形式での発表も1年生から始めています。

それから、自分の専門分野は決まっていますが、すべての専門分野の実験や演習を少しずつやりながら自分の適性をみつけるということも行っています。ものづくりの基礎の部分ですが、Dysonのサイクロン掃除機を分解があります。最近の子供は物を分解した経験というのがない子がたくさんいまして、こういう取り組みが必要だと考えています。それから、固体燃料ロケットをグループで作って打ち上げるなど、ものづくりに関するものも行っています。キャリアデザイン教育にも力を入れておりまして、地元の企業のエンジニアの方20～30人来ていただいています。グループごとにエンジニアの方とお話をして、自分の将来を何となくこういうふうになるのかなというのを1年生のうちから少しずつ動機付けをしているところでございます。

これが1年生の創造工学Iの科目のアンケート結果です。先ほど満足度が重要だという話をちらっと話

したと思いますけれども、それぞれの項目について、役に立ったかというアンケートを聞きましたところ、4, 3, 2, 1 の 4 段階評価ですが、とても役に立ったという 4, 役に立ったという 3, この 4 と 3 が 90%を超えています。あるいはキャリア教育の部分は 80%程度になっていますけれども、「Word」「Excel」「PowerPoint」、あるいはいろいろな実験系の部分に関しては、約 9 割の満足度になっております。

最後に、専攻科で行っている共同教育 PBL(Project-Based Learning)についてお話をします。企業からテーマを出してもらいまして、企業のエンジニアと一緒に課題解決に取り組むという授業を行っています。昨年の例ですと、例えば小樽なのですが、銅の合金を作っている会社がありまして、そこで銅を使った何かの製品開発ができないかということで一緒に製品開発をやったりとか、そういうことをやって、最後に発表会をするというようなことも行っています。こういう取り組みを通じてジェネリックスキルも養成し、質保証を高めながら、今現在教育をやっているというご紹介でした。以上で終わります。(拍手)

国立高専における 教育の質保証の取組み

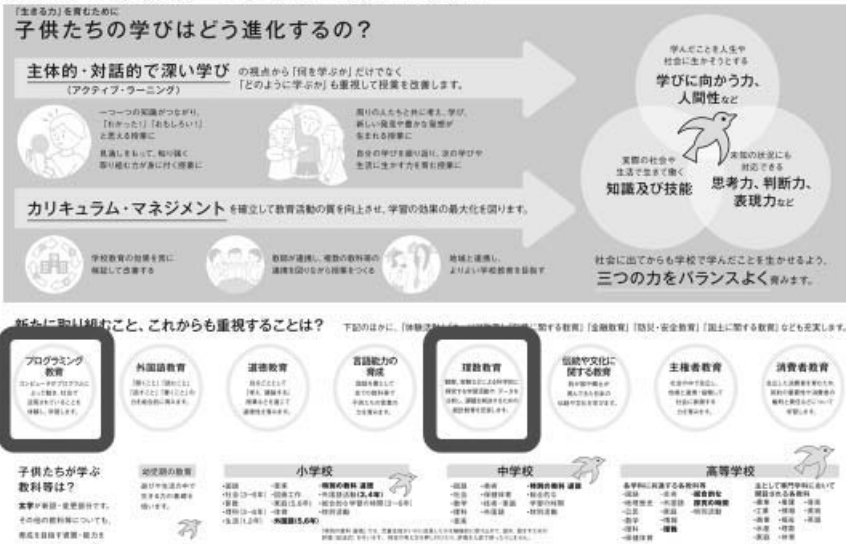
苫小牧工業高等専門学校
創造工学科
村本 充

目次

- 初等中等教育の変化
- 高専教育の変化
- 国立高専モデルコアカリキュラム(MCC)
- 国立高専でのICT活用の現状
- 質保証のためのCBT
- 苫小牧高専における初年次からの分野横断能力育成

初等中等教育の変化

「学習指導要領を紹介するリーフレット」平成31年1月25日



初等中等教育の変化

「学習指導要領を紹介するリーフレット」平成31年1月25日

これから重視すること



高等教育の変化

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)【概要】

平成30年11月26日
中央教育審議会

I. 2040年の展望と高等教育が目指すべき姿 … 学習者本位の教育への転換 …

● 必要とされる人材像と高等教育が目指すべき姿

- 予測不可能な時代を生きる人材像
 - 普遍的な知識・技能と汎用的技能を文脈横断的に身に付けていく
 - 時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、積極的思慮力を持って社会を批判的に鑑賞する人材
- 学習者本位の教育への転換
 - 「何を学ぶ、誰に教えることができるのか」という個人の学習意欲の可視化(個々の教育ニーズや研究志向に合った学習者による教育への参加)
 - 学習者が生涯学び続けるための多様な柔軟な仕組みと柔軟性

● 高等教育と社会の関係

- 「知識の共通基盤」
 - 教育と研究を通じて、新たな社会・経済システムを構築、成果を還元
- 研究力の強化
 - 多様な卓越した「知」はイノベーションの創出や科学技術の発展にも寄与
- 産業界との協力・連携
 - 雇用者の能力や働き方と高等教育が連携する学びのマッチング
- 地域への貢献
 - 「個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会」に貢献

II. 教育研究体制 … 多様性と柔軟性の確保 …

● 多様な学生

- 10歳で入学する日本人を主な対象として想定する従来のモデルから脱却し、社会人や留学生を積極的に受け入れる体制整備
- ツールキット整備、留学支援の推進

● 多様な教員

- 実務家、逸才、志士、外国籍などの様々な人材を雇用できる仕組みの在り方模索
- 教員が不断に多様な教育研究活動を行うための仕組みや環境整備

● 多様な柔軟な教育プログラム

- 文理横断・学際的協力を促す教育、時代の変化に応じた迅速かつ柔軟なプログラム編成
- 学生プログラムを中心とした大学制度、複数の大学等からの「特別授業」の共有

● 多様性を受け止める柔軟なガバナンス等

- 各大学のマネジメント機能や経営力を強化し、大学等の連携・統合を円滑に進められる仕組みの検討
- 国立大学の法人化、私立大学の法人化、大学の合併・統合

● 大学の多様な「学び」の強化

- 人材養成の観点から各機関の「強み」や「特色」をより明確化し、更に伸ばす

III. 教育の質の保証と情報公表 … 「学び」の質保証の再構築 …

- 全学的な教学マネジメントの確立
 - 各大学の教学面での改善・改革に資する取組に係る指針の作成
- 学修成果の可視化と情報公表の促進
 - 単位や学位の取得状況、学生の成長実感・満足度、学修に対する意欲等の情報
 - 教育成果や大学教育の質に関する情報の把握・公表の義務付け
 - 全国的な学生調査や大学調査により整理・比較・一覧化

IV. 18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置 … あらゆる世代が学ぶ「知」の基盤 …

- 高等教育機関への進学希望とそれを超えた現実
 - 将来の社会変化を見据えて、社会人、留学生を含めた「多様な価値観が集まるキャンパス」の実現
 - 学生の情動性を伸ばす教育改革のための適宜な環境を構築し、教育の質を確保できない機関へ厳しい評価
- 地域における高等教育
 - 複数の高等教育機関と地方公共団体、産業界が各地域における将来の課題や具体的な連携・交流等の方策について協議する体制として「地域連携プラットフォーム」を構築
- 国公私の役割
 - 歴史的経緯と、再構築された役割を踏まえ、地域における高等教育の在り方を再構築し、高等教育の発展に国は私全体で取り組む
 - 国立大学の果たす役割と必要とされる分野・規模に照らす一定の方向性を検討

V. 高等教育を支える投資 … コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充 …

- 国力の源である高等教育には、引き続き、公的支援の充実は必要
- 社会のあらゆるセクターが経済的効果を生むに貢献を遂げることを踏まえ、民間からの投資や社会からの有償等の支援も重要(取組の多様化)
- 教育・研究コストの可視化
- 高等教育全体の社会的・経済的効果を生む社会へ還元
- 公的支援も含めた社会の食糧への確保を促進
- 必要な投資を得られる環境の確保

高等教育の変化

III. 教育の質の保証と情報公表 … 「学び」の質保証の再構築 …

- 全学的な教学マネジメントの確立
 - 各大学の教学面での改善・改革に資する取組に係る指針の作成
- 学修成果の可視化と情報公表の促進
 - 単位や学位の取得状況、学生の成長実感・満足度、学修に対する意欲等の情報
 - 教育成果や大学教育の質に関する情報の把握・公表の義務付け
 - 全国的な学生調査や大学調査により整理・比較・一覧化

- 設置基準の見直し
 - (定員管理、教育手法、施設設備等について、時代の変化や情報技術、教育研究の進展等を踏まえた抜本的な見直し)
 - 認証評価制度の充実
 - (法令違反等に対する厳格な対応)
- 教育の質保証システムの確立

高等教育の変化

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)

(高等専門学校)

高等専門学校は、中学校卒業後の15歳の学生を受け入れ、5年一貫の実践的な技術者教育を行う高等教育機関として、実践的・創造的な技術者の養成に大きく貢献してきた。

今後は、新たな産業を牽引する人材育成の強化、大学との連携など高専教育の高度化、日本型高等専門学校制度の海外展開と一体的に我が国の高専教育の国際化を進めていくことにより、高等専門学校の教育の質を高めていくことが重要である。

高専配置

国立高専 ⇒ 51校

公立高専 ⇒ 3校

私立高専 ⇒ 3校

【高専合計 ⇒ 57校】



国立高専の現状

- 昭和36年 高等専門学校制度創設
- 平成16年 (独) 国立高等専門学校機構発足
- ・ 学校数 51校 (55キャンパス)
- ・ 在学生数 本科：48,509人
専攻科：2,995人 (平成30年5月1日現在)
- ・ 教職員数 6,141人 (平成30年5月1日現在)
(専門：博士・技術士9割、一般科：修士以上9割、企業経験：3割)

重点戦略

3つの重点戦略

1 教育の質保証

- ① MCCのPDCAサイクルの定着
- ② 学生指導の充実 (専門的人材の活用)

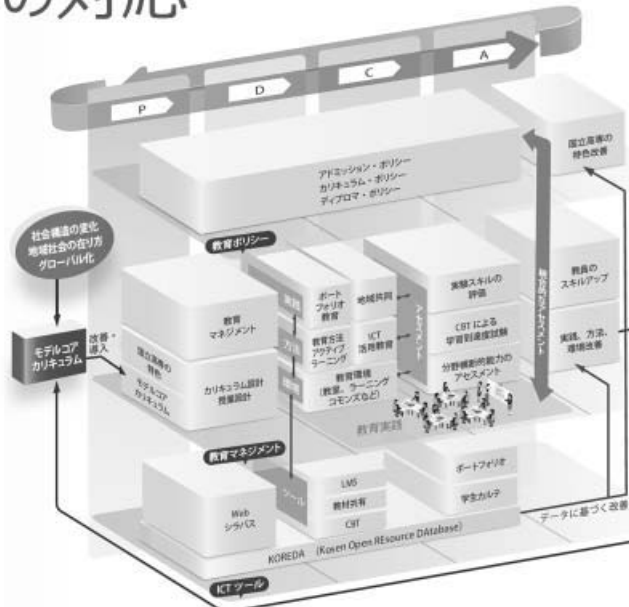
2 特色形成

- ① 強み・特色の形成と伸張
- ② 地域密着型産学連携・社会実装の機能強化

3 国際化・情報化

- ① 高専の海外展開とブランド化 (認証制度等)
- ② グローバル人材育成
- ③ 15歳からの情報教育

国立高専の対応



国立高専の対応

到達目標 : P	授 業 : D	到達度評価 : C
■ 科目設計 ■ モデルコアカリキュラム ■ Webシラバス ■ 到達目標 ■ 評価項目 ■ 到達度基準 (ルーブリック)	■ ICT活用 ■ LMS活用 ■ AL ■ PBL ■ グループワーク ■ ディスカッション	■ 筆記試験 ■ レポート ■ CBT ■ プレゼンテーション ■ ポートフォリオ ■ ルーブリック評価

モデルコアカリキュラム（MCC）

国立高専の教育の質を保証

コア

国立高専のカリキュラムに
おけるミニмумスタンダード
(各校カリの約6割)



モデル

人間力の能力基準



各校の地域性・特色
に合わせた科目

モデルコアカリキュラム（MCC）

コア＝知識・能力

基礎的能力
(分野共通)

学科によらず共通で身につけるべき能力を、「数学」「自然科学」「人文・社会科学」「工学基礎」の4つに分類。科目としての「数学」や「国語」だけでなく、高等教育に相応しいリベラルアーツとして、多彩なアプローチで新しい時代の基礎的能力を磨いていきます。



専門的能力
(分野別)

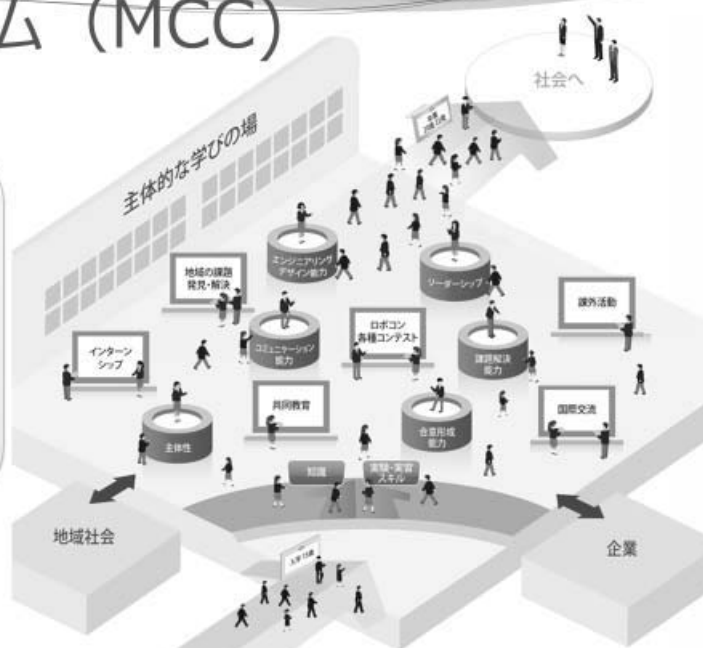
機械系や材料系、電気・電子系、情報系といった10種の「専門工学知識」、調査・研究において必須となる「実験・実習能力」に到達目標を設定。座学だけでなく、豊富な実践を通じて社会で通用する力を習得します。

モデルコアカリキュラム (MCC)

モデル＝人間力

分野横断能力

リーダーシップ、コミュニケーション能力、エンジニアリングデザイン能力など、学生が現代社会を生き抜き、生涯において力強く成長していく過程において必要な人間力の能力基準。



モデルコアカリキュラム (MCC)

学習内容	到達目標
静電界	電荷及びクーロンの法則を説明でき、点電荷に働く力等を計算できる。
	電界、電位、電気力線、電束を説明でき、これらを用いた計算ができる。
	ガウスの法則を説明でき、電界の計算に用いることができる。
導体と誘電体	導体の性質を説明でき、導体表面の電荷密度や電界などを計算できる。
	誘電体と分極及び電束密度を説明できる。
静電容量	静電容量を説明でき、平行平板コンデンサ等の静電容量を計算できる。
	コンデンサの直列接続、並列接続を説明し、その合成静電容量を計算できる。
	静電エネルギーを説明できる。
電流と磁界	電流が作る磁界をビオ・サバールの法則を用いて計算できる。
	電流が作る磁界をアンペールの法則を用いて計算できる。
	磁界中の電流に作用する力を説明できる。
	ローレンツ力を説明できる。
	磁性体と磁化及び磁束密度を説明できる。

モデルコアカリキュラム (MCC)

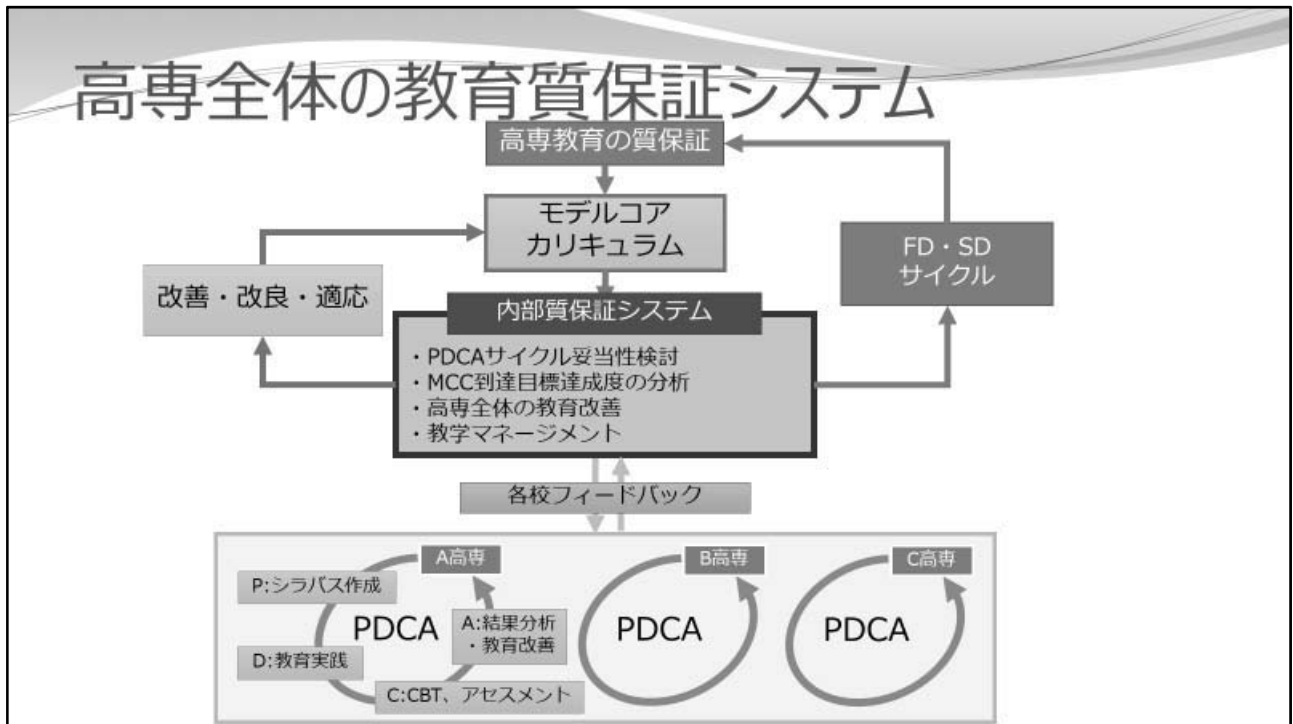
技術者が備えるべき能力		到達レベル					
		1 知識・記憶 レベル	2 理解 レベル	3 適用 レベル	4 分析 レベル	5 評価 レベル	6 創造 レベル
コア	技術者が分野共通で備えるべき基礎的能力						
	I 数学	K	K	K	A	S	S
	II 自然科学	K	K	K	A	S	S
	III 人文・社会科学	K	K	K	A	S	S
	IV 工学基礎	K	K	K	A	S	S
	技術者が備えるべき分野別の専門能力						
モデル	V 分野別の専門工学	K	K	K	K	A	S
	VI 分野別の工学実験・実習能力	K	K	K	K	A	S
	技術者が備えるべき分野横断的能力						
	VII 汎用的能力	K	K	K	A	S	S
	VIII 態度・志向性（人間力）	K	K	K	A	S	S
	IX 総合的な学習経験と創造的思考力	K	K	K	A	S	S

ルーブリック（実験スキル）

実験共通
ルーブリック

実験共通
スキルシート

	Lv1	Lv2	Lv3	Lv4	Lv5	Lv6
対象	工学実験・実習			卒業研究・PBL	特別研究	教員
計画と実施	教員等の助言を受けながら、予め用意された手順書に基づいて実験を実施できる	予め用意された手順書に基づいて、自ら実験を実施できる	基本的な実験について自ら実験を実施できる	問題解決のために必要な実験に気づき、実験を実施できる	問題解決に適切な実験方法を選択・実施できる	必要な実験計画や分析結果の妥当性を評価して実験計画等を再構築できる
機器・器具の準備と操作	指示された実験機器・器具を教員やTAの指示に従って正しく使用できる	指示された実験機器・器具を操作マニュアルに従って正しく使用できる	必要な実験機器・器具を準備し、基本的な操作ができる	機能や適用範囲に応じて実験機器・器具を自ら選択し、正しく操作ができる	←	
結果・分析・考察	予め用意された形式で結果のまとめ・分析・考察ができる	指示に従って結果をまとめ・分析・考察ができる	指示に従って結果をまとめ、自ら分析・考察ができる	得られた結果から論理的に分析・考察ができる	複数の側面から論理的に分析・考察ができる	考察の妥当性を評価できる



Office365

緊急連絡網

スマホ同期 or メール転送
地震後の確認: 30分で約半数

グループウェア

Office365

各種アンケート

クリッカー

ICT活用の状況

Office365 の活用

- 緊急連絡網（メール）
- グループウェア（Sharepoint）
- クリッカー（Forms）
- グループワーク（Teams）
- 授業配信（Skype・Teams）

Blackboard (LMS)の活用

- 資料提供
- 反転授業
- 小テスト
- 課題収集

全国高専共通 アプリの開発

- Webシラバス
- 教務・入試システム
- 教材共有システム
- CBTシステム
- eポートフォリオ
- 高専ポートレート

KOREDA (Kosen Open Resource Database)

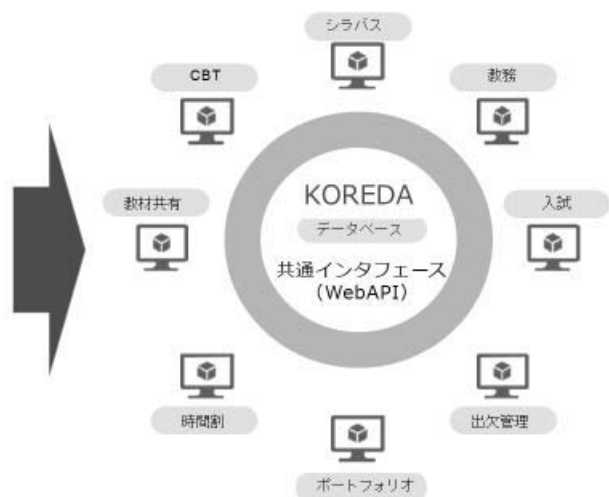
A 高専



B 高専



連携なし



高専共通ツールと教学IR

アセスメントを考える上での課題

- コスト
→全高専共通化
- 学生負担
→共通DB
- 客観性
→高専間比較

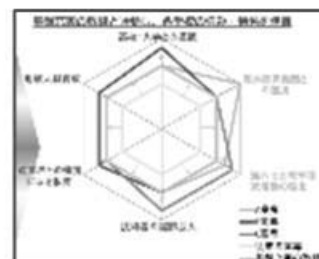
高専ポートレート（学校経営の可視化）

課題

社会に出すべき情報（高専の特色）の整理が行われていない。

方向性

学校経営データの整理とシステムによる効率化により、学校経営の可視化とそれを活用した変化に強い組織へ





CBT

MCC対応

目的

① 学生の学習効果の検証

MCCごとの学生個人の弱点を特定し、自律的に弱点補強

② 授業・カリキュラム改善の指針

学年／クラスにおける強み弱みの傾向をMCCの到達目標に基づいて把握し、授業改善やカリキュラム改善に活用

到達度
重視教育

教員が「何を教えたか？」



学生が「何を学んだか？」

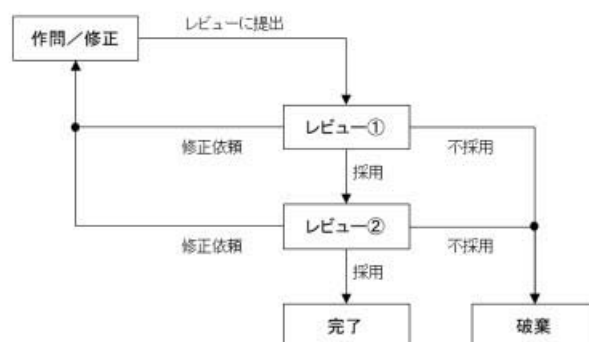
CBT

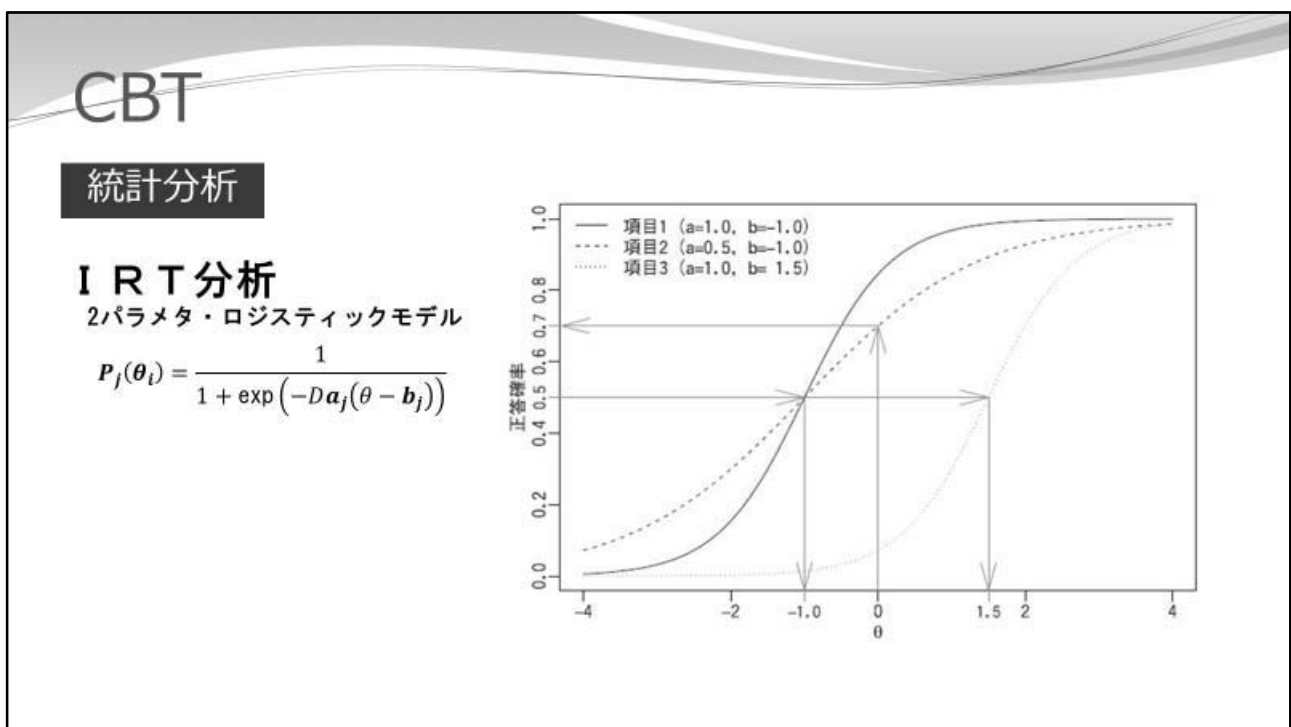
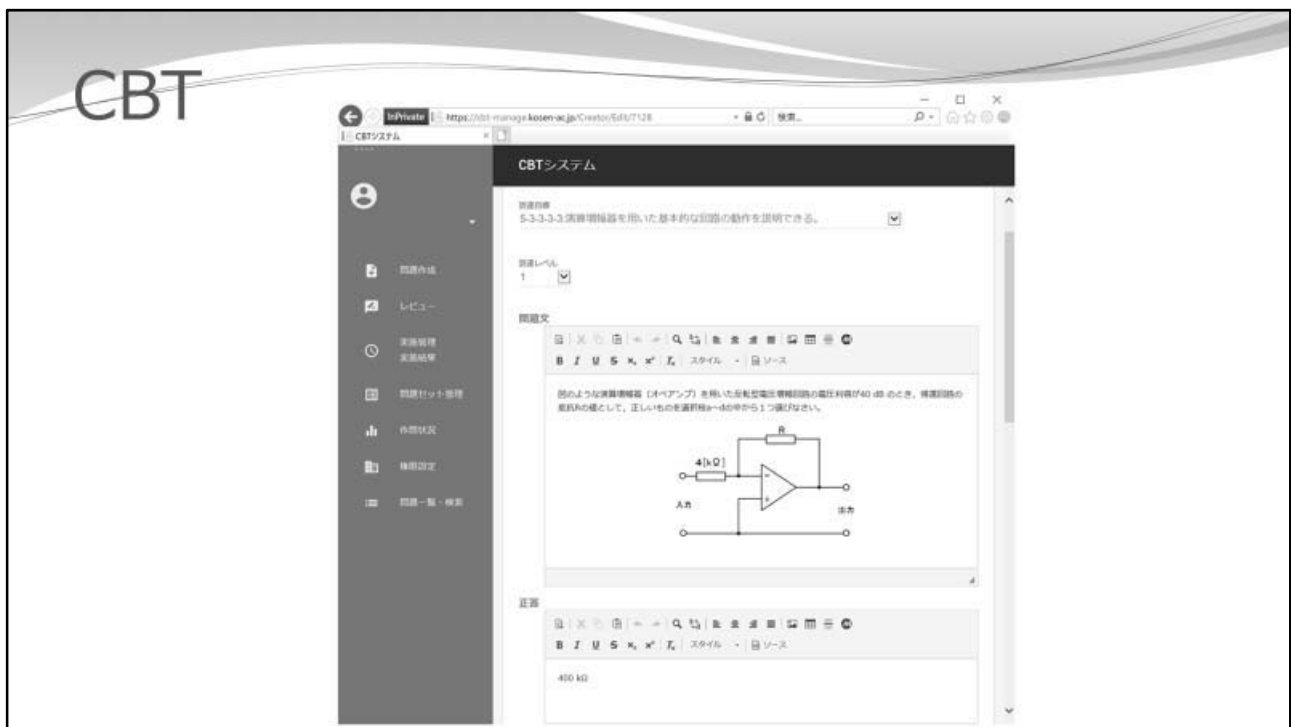
作問とレビュー

全高専で分担

例1：機械工学担当教員は全国に約300人

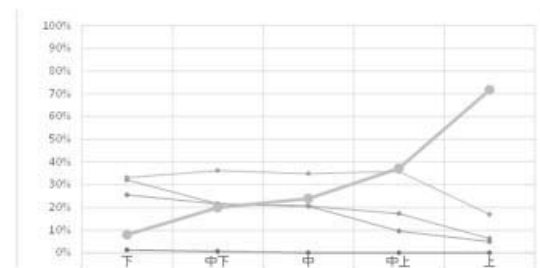
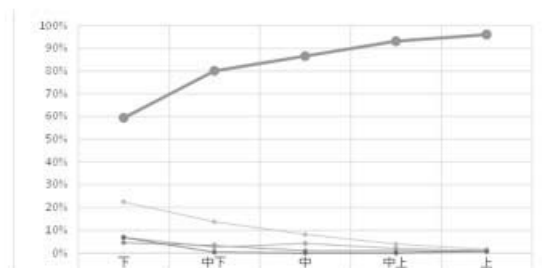
例2：数学担当教員は全国に約200人





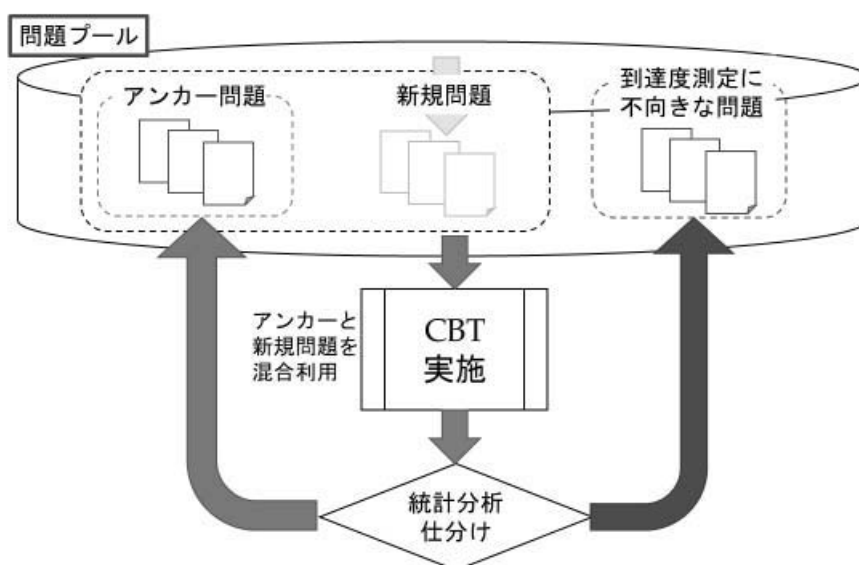
CBT

統計分析



CBT

統計分析





アセスメントポリシー（案）

教育課程におけるアセスメント・ポリシー

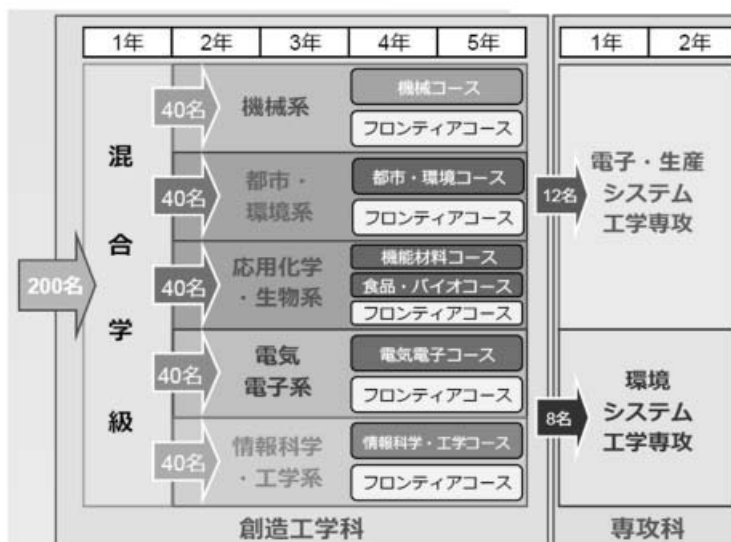
- 所定の進級要件・卒業要件達成状況等の指標から教育課程全体を通した学修成果の達成状況を測定・評価します。
- MCC対応状況等から教育課程の適正性について客観的に測定・評価します。

科目ごとのアセスメント・ポリシー

- シラバスに明記された授業等科目の学修目標に対する評価方法に従って成績評価を実施します。
- CBTの結果をふまえ、科目ごとの学修成果の達成状況を測定・評価します。

苫小牧高専の現状

創造工学科
1 学科
5 系
7 コース



次世代教育の重点

1～3年
(高校生相当)

「創造工学Ⅰ～Ⅲ」で
分野横断型PBL型教育や
キャリア教育を実施

4～5年
(学部1～2年相当)

「フロンティア研究」で
系混合グループによる
社会課題解決型で実学的
な研究を実施

専攻科1～2年
(学部3～4年相当)

地域企業との共同による
分野横断型PBL型授業の
実施

創造工学 I （1 年必修）

グループワークと プレゼン

- その都度異なるグループ編成！
 - 幅広い交友関係を築く
- 討論
 - チームワーク力を鍛える（自分の役割を果たす）
 - コミュニケーション力を鍛える
- 発表
 - プレゼン能力を鍛える



創造工学 I （1 年必修）

実験と演習



創造工学 I（1年必修）

実験と演習



ダイソンサイクロン掃除機の分解



モデルロケット打上げ

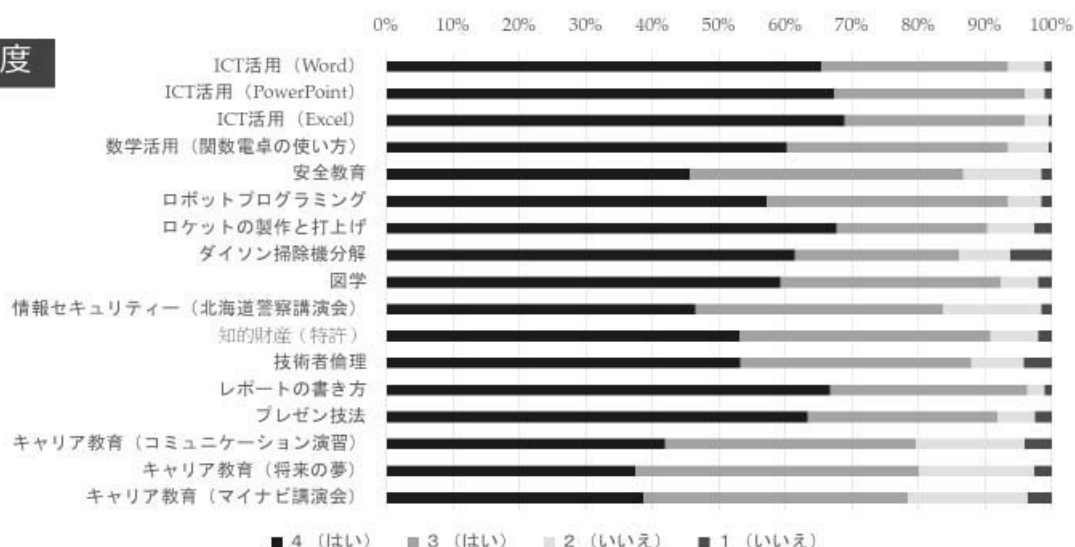
創造工学 I（1年必修）

キャリアデザイン



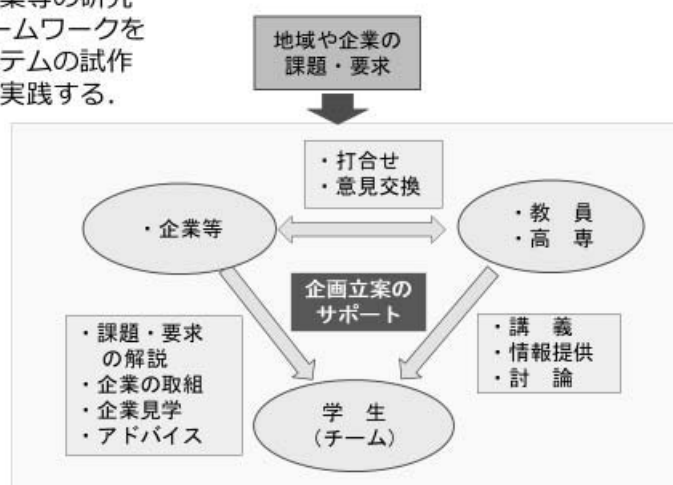
創造工学 I（1年生必修）

満足度



共同教育 P B L（4年、専攻科）

企業等から提案された課題において、企業等の研究者・技術者のサポートを受けながら、チームワークを発揮して課題の把握、解決の立案、システムの試作などに取り組み、課題解決のプロセスを実践する。



共同教育PBL（専攻科1年必修）

＜テーマ(例)＞

- ・地理空間情報の利活用とその普及
- ・銅合金を用いたBtoC商品の開発



3.4 アセスメント・チェックリストの利用

北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸

細川： 村本先生，どうもありがとうございました。それでは，続きまして私が発表させていただきます。テーマは，「アセスメント・チェックリストの利用」です。北大の場合は「e ポートフォリオ」は一部でしか導入されておりませんので，大学全体でこれまでやったのはアセスメント・ポリシーの設定です。それについての背景とか考え方。それからアセスメント・チェックリストの話。これに関して IR をどう利用しているか。それから何が求められているのか。具体的な北大の例を申し上げまして，まとめにしたいと考えております。

アセスメント・ポリシーが PDCA サイクルの C，チェックのところになりまして，アドミッション・ポリシー，それからカリキュラムポリシー，ディプロマポリシーと設定してまいりましたが，このアセスメント・ポリシーを入れて PDCA サイクルが完成することになりまして，このサイクルの完成がアセスメント・ポリシーの目標ということになります。ただし，いろいろな学部の先生方とお話をしたんですが，最終的な目標はそれぞれのポリシーの設定ではなくて，学生の学習環境の向上を常に図る仕組みをつくるということにあります。

もう 1 つ注意しておかないといけないのは，ディプロマポリシーのうち知識や技術というのは従来の各科目の成績でチェックできますが，例えばリーダーシップでありますとかコミュニケーション能力ですとか，いわゆるコンピテンシーに相当するものを判定するのは，これでは難しい。ということで，共通テストを使うという話をいたします。共通テストの大きな利点はベンチマークになるということです。アンケート調査ではいろいろな測定ができるんですが，それがどれくらいの意味を持っているかというのは比較しないとできないので，ベンチマークがあることが非常に重要になってきます。

そういうことで，学生を対象とした全国共通アンケートを利用するという話をいたします。背景ですが，これは斉藤先生が話されていましたが，平成 26 年の中教審でアセスメント・ポリシーの話が出てきまして，中教審が求めることが，このあたりで分かってきました。もうちょっと前をたどると，平成 24 年にアセスメント・ポリシーの定義がありまして，その後平成 29 年には「教育の内部質保証に関するガイドライン」という中で，質保証とは何かというと，大学の教育研究活動の質や学生の学修成果の水準を自ら継続的に保証するという話になっております。

我々が一番気にしないといけないのは，この認証評価で，平成 30 年から実施される認証評価におきまして，内部質保証に関することについて重点的に評価を行うという具合に定められております。各大学で次の認証評価はいろいろな時期になっていると思いますが，そこで授業の質の評価基準が要請される。アセスメント・ポリシーがその 1 つの対応です。教育の質保証ですが，どうすればいいかというと，現状の把握と評価，これを改善方法の検討に持ち込んで改善する。こういう PDCA サイクル，これを回せばいい。評価の対象とか，項目とか，目的とか，実施者，改善方法をどうすればいいのかというのをその前に考えておかないといけない。

教育の質保証を大きく分類すると，教育の成果，それから教育の方法，それから学修環境，こういうような教育内容あるいはその成果を評価していかないといけない。この 3 つを評価する方法で，手法がこういう具合にあります。その目的は教育についていうと，ディプロマポリシーと比較して十分やられているかどうか。

うまくいってなければ、何かカリキュラム改善をした方がいい。教育方法は適切かどうか、それから学修環境は良好かどうか。こういうものを調べて、それぞれ改善に結び付ける必要があります。一方で誰を調べればいいかというと、在校生、卒業生、あるいは卒業生を受け入れていただいている企業になります。

どうやって評価するかという中には、何と評価すればいいかという話もありまして、可能なものを挙げていきますと、学内の学部間、学内の学年間、去年と今年の比較、それから学外の大学との比較、あるいは大きな話で国際比較ということが考えられます。ここで色を変えておりますのは、こちらの黒の方は従来からある、どこの大学でもやっているようなアンケートです。こちらの赤色で示している方が、北大ですとここ10年ぐらい教学IRというアクティビティーの中で行われてきた調査です。学修状況とか卒業生調査、企業調査等々です。こういう具合に分類されます。

北大の現在の教学評価体制がどうなっているかでございますが、2009年からIRネットワーク推進室を設けて、IRの仕事をしていました。2015年に総長の下に総合IR室が設置されて、こちらの組織もこの中に入ることになりました。執行部の下におかれまして仕事をするわけですが、ここで行われた仕事はこの学部、大学院に返されて、これによってPDCAサイクルを回そうということです。

IRの歴史

ここでちょっと時間をいただきまして、アメリカと日本のIRがどうなっているかということを簡単に紹介させていただきます。IR(Institutional Research)でございますが、広い意味では大学の教育、研究、管理、運営です。すべての分析を意味しますが、何を目指しているかというと、これは30年前のスーブという人の論文から出してきましたが、組織の企画、政策策定、意思決定を支援するような情報を提供することになります。ここでお話しするのは教育関連のIRですので、教学IRということで紹介させていただきます。

組織的なIR、組織的というのは1校だけではなくて複数の大学で同一のアンケートを用いて調査をする動きですが、アメリカでは1996年からあります。1つはUCLAのHigher Education Research Instituteが行っていますシルブと呼ばれる調査。もう1つは、これは最近できたのですが、インディアナ州立大学が20年ぐらい前に開始した、ネッシーと発音しますが、こういう調査。アメリカではこういう2つの大きな調査があります。アメリカの大学総数は今4000校ぐらいと言われていますが、そのうちの700~800校がこういう活動に加わっているわけです。

一方、日本はどうなっているかというと、まず同志社大学の山田先生を中心にした研究グループが2004年ごろからシルブをベースにした日本語版の学生の学習状況調査のアンケートを開始します。北大も、実はこのあたりで試験的な運用にかかわったのですが、その縁がありまして、2009年から文科省の大学間連携のプロジェクト経費をいただきました。最初は3年間に4大学で。その後8大学で5年間事業費をいただきまして、日本版シルブを実施してまいりました。現在では、この仕事は独立した法人であります大学IRコンソーシアムが中心になって実施されております。北大も、先ほどご紹介がありました帯広畜産大学も入っておりますが、現在全国で60大学、1年生と3年生、4年生を合わせて毎年8万名が参加する、かなり規模の大きな調査になっております。掛かる費用ですが、アメリカの場合はこういう計算で、数千ドルから、ちょっと多い場合は数万ドルになります。日本の場合は、大学IRコンソーシアムが、各大学から年会費30万円をいただいて実施しております。

詳細は省きますが、だいたい 100 項目ぐらいのデータをここから得ることができます。これはそのうちの 1 つですが、北大にとって有利な情報なんです、それをちょっと紹介いたします。自習時間です。ベンチマークとしてどう役に立つかというと、これは 60 大学じゃなくて 8 大学のときのデータですが、自習時間の 1 週間の平均が 4.5 時間。北大生は 8.4 時間ですので、全国平均よりも結構長い時間、自習をしてくれていることが分かります。こちらは参考までに、IR の方ではなくて授業評価アンケートから 1 科目当たりの自習時間を、年代を追って抜き出したものです。平成 26 年で終わっておりますが、だいたいほぼこのあたりで推移しております。こういう具合に自分の大学の位置を知りながら、調査の結果を検討できるということです。

北大のアセスメント・ポリシー

教育の質の保証のためには、まずアセスメント・ポリシーにこの実施体制を明記しておきまして、今日のお話のタイトルになっておりますチェックリストに実施方法を入れます。定期的に実施して、これを教育改革の実施組織に渡しまして、それを参考にして教育改革を実施することが期待されるわけです。北大ですが、北大は一昨年度に大学全体としてのアセスメント・ポリシーを設定いたしました。ここには、実施体制としては各学部、研究科がやります。何をやるかというのはチェックリストに書きます。それから、分析はある部分は総合 IR 室が支援しますということが書かれております。

学部研究科ごとのアセスメント・ポリシーは昨年度の末に設定されまして、これはサンプルです。理学部のサンプルをここでお示ししております。このアセスメント・ポリシーとチェックリストは北大のホームページに入っております、どなたでも見るできるようになっております。理学部を見ると、実施体制の責任者は学部長、実施するのは点検評価委員会です。実際の具体的な内容はチェックリストによる。ここでチェックリストをお示したいところなんです、ポリシーについては、各学部そんなに変わりはございませんが、チェックリストは、学部によって違います。ここでは理想的なものを紹介させていただきます。北大の各学部、研究科のチェックリストはこのうちからいくつかを選んで抜き出して記述されているとお考えください。具体的にお知りになりたい場合は、ホームページに入ると見ることができます。

ここに挙げてありますのはアセスメントの対象になるもので授業評価アンケート、成績評価、これは学生さんが授業を評価するわけです。この成績評価というのは、教員が学生さんを評価する。それから達成度の点検。これは教員が学生さんの成績等によりましてディプロマポリシーの達成度を確認する。ここにこう書いてあるからといって、このツールであります「e ポートフォリオ」ができていないかというと、これは残念ながらできてない。それから 1, 3 年生の学修調査、卒業時調査、卒業生調査、企業調査、このあたりのところは総合 IR 室が実施して分析結果を各学部にお返しするという仕組みになっております。学部によっては外部アドバイザーの会議があったり、それからカリキュラムの点検をしたり、あるいは総合評価をしたりということが入っております。

対象とか、周期とか、手法とか、評価者、こういうのがチェックリストの中には書かれているわけです。今日の話にもありましたが、個人の学生さんの達成度を評価するためには、こういう科目別のディプロマポリシーの寄与度などを表にしたものがあれば、学生個人の評価ができる。これも「e ポートフォリオ」があればできるんですが、北大では実際にこれを運用しているわけではありません。それからもう 1 つ、IR のアンケートでディプロマポリシーに含まれますコンピテンシーをどうやって測定するかという話になります。これはちょ

っと細かいんですが、こちらの枠に文学部のディプロマポリシーが入っています。

こちらが総合 IR 室で実施しております IR コンソーシアムの 100 問にわたる質問の内容です。簡略化された内容がここに書かれておりまして、例えば、文学部のディプロマポリシーの 1 ですと、この設問、それからこの設問、この 4 つの設問が関係しているということがこの表で分かります。総合 IR 室ではこの表をお持ちするだけではなくて、実際にこの部分のアンケート結果が、例えばほかの学部に比べてどうであるという評価をいたしまして、ここで文書で表して、お持ちするという仕組みになっております。

結果の活用

このチェックリストの結果ですが、結果をどうすればいいかという質問をよく受けますのでまとめておきます。いろいろな分析をするんですが、基本的に公開するわけではない。ただし、先に進んでおりますアメリカなどを見ると、他校に比べていいデータというのを積極的に公開して、いい学校ですよという宣伝に使うわけです。公開して不利になるデータは公開しない。ただし、これは上のことと関係ありまして、これが分かった時点である制度改革をして、その制度改革をしているので大丈夫ですという場合には、ネガティブなデータを使う場合があります。データは学内で教育改革のために用いられるのが基本的な在り方になります。

こういう結果をどうするか。その前に文科省のここ 4~5 年の動きを見ると、何を期待しているかが分かります。1 つは教学 IR 組織の設置。それから、有能な教職員の配置。国立大学にはこれは聞かれてないんですけど、私立大学の評価のリストの中にこういう専門の職員、あるいは教職員を置いているかどうか。その教職員が IR に関する研修、教育を受けているかどうかというチェック項目があります。ということは、それを期待しているわけです。それで、アセスメントの体制を明文化すること。それから、本当の狙いはこの 2 つではなくて、それによって持続的な教育改革の制度化をすることが期待されています。

北大の場合でございますが、この 20 年ぐらいで、最初のころは IR ではなくて主に授業評価アンケートで得られた情報ですけど、北大だけではなくて日本の大学教育の課題としていろいろなことが分かってきました。外国語教育とか、幅広い教養とか、コンピテンシーの中ではリーダーシップとか、コミュニケーション力、こういうのを社会といいますか、企業側は求めているわけです。

北大の場合は、高等教育推進機構あるいは教育改革室がこういう分析の結果を受けまして、今まで何をしてきたか。例えばこういう外国語教育とリーダーシップ、コミュニケーション力を付けさせるために、新渡戸カレッジとか、新渡戸スクールを設置して、通常のカリキュラムとは別にこのような力を付けるコースが、運用されています。外国語教育については来年度から再編されますが、さらに大きな変更を検討しているところ です。

幅広い教養につきましては、これは古くからやっていますが、大学院共通授業科目。こちらは学部で最近始めました、専門横断科目。いずれの場合も特定の学部あるいは大学院で開かれている講義に、ほかの学部生、大学院生が参加することができるという仕組みです。それから、これらに関連する教育ができるような、先生方に対する FD を実施してまいりました。こういう IR の組織だけじゃなくて、成果を解決策に結び付ける対策。これが重要なポイントかと思います。

まとめですが、最終的にはアセスメント・ポリシー設定の目的は、教育改革を持続して実施できる体制の

構築です。そのためにこういうチェックリストの設定と、それから IR 組織の設置が必要になってきます。北大の状況で申し上げますと、これはやっぱり必要で、各大学院の先生方は研究と教育で忙しいので、データが出て分析するような手間、あるいは費用を掛ける余裕がないというのが、北大での実情です。そういうところを支援するために独立した組織があることが望ましい。各学部においては、やはり多くの資源は実際の運用、アクトの部分に投入すべきで、チェックの部分はここで詳しくお話をしておりますが、できるだけ学部の大きな負担にならないように設定することが望ましいということです。ただし、現状というのは北大の場合ですと 3～4 年前の話ですが、それよりも拡大されたチェックの機能というのが今、必要とされているかと思っています。これは参考文献です。私の発表をこれで終わらせていただきたいと思います。

これで私を含めて 4 名の発表が全員終わりました。15 分ほど休みをいただきまして、35 分から皆様のご質問にお答えしたいと思います。最初にご説明いたしましたように、ご質問のある方はお配りしております質問用紙に質問事項を記入してください。記入いただいた質問用紙を会場後方の出入り口付近にあります回収箱に入れていただきますよう、お願いいたします。

2019.8.30 北海道地区IDEセミナー

アセスメント・チェックリスト の利用

北海道大学 高等教育推進機構 副機構長・教授
総合IR室教学部門長
細川敏幸

あらすじ

- ・アセスメント・ポリシー設定の背景
- ・アセスメント・ポリシーの考え方
- ・アセスメント・チェックリスト
- ・IRの利用
- ・何が求められているのか
- ・北大の例
- ・まとめ

そのまえに

- ・アセスメントポリシーはPDCAサイクルのC、最終目標はサイクルの完成。
- ・本来の目的は学生の学習環境の向上を常にはかること
- ・ディプローマポリシーのうち知識や技術は成績でチェックできるが、コンピテンシーを判定することは難しい。
- ・ベンチマークがないと評価できない。
- ・そこで、学生対象の全国共通アンケートを利用する。

背景

平成26年12月22日中央教育審議会答申

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」

(3)大学教育の質的転換の断行

(略) 大学全体としての共通の評価方針(アセスメント・ポリシー)を確立した上で、学生の学修履歴の記録や自己評価のためのシステムの開発、アセスメント・テストや学修行動調査等の具体的な学修成果の把握・評価方法の開発・実践、これらに基づく厳格な成績評価や卒業認定等を進めることが重要である。

背景

・平成24年8月28日中央教育審議会答申
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ
～」用語集

【アセスメント・ポリシー】

学生の学修成果の評価(アセスメント)について、その目的、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針。

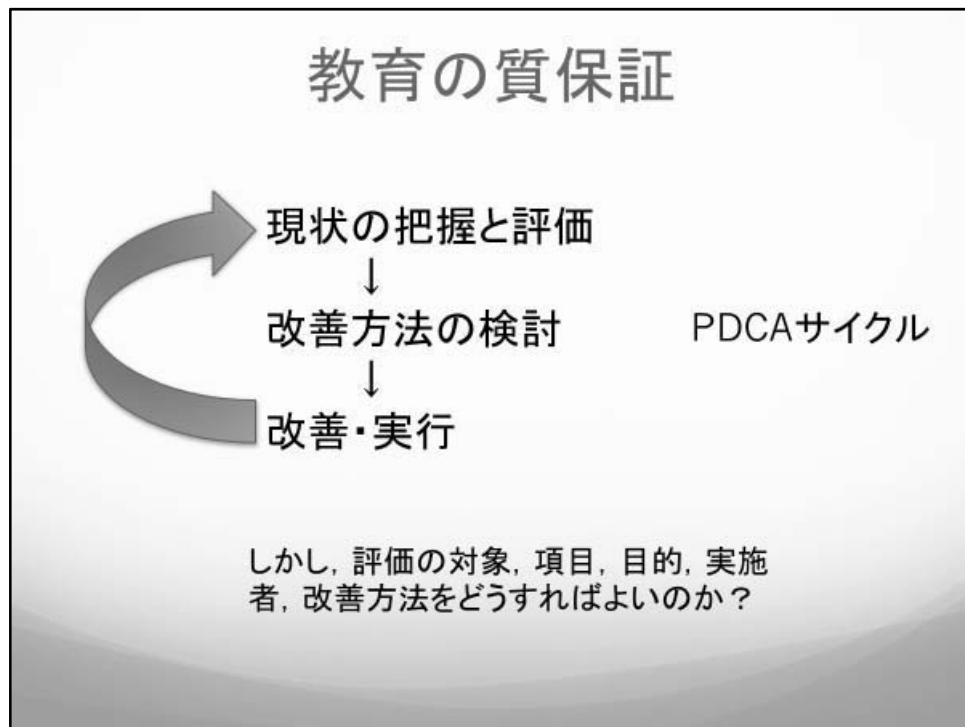
・平成29年3月31日 大学改革支援・学位授与機構質保証システムの現状と将来像に関する研究会
「教育の内部質保証に関するガイドライン」

「教育の内部質保証」とは、大学の教育研究活動の質や学生の学修成果の水準を自ら継続的に保証することを指す。

背景

平成30年から実施される認証評価に関する省令の改正
(学校教育法第百十条第二項に規定する基準を適用するに際して必要な細目を定める省令[平成十六年文部科学省省令第七号])

大学評価基準に定める項目のうち、内部質保証に関することについて、重点的に認証評価を行うものとすることが定められており、次の大学機関別認証評価の重要な評価基準となる



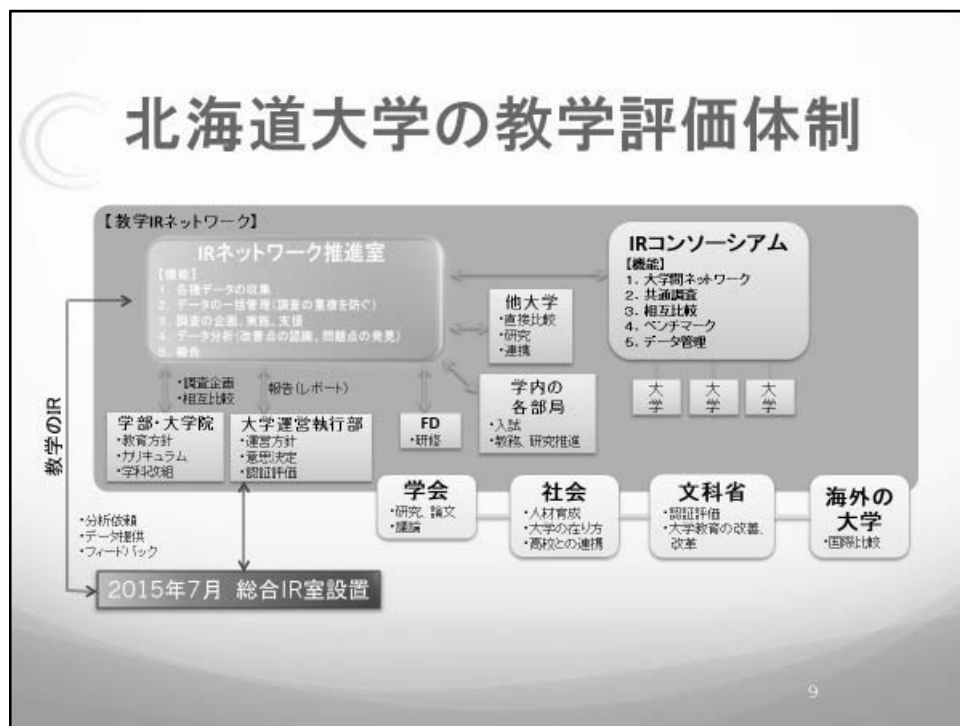
教育の質保証

	手 法	目 的	改 善
教育成果	成績評価, 学習状況調査, 卒業生調査, 企業調査	ディプロマポリシーと比較して充分か	カリキュラム改革
教育方法	授業評価アンケート	適切か	授業改善
学習環境	授業評価アンケート, 学習状況調査	良好か	環境改善

調査対象	在学生	卒業生	企業
------	-----	-----	----

評価の比較	学内の学部間	学内の学年間	学外の大学	国際比較
-------	--------	--------	-------	------

青字の調査→教学IRの手法



IRとは何か？その歴史

- IR: Institutional Research
- 広義では大学の教育、研究、管理運営すべての分析を意味する。
- IR は組織の企画、政策策定、意思決定を支援するような情報を提供すること(Saupe, J.L. 1990)
- ここでは、教育関連のIRのみを扱う。教学IR

組織的IRの歴史—米国

- 共通学生アンケートによる間接評価：インディアナ州立大学とUCLAがそれぞれ中心になり700校程度の大学が参加して、共通アンケートを実施。
- UCLAのHigher Education Research Institute (HERI) : Cooperative Institutional Research Program (CIRP) のフレッシュマン調査1966年開始
<http://www.heri.ucla.edu/>
- インディアナ州立大学: NSSE (the National Survey of Student Engagement), 1999年開始:
<http://nsse.indiana.edu/>

組織的IRの歴史—日本

- 2004, 2005, 2007, 2009年 山田ら
CSS (College Senior Survey), CIRP → JCSS (Japan College Student Survey)
- 2008年 山田ら JFS (Japanese Freshman Survey), JJCSS (Japanese Junior College Student Survey)
- 3つをまとめて JCIRP (Japanese Cooperative Institutional Research)
- 2009年 4大学による連携事業開始 (北大, 同志社大, 大阪府立大, 甲南大)
- 2012年 8大学による連携事業開始 (4+琉球大, お茶の水女子大, 関西学院大, 玉川大)
- 大学IRコンソーシアムの活動も開始 (現在60大学, 8万名が参加)

組織的IRによる間接評価の仕組み

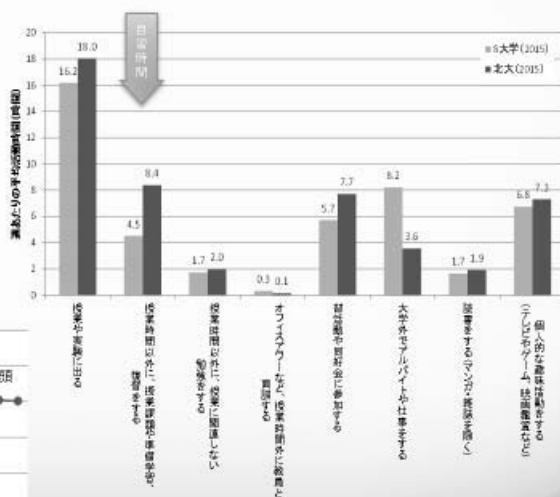
- CIRP:年会費\$825+\$3.26×調査数。
- 1900の大学から1500万人が参加。
- NSSE:年会費\$2000~\$8000(学生数500~1200以上)。
- およそ600の大学から32万人が参加。
- 大学IRコンソーシアム:年会費30万円
- 52の大学からおよそ3万人が参加。

他大学との比較の例ー自習時間

- ・認証評価
- ・教務関係への各種報告
- ・授業担当者への周知

8大学連携事業による調査結果

→ 本学の自習時間は、8大学全体と比較して、1週間あたり約4時間長い。



← 学生による授業評価アンケート結果
【授業1回あたりの平均自習時間】

教育の質保証のためには

実施体制: アセスメントポリシーに記述, 明示。

実施方法: チェックリストに明示

実施: 定期的に

活用: 教育改革実施組織に分析結果を渡す。

当該組織は, それを参考教育改革を実施。

北大の例

大学としてのポリシー(設定済み)

(目的)

(1) 北海道大学では, 各学部・研究科等で定める学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)で示された教育目標への到達度を高めるために教学アセスメント(教育に関する各種データ・資料等の収集, 分析, 点検, 評価)を実施する。

(実施体制)

(2) 各学部・研究科等は, アセスメント・ポリシーを定める。

(3) 各学部・研究科等は, 学位授与の方針を定める学科, 専攻等ごとに, 具体的な評価方法等をアセスメント・チェックリストにより明示する。

(4) 各学部・研究科等は, 教学アセスメントを実施するための組織を置く。

(5) 各学部・研究科等は, 総合IR室の支援を受けて, 教学アセスメントを定期的に実施する。

(実施及び分析の支援)

(6) 総合IR室では, 学修状況調査, 卒業生調査, 企業調査(就職先調査)等を総括し, 実施するとともに, それらを総合的に比較・分析する。

(7) 総合IR室が実施する調査等のデータ及びその分析結果は, 各学部・研究科等の教学アセスメントに活用する。

(8) 各学部・研究科等が実施する調査等の分析については, 当該学部・研究科等の要請に基づき総合IR室が支援する。

北大の例

学部・研究科としてのポリシーのサンプル(理学部)

(目的)

(1) 理学部では「北海道大学アセスメント・ポリシー」に基づき、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)で示された教育目標への到達度を高めるために教学アセスメントを実施する。

(実施体制)

(2) 理学部の教学アセスメント実施責任者は、学部長とする。

(3) 理学部の教学アセスメントは、理学部点検評価委員会において実施する。

(実施及び分析)

(4) 理学部の教学アセスメントは、別に定めるアセスメント・チェックリストにより実施する。

(5) 評価結果を参考とした教育改革の内容は、積極的に公表する。

(6) 教学データの取り扱いについては、本学の関係規程等を遵守し、個人情報等の保護につとめる。

多くの調査を併用するために チェックリストの作成

A学部 B学科 アセスメント・チェックリスト (例)

A学部B学科の学位授与水準(DP)

DP1...について実施できる。

DP2...について無理が判断できる。

DP3...に関する資料に努力を怠っている。

番号	名称	実施時期	周期	対象	内容、質問項目等	手法	評価者	結果の活用方法	実施者
1	授業アンケート	7月、1月	毎年	2～4(各)年生	授業の満足度・授業の理解度・学習状況	質問紙	学生	結果を学内に公表し、教員に教育方法改善の指針を与える。	A学部
2	成績評価	4月、9月	毎年	2～4(各)年生	成績の点検	履修指導時に点検する	B学科学生指導関係教員	成績をもとに履修指導を行う。	A学部B学科
3	達成度点検	4月、9月	毎年	2～4(各)年生	成績評価によるDPの達成度確認	履修指導時に達成度表により達成度を点検する	B学科学生指導関係教員	達成度を表すリーダーチャートをもとに履修指導を行う。	A学部B学科
4	1、2年生学籍調査	12月	毎年	1、2年生	学習状況・コンセンサスの習熟度	質問紙	学生	教職員に開示して今後の教育制度改善参考とする。	総合研究
5	卒業時調査	2～3月	毎年	4(各)年生	カリキュラム、卒業研究の満足度等	質問紙	学生	質問項目のカリキュラム改善を行う。	A学部
6	卒業生調査(CB/CG調査)	9月	毎年	卒業5.10.15年目の卒業生	大学教育の有用性と現在の状況	質問紙	卒業生	教職員に開示してカリキュラム改善の参考とする。	総合研究
7	企業調査(就職先調査)	随時	〇年に1回	卒業生の就職先	企業等からのアドバイス	質問紙	企業等の職員	評価に基づき、カリキュラム改善を検討する。	総合研究
8	外部アドバイザー会議	随時	〇年に1回	教育全体	社会、企業からのアドバイス	討論	外部アドバイザー	アドバイザーの提言に基づき、カリキュラム改善を検討する。	A学部
9	DPによるカリキュラム点検	随時	〇年に1回	カリキュラム	DPを達成できるカリキュラムになっているかの点検	テンパリング、カリキュラムマップなどによるDPとカリキュラムの相互参照	B学科学生指導関係教員	DPとカリキュラムのバランスが適い場合は、いずれかを創設する。	A学部B学科
10～〇	...	...	...	...	...	...	...	...	...
	総合評価	4月	毎年	前年度の教学アセスメント全体	前年間に実施した教学アセスメントの結果をまとめる	報告書	A学部C〇委員会	前年の教学アセスメントとその成果を総括する。	A学部

※大学内コンソーシアムの共通アンケートを利用

DPによる学生個人の評価

達成度点検表 3年次

科目名	DP1	DP2	DP3	成績	単位数
一般教育演習	2	2	3	A+	2
力学1	3	0	1	A	2
物理学実験	3	1	2	B	2
電磁気学1	3	0	2	A-	2
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
量子力学	3	0	2		2
合計	92	80	85	GPA	95
目標	100	100	100	3.4	120

- ・作成に手間がかかるが、作ってしまえば自動化できる。
- ・DPの達成度を学生に自己評価させる方法もある。

DPとIRによる組織の評価

	評価項目	評価内容	評価結果	
			達成率	達成率
1年次評価	1. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	2. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	3. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
2年次評価	1. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	2. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	3. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
3年次評価	1. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	2. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		
	3. 入学適性	入学適性の評価は、入学試験の結果に基づき、入学適性の評価を行う。		

データの公開について

- ・すべてのデータを公開することは求められていない。
- ・他校に比べて良いデータは積極的に公開する。
- ・公開して不利になるデータは公開しなくてもよい。
- ・教育改革による対策の実施報告と、ネガティブデータの公開はあり得る。
- ・データは学内で教育改革のために用いられる。

アセスメント結果の利用

文科省の期待するところ

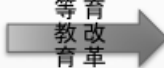
- ・教学IR組織の設置と、有能な教職員の配置。
- ・アセスメント体制の明文化
- ・教育の質を保証するための持続的な教育改革の制度化

北大の場合

IRからみえた日本の大学教育の課題

- ・外国語教育
- ・幅広い教養
- ・リーダーシップ
- ・コミュニケーション力

高等教育
改革推進
機構



解決策

- ・新渡戸カレッジ, 新渡戸スクール
- ・外国語教育の再編
- ・大学院共通講義
- ・専門横断科目(学部)
- ・関連するFDの実施

まとめ

最終目的:有効な教育改革を持続して実施できる体制の構築。
そのため、アセスメント・チェックリスト設定とIR組織の設置が重要。

実際には、多くの資源はActに投入し、
Checkの部分は学部の大きな負担にならない程度に
設定することが望ましい。

しかし、現状よりも拡大されたCheckの機能は必要。

参考文献

- Saupe, J. L.(1990)The Functions of Institutional Research 2nd ed Tallahassee, FL:Association for Institutional Research.
- 山田礼子,「転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際研究」[平成16—18年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)研究成果報告書]
- Jillian L. Kinzie(2005)「米国の学生調査とIRの役割」同志社大学学習支援・教育開発センター第2回講演会

3.5 総合討論

細川: それでは、会場からのご質問に答えていきたいと思います。大変多くの方から質問をいただきまして、ありがとうございます。個別の先生方に対する質問を結構いただいております。斉藤先生が一番多いですね。それでは、1 つずつお願いします。斉藤先生、学修到達ルーブリックの策定時に、水準を設定する際に参考にした指標あるいは資料があれば、教えていただきたいということですが、いかがでしょう。

斉藤: どうもありがとうございます。実は、具体的なまとまった指標とか、きちんとしたデータとかは特にございません。少しだけご紹介しました大学教育センターの中の教育支援室というところで、教職員が一緒になってある程度、えいというふうに案を決めていったと言うところが、実際のところですね。あまりよいお答えではないと思いますが。

細川: たくさんありますので、続けてまいります。「e ポートフォリオ」で学生の自由度を狭めることはありませんかというご質問ですが、学生によってはディプロマポリシーに関して重点の置き方、あるいは学ぶ時期について独自の考えを持っている可能性があります。こういう可視化は学生にプレッシャーを与えないでしょうかという質問です。

斉藤: どうもありがとうございます。おっしゃる通りの側面もあるかと思います。そういったことも含めて、結果の活用、運用についてはまだ検討もされてない段階です。持ち帰りまして、そういった危惧がないかどうか検討した上で、実際に動かしていきたいと思います。どうもありがとうございます。

細川: もう1 通ありまして、これはちょっと細かい。スライド 22 で回答者数が大きく低下しているように思えますが、というご質問です。

斉藤: ありがとうございます。回答者数、そうですね。

細川: 学年を経るに従って、回答者数が少なくなっています。

斉藤: はい。グラフの上の方に行くに従って、この数字が回答者数ですので、ぐっと減っています。これはやはり学年が上がりますと、特に 5 年生とか 6 年生、22 ページは獣医の学生ですが、どうしても学年末や卒業時にこの調査を行う関係で、なかなか全員が回答してくれないというところがございまして、回答者数が減ってしまっているということになります。

細川: 次の質問です。スライド 28 で修得単位に基づくディプロマポリシーの達成と、スライド 22 にあります自己評価との対応はどうなっているのでしょうか。

斉藤: 修得単位に基づいて、この授業を取ったら DP の何番に対応するというひも付けは、まず学科(本学では正式にはユニットといいます)単位で照会をして、どの科目がどの DP の項目に対応していますかということで、全教員に聞く形でリストを作りました。それがひも付けの方です。そちらとルーブリックの方でしょうか。

細川: 22 です。

斉藤: 自己評価ですね。ありがとうございます。これはまったく関係づけられていません。学生に自己評価をしてもらうときに、特に科目と DP のこういった関係については示していなくて、単純に例えば DP1 を達成したと思うか、思わないかというのを何段階かで評価してもらっているだけです。授業とのひも付けとまったく独立にやっているの、関係がない状態になってしまっています。

細川: それでは、続きまして石川先生、いくつかご質問が来ていますのでお願いします。教学 IR 委員会の構成メンバーを教えてほしいということです。

石川: 基本的には学長がトップではあるのですが、副学長 2 名と教員部長、具体的には教務部長、就職部長、学生部長、広報入試部長、あと担当の課の職員で実務を行う者が 1 名、分析を行う者で、正規でコンピューターに詳しい者を一昨年度採用しまして、その者が 1 名。そういった構成です。

細川: もう 1 つです。これもディプロマポリシーに倫理を挙げているんですが、というのは、これは質問者の方だと思いますが、その評価に苦慮しています。何かいいアドバイスはありませんか。

石川: 私どもの大学のポリシーもいろいろ俯瞰してみますと、非常に抽象的な表記がなされております。そこをうまく表現の中からできるだけ具体性を持ったものに置き換えて、それを評価するということができればいいかなとは思っています。が、おのおのの学部学科にお願いしたディプロマポリシーが、どうしても抽象的だったり、それこそ気持ちの問題といいますか、本人に内在化する意識、そういったものまで述べている部分もあります。そこは非常に難しい。それは本学でいいますと学長室会議あたりで、ディプロマの検証というのは毎年度、行っています。その中で、より具体性を持つようにという指示はしておりまして、年々そういった表現は少なくなりつつあるかなと思います。ですから、そういった内部質保証室などのアドバイスや助言といったものが、おそらく今後役に立つのではないかなと思います。

細川: どうもありがとうございました。北大の IR コンソによる調査に倫理の項目は入っていないんですけど、昨年度から 1 項目だけ加えることにいたしました。倫理的な観点を持って仕事ができるかどうかという簡単な設問ですが。続きまして、石川先生、もう少しお願いします。IR の専任の教員とか、職員の方はいらっしゃいますかというご質問です。

石川: 専任の教員はおりません。たまたま私が昨年度まで副学長をしておりましたので、IR 委員会のトップとしていろいろ分析をしています。合わせて、広報入試部長が統計の専門家ですので、2人でこれまでいろいろな分析をやっていました。先ほど申しましたように、一昨年、情報系の人間で正規の採用をしまして、その職員がそれこそ IR 評価を実際に担うものとして位置付けているということでございます。実際に動き出すのはおそらく今年度から、その職員が分析をかなり専門的に行うという形で動く予定だと思います。

細川: 参考までに、北大も大きな話をしていますが、実は専任の教職員というのは少なく、専任の教員が1人。それから、週3日で雇っている非常勤の方が3名、4人の体制でやっております。石川先生、もう1つお願いします。マクロ的分析を個々の講義や、ミクロ的分析につなげていく具体的な方法がありましたらおうかがいしたいというご質問です。

石川: 今、IR で分析をやっていますが、先ほどちょっと例に示したんですが、特定の科目が実質的に学生にどう影響しているかということを今後深めていこうと思っています。先ほどの例では、ある科目の履修状況が就職にどうつながっているかという例を示しました。今、解析をしているのは、GPA などに影響を及ぼす科目を抽出していくとか、おそらくボトルネックになる科目がもしかしたらある学科や学部においてあるんじゃないかという想定のもとに、いろいろな学生のデータを見ながら、ボトルネック科目というのを抽出できればと考えています。

また、その科目の担当者にそういった情報を提供したり、アドバイスをしたり、場合によっては中身を変えてもらうとか。担当者を代えるというところまでは、さすがにいかないかもしれませんが、そういったことで大学や学部や学科の全体的な学修の成果というのを上げていきたい。あまりにも単位が取れないとか、成績が悪いといった科目をやはり IR としてはきちんと抽出した上でカリキュラムのパフォーマンスを上げていこうということは考えております。

細川: もう1つございます。すみません。プログラミングとかデータサイエンス教育についての具体的な取り組みがありますでしょうか。

石川: 私どもの大学は経済学部があります。経済学部の教員の中には、統計を専門とする教員が一定数おりまして、今、改組をすることを計画しています。その中で社会科学系の学部の中では、データサイエンスの側面を一定程度打ち出していけたらということは考えております。ただ、データサイエンスを教える教員からよく言われるんですが、やはり一定程度学力レベルというのが必要だということで、そこをどう担保するかというのが、改組の計画の中では問題になっております。

細川: どうもありがとうございました。続きまして村本先生、まず同じ質問をお願いしたいんですが、プログラミングとかデータサイエンス教育の具体的な取り組みというのはありますでしょうか。

村本: 情報系の学科とか、電気系の学科のカリキュラムの中にプログラミングはあるんですけども、全体

的な話だと思いますので、そういう観点でいうと、1年生からロボットを動かすロボットプログラミングは行っていたんですが、今年度からは1年生全員にPythonを教えることにしました。あとは2年生、3年生で専門系によってCをやったりだとか、情報系であればJAVAをやったり、情報系ではほとんどいろいろやと思いますけど、あとは専門系によって異なります。

細川: 続きまして村本先生、CBTを項目、反応理論で分析されているとのことですが、これをどう使っているかという質問です。最初はパイロット的に実施して、適切でない問題が出てきたら、それを削除するとか、そういう使い方でしょうか。

村本: 今はまだ始めたばかりなので、分析を始めているところです。最初にできることとしては、良問と悪問をある閾値で判定し、悪問は翌年使わないとか、そういうことはできると思います。TOEICとかでは良問で成績を判定して、新規の問題を若干数入れて、それはその年は判定だけに使って成績評価には使わない。少しずつ新しい問題を入れながら古い問題を捨てていったりしていると思うんですけど、同じような考え方を今後入れていこうということですが、今はまだ始めたばかりです。

細川: それでは、続きまして、各科目の達成目標が非常に細かく設定されていましたが、その科目の合格にはこのすべてを達成することを求めているのか、あるいはそのうちいくつかを達成すればよいのか、これを学生さんにはどのように説明されているのでしょうかという質問です。

村本: シラバスについては、すべてのMCCの到達目標がどこかでひも付いていますので、すべての目標は教えているということになります。定期試験で一題一題すべてそこを確かめる問題を出しているかという、そこはそうではないので、そういう意味ではMCCと、定期試験に関しては必ずしもひも付いてはいません。ただ、CBTについてはMCCとひも付いていますので、今はまだそこまでできていませんが、最終的にはすべての到達目標をクリアしているかどうか、卒業時までにはCBTで確認していくということになります。

ただ、CBTで行うのは、今日説明したレベルが1, 2, 3とありますが、CBTは公式を知っているか、あるいは計算に使えるかというレベル2までしか図ることができません。レベル3以上になると、定期試験やレポートで評価することになりますので、どのレベルをどういうふうに評価するかというのと、またちょっと話が複雑になってくるのですが、そういうことです。

細川: どうもありがとうございました。それでは、私にも質問が来ています。北大生の学修時間を延ばすのは、現実的には難しいと考えておりますが、いかがでしょうかという質問です。学修時間についてはIRコンソーシアムの全国的な平均に比べて北大はよくなっています、2006年から少し上がっています。2006年というのは何をしたかという、教育制度の改革を行った。その後、2011年ですが総合入試を導入しました。これは競争的になる。入って1年後に学部、学科に分かれますので、成績について競争的になるので、学修時間が増えるのではないかと考えたんですが、増えませんでした。

2006年に何をしたかという話をします。これは教養部ですけど、1つは単位の上限設定です。1学

期当たり22単位か23単位しか取れない。こうすることで1科目当たりの自習時間を増やそうという狙い。もう1つ、たぶん効果的だったと思われるのは、相対評価の導入です。特に同じ科目名でたくさん開講されている数学とか、英語、物理学、化学等の科目は、以前は絶対評価で担当の先生がどう考えるかで評価が分かれていたんですが、相対評価にしました。

学生側から見ると、鬼の先生はいくら勉強しても成績が上がらない。仏の先生は勉強しなくても成績が上がったままだ。これが相対評価にすると、クラス全体が一生懸命勉強するということはまずあり得ないので、一生懸命勉強すると成績が上がるんです。たぶん、この辺が効いて学修時間の上昇というのがあったんだろうと思います。IRコンソーシアムの会合で、ほかの大学の先生方からも同じ質問を受けるんですが、北大の場合、思い当たるのはその2006年の制度改革。なるべく成績を公平にしようという改革で、たぶんそれが学修時間に効いているのではないかという具合に思います。

もう時間になりましたので、まだご質問をいただいているのですが。これはちょっと面白い質問だから、皆さんに聞いてみますか。ジェネリックスキル等に関して、いくつかの民間の業者がそれをテストするものを結構なお値段で販売しているんですが、これをどう利用すべきでしょうかというご質問です。お1人ずつ聞いていきますか。村本先生、どう思われますか。

村本: おそらくPROGテストだとか、たぶん、そういういろいろなテストのことだと思うんですけど、確かにお金が掛かる。最初にやってみて現状を知るといいと思うんですけど、それをやり続けることができるかという点と難しいと思います。高専の場合はさっき言ったように51高専合わせてのスケールメリットを生かすことができるので、いろいろなところで、高専の中の会議では高専独自の評価テストを作れないかななどという話をたまに聞きますのでもしかしたら、そういう方向で話が進むかもしれないです。

細川: 石川先生、いかがでしょう。

石川: 本学では導入を検討して、やはり費用面であきらめたという側面があります。導入を検討したのは、ある学部を開設したときに、完成年度まで一定程度成果が問われるわけで、学部を開設したことによって、4年後卒業生がディプロマに相当する力が付いたのかどうかというのを、どう客観的に図るかというときでした。私も大学執行部にいて、学部の開設をした本人たちにはあまりそういった意識がないものですから、であればこういった外部の業者のジェネリックスキルを測るもので、一定程度ベンチマークにはいかがですかという提案をして、私の方で予算要求をしました。結果的に、導入してはどうかといった学部自体があまり乗り気ではなかったということで、予算が付かなかったという経緯があります。

私自身は、一定程度それを入れてみる価値はあるかなと思っておりまして、先ほどちょっと私が例に出させていただいた北海道科学大学さんが導入されているのを何回かいろいろな研究会等で話を聞いたことがあります。できればその科学大学さんがどのような使い方をされているかというのを聞いた方がもしかしたら、この場では最適な答えが得られるかもしれません。

細川: 斉藤先生、いかがですか。

斉藤: 帯広畜産大学の場合、私が教育支援室というところに 5 年間だけですけれども、所属している限りでは、1 度もそのような外部の調査を利用するというのが具体的な検討に上がったことはありません。理由は今すぐに思いつかないのですけれども、代わりに IR コンソーシアムの調査等で、そういったスキルのところも見るができますので、それで本学の場合は足りているのかなというところがあります。仮にそういったものを活用するときには、やはり学生の学修が大事かと思いますので、結果をどうやって学生の動機付けに生かしていけるかなという視点で、教員から結果を参考にしつつフィードバックしてあげたり、アドバイスしてあげたり、そういった活用がいいのかなと個人的には思います。

細川: 北大ですが、北大も私ではないんですけど、研究部の別の先生が試験的に実施したことがあります。それを本格的に使うことには今のところなっていません。いろいろ調べると、IR のモデルにしているアメリカの経験では、先ほどもちょっと説明しましたが、コンピテンシーを図るのは手間とお金が掛かり過ぎる。じゃあ、どうしているかという、先ほど来お話ししている間接評価で学生さんたちに自分で評価してもらって、それを使う。個々の学生さんの評価というのは、そのままその人の能力として判断するのは難しいんですけど、組織としてそういう回答を何十とか、何百名とか、集めれば、組織としての教育力、コンピテンシーに対する教育力は図れるという考え方です。ということで、北大でもコンソのアンケートを利用してコンピテンシーを測っておりまして、市販のアンケートは利用していないということでもあります。

それでは、すみません、ちょっと時間を過ぎてしまいました。これでシンポジウムを終了させていただきます。まだ質問がございますが、後で懇親会もありますので、そこでご質問いただければと思います。それでは、発表された 3 人の先生方にあらためてお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、これで令和元年度の IDE 大学セミナーを終了したいと思います。ちょっと舞台の設定をさせていただいて、閉会のあいさつを北海道大学理事副学長の長谷川晃先生にお願いしたいと思います。

細川: それでは、長谷川先生、よろしくお願いいたします。

長谷川: ご紹介いただきました長谷川でございます。シンポジウムの流れで脇に立ってごあいさつをすれば、それですべて終わりかなと思っていたんですけども、みるみる間に舞台が設定されてしまいまして、かえって緊張してしまっております。まず最初に、今日のこのセミナーにおきまして講演をいただいた先生方、それからシンポジウムにご参加をいただいた先生方に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。それから、この舞台を設定していただきました関係の先生方、また職員の方々にもあらためてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

この閉会のあいさつの中で、私の方に総評的なものを一言ということが当初ございまして、この間いろいろ頭を悩ませておりましたが、なかなか私自身も振り返ってみますと 40 年以上前に大学の学部で授業を受けました。その当時は、私は文系で法学が専攻なものですから、大学の先生は勝手に来て好きなことを言う。学生は勝手に聞いて自分の好きな勉強をする。そういう世界で育っておりますので、何か本当にこれで

教育担当の理事副学長をしていいのかという、そういう気持ちにさえ襲われたところがございます。

いろいろお話を聞いていて、この間のさまざまな評価技術、あるいは教育に関する知識、あるいはノウハウ等の日進月歩の発展の中で、あらためて大学の教育についての質保証ということではございますが、いろいろな評価をうまく加えながら大学のパフォーマンスを上げていくということが問われているのだということを、あらためて実感いたしました。このお話をお聞きしまして、私は必ずしも専門ではないので的を外したコメントになるかもしれませんが、1 つにはこういった評価技法というのはいろいろな種類がまずあるのだと。

これはいろいろな形で、また開発もされておりますし、これからますますいろいろな形の技法が出てくるだろうということなんですけれども、それはいわばお互いの財産として 1 つ汎用可能なものとして共有していくということが、たぶん重要になってくるのではないかと。そういう意味では、こういったシンポジウムであるとか、研究会であるとか、セミナーであるとか、そういう中でさまざまな方法が紹介されて、そしてそういった方法の基本的な精神なり、あるいはそのノウハウなりを共有していくというのは非常に重要なのではないかと、いうことを、まず感じました。

その一方で、しかし、それはそれとして各大学、あるいはさまざまな専攻領域にはそれぞれのいろいろな方針であるとか、特徴であるとか、事情であるとか、そういうものもあります。今風な言い方をしますと、そういった汎用的な技法をどういうふうにカスタマイズしていくか。また各大学、あるいはそれぞれの領域に問われているのだと思いますが、そこはそれぞれの大学なり組織なりで考えていかなければいけないということなのだなと思いました。その点で、大学レベルでも、それから学部レベル、あるいはそれぞれの組織レベルでも、いろいろなとらえ方、技術の解釈の仕方があると思います。それはやはり自分たちでまた考えていかなければいけないのではないかと思います。

1 つだけ申し上げたいと思ったのは、私はたまたま図書館の館長もしております、そちらの領域で、ちょっと話が飛びますけれども、オープンサイエンスということが最近によく言われております。それは、図書館は単に資料のアーカイブではなくて、さまざまな研究データも含めたいろいろな学術データの発信基地であって、それによって、今、広く社会にそれらが共用されて、最終的にイノベーションというものが起こっていくだろう。

そういう見通しのもとでオープンサイエンスということがいわれております。それは、いろいろなデータを公開していくということでありますので、今回のテーマになっている学修成果の可視化につきましても、基本的には先ほど申し上げたように、できるだけ共有できるものを共有して、それをもとにして各大学あるいは組織がまた工夫をしていく。そういう時代がいずれ来るのかなと思います。

今はまさに変化の時期の気がしまして、大きくそういった学修成果の評価法も変わろうとしているという感じもいたします。いずれ 10 年後とかになりますと、またその辺の事情はだいぶ変わってくるのかなと思います。今、いろいろな試行錯誤が皆さんのそれぞれの大学等で行われているということで、そういった事例を紹介していただきながら、こういった議論の機会を設けるということは、それ自体非常に意義のあることではないかと感じました。という次第で、簡単ではございますけれども、以上を持ちまして閉会のあいさつとさせていただきますと思います。本日は皆様のご参加、ご議論、誠にありがとうございました。(拍手)

細川: 長谷川先生、ありがとうございました。皆様、本日はどうもありがとうございました。本セミナーは、来年

度もほぼ同じ時期, 8 月末の金曜日に開催する予定です。ご予定を入れておいていただけると幸いです。
それでは, これで令和元年度の IDE 大学セミナーを終了いたします。どうもありがとうございました。(拍手)